

北海道の基礎を築いた指導者たち

<第2冊>

「HOMAS」ニューズレター 掲載記事 他

北海道開拓使時代の指導者たちの具体的な人物像とその業績を、各種の資料調査をもとに簡潔にまとめたものです。 (執筆担当 中垣 正史)

<発行日>

- | | |
|----------------------------------|-----------------------|
| ⑪ 北海道及び 11 か国 86 郡の名付け親 松浦武四郎の生涯 | (NO. 56) 2009. 3. 20 |
| ⑫ 開拓使顧問・北海道開拓の父ホーレス・ケプロン | (NO. 57) 2009. 7. 31 |
| ⑬ 北海道開拓の恩人 開拓使長官黒田清隆の生涯と業績 | (NO. 58) 2009. 12. 10 |
| * 姉妹提携 20 周年記念 プレ・フォーラム [記録抄] | (NO. 58) 2009. 12. 10 |
| ⑭ 開拓使麦酒醸造所を実現した村橋久成の生涯と業績 | (NO. 59) 2010. 3. 10 |
| ⑮ ケプロンの通訳～開拓使判官 湯地定基の生涯と業績 | (NO. 60) 2010. 7. 31 |
| * 定山溪温泉の開祖—知られざる美泉定山の生涯 | |
| ⑯ 清廉無私の官僚～開拓使大判官松本十郎の生涯と業績 | (NO. 61) 2010. 12. 10 |
| * 札幌市の水道とウィリアム・ホイラーの業績 | |
| ⑰ 寒地稲作の祖～夢を追い続けた中山久蔵の生涯と業績 | (NO. 62) 2011. 3. 15 |
| ⑱ 世界地図に「間宮海峡」の名を残した間宮林蔵の生涯と業績 | (NO. 63) 2011. 7. 31 |
| ⑲ アイヌ民族保護を訴え続けたジョン・バチェラーの生涯と業績 | (NO. 64) 2011. 12. 10 |
| ⑳ アメリカ人宣教師ピアソン夫妻の生涯と滞在 40 日間の業績 | (NO. 65) 2012. 3. 15 |

北海道及び11カ国86郡の名付け親 松浦武四郎の生涯 — 幕末の探検家・6度にわたり蝦夷地を踏査・膨大な著作をのこした「北海道人」 —

■まえがき

江戸中期の蝦夷地は、ロシアの南下政策でロシア船の寄港・上陸が相次ぎ、日露の緊張は、幕府・明治政府にとっては脅威でした。ロシアは、18世紀初めごろから、カムチャッカ半島を開き、千島・樺太を南下して蝦夷地に接近してきます。1792年(寛政4年)には、漂流者大黒屋光太夫を伴ってラクスマンが、1804年(文化元年)にはレザノフが、使節として根室・長崎に通商を要求してきました。一方、幕府の北辺防備の対策としては、1783年(天明5年)幕吏最上徳内をエトロフに、大石逸平を樺太に派遣、そして1798年(寛政10年)幕吏を配置、近藤重蔵をエトロフに派遣、翌年東蝦夷を直轄領とし、1802年(享和2年)函館伊東一円を幕府直轄地として函館奉行をおいています。その後、1811年(文化8年)千島測量中のディアナ号艦長ゴローニン捕縛事件がありましたが、高田屋嘉兵衛の活躍などによって、ロシアとの緊張状態は一時的に緩和されます。他方、寛政・文化年間に間宮林蔵が蝦夷・樺太を探検して、樺太が島であることを確認、また1817年(文化14年)、伊能忠敬は、蝦夷地も含めて日本全国の沿岸測量をして実測図(日本地図)を完成しています。

こんな時代背景のなかで、松浦武四郎(1818—1888)は、16歳の時から全国各地を旅し、名所旧跡などを訪ねて、丹念にその概略や名所・旧跡の様子スケッチやメモなどを残しています。遠く中国・インドを目指すも鎖国制度のため断念。長崎でロシア南下政策の危機を知り、蝦夷地(現在の北海道)を目指すことを決意したといわれます。武四郎は、1845年(弘化2年)28歳、初めて蝦夷地に渡ります。以後探検家として3回、幕府・明治政府役人として3回、合計6回・15年間にわたり、アイヌの人びとの案内を得て、寝起きや食事と共にしながら、海岸線から内陸部まで限なく探検して、記録や地図を書き残しています。ここでは、蝦夷・樺太・千島探検の第一人者として天下にその名を知られた「松浦武四郎」の蝦夷地探検の業績に光を当ててその生涯をたどってみたいと思います。

出身地三重県では、俳人松尾芭蕉、国文学者本居宣長と並ぶ三偉人と称されますが、松浦武四郎の知名度は、生地よりも北海道内の方が高いようです。彼の生地、三重県松阪市小野江町(旧三雲町)が「松浦武四郎記念館」(1994年・平成6年開館)を設立したのは、北海道内の研究者による武四郎の業績の高い評価が大きな影響力になったようです。

■松浦武四郎の生立ち

松浦武四郎は、1818年(文政元年)2月6日、伊勢国一志郡須川村(現在の三重県松阪市小野恵町)の郷土で庄屋をつとめる松浦桂介の四男(末子)として生まれています。幼名は竹四郎で、40才ごろから武四郎と書くようになり、後年、多気志楼の号も用いています。父は、本居宣長の門下として国学を修め、茶や俳諧もたしなむ人物であったようです。武四郎は、7歳で曹洞宗真学寺の来応和尚について手習いや誦経などを習いおぼえています。1830年(文政13年)13歳で、津の儒者平松楽斎の塾に入門、「論語」などを学んで、大きな影響を受けますが、1833年(天保4年)1月平松塾を退塾して家に帰り、2月1日出奔して江戸に下り、山口遇所に「篆刻」を学んでいます。しかし一ヶ月ほどで郷里からの迎えがきて帰郷します。帰途は中山道を通り、迎えの者を先に返して、一人戸隠山・

御岳(3,076m)に登っています。この時山に登る喜びを知り、この16歳の時の経験が生涯の一転機となったといわれます。

1834年(天保5年)9月、諸国遍歴の旅に出ます。近畿・北陸・中国地方をまわり諸名家を訪ねます。四国八十八ヶ所霊場もすべて巡り、さらに九州地方もことごとく踏破して足かけ5年の行路を経て、1838年(天保9年)1月長崎で疫病に罹り周囲の人々の介抱を受けて死地を脱します。3月22歳で出家し、平戸の寺院で住職になります。武四郎白の生涯を通じてこの3年だけが静穏・平安な日々であったようです。この間、壱岐・対馬に渡り、さらに朝鮮の山に登ってみたいと思うのですが、鎖国時代で、朝鮮へ渡ることは当時としては国禁でした。この長崎時代に、いろいろな人びとと交流し、ロシア南下政策の危機を知り、蝦夷地・北蝦夷地(樺太)の探検を決意したのでした。武四郎は10年ぶりで実家に戻り、北方探検に出かける前に、すでに亡くなっていた父の7年忌・母の3年忌法要をすませています。

探検家武四郎は、身長150センチメートルほどの痩せ型・小柄ですが、並外れた健脚の持ち主であったようです。彼は、生来感情の強い人で、「短気で精悍」「強情、負けん気」な性格であったといわれます。武四郎は、小さな羅針盤一つを携行するにすぎず、測量する場合は高い所に立って目測したり、実際に自分で歩いて歩測したといわれます。

■蝦夷地の調査

1844年(弘化元年)1月還俗し、2月蝦夷地を目指して青森まで行きますが、取締りが厳しく断念します。そしていよいよ、翌年から15年間にわたる蝦夷地の探検が始まります。

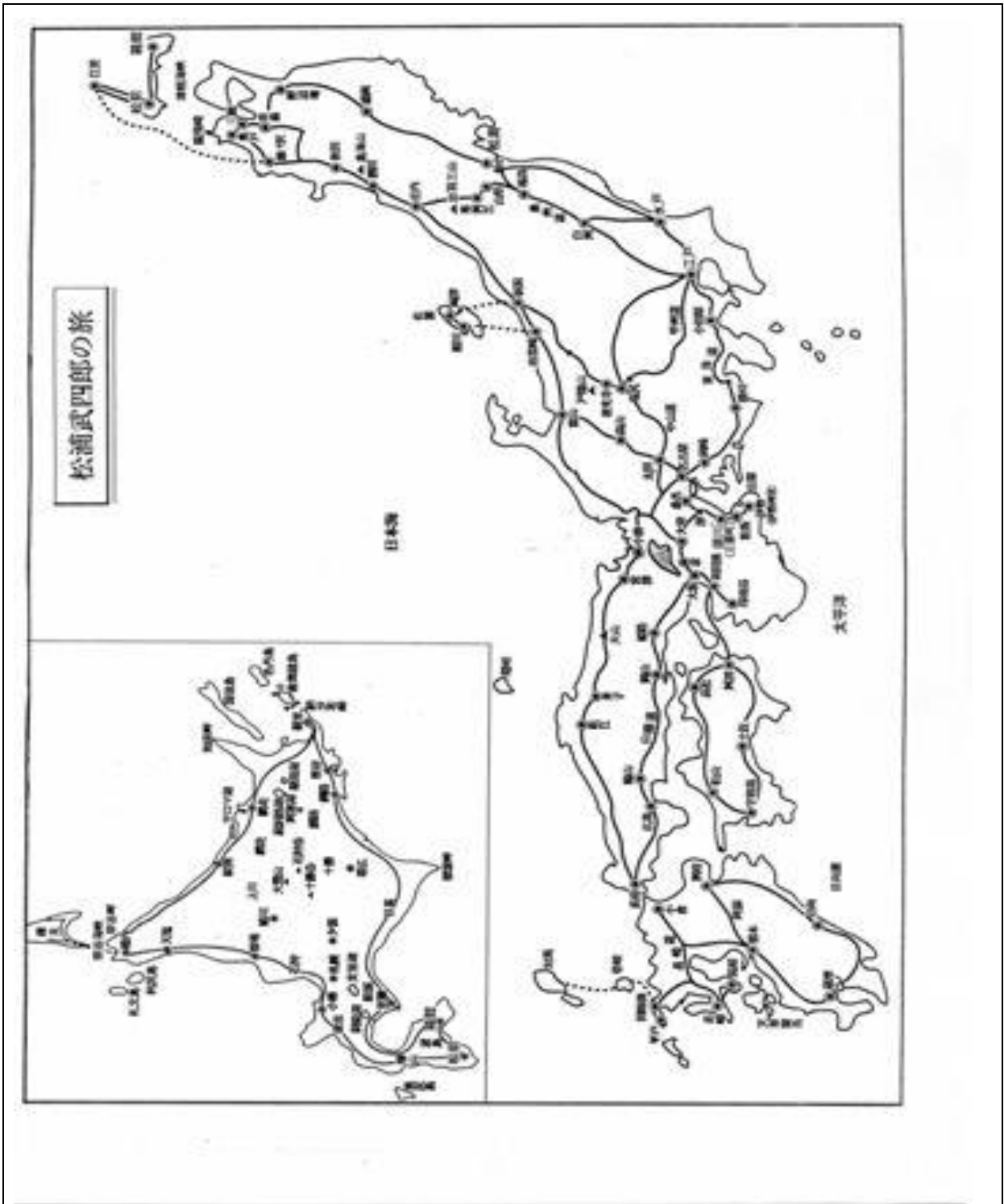
1回目 1845年(弘化2年)4月、28歳、初めて蝦夷地に渡り、太平洋岸地域を歩き知床岬の先端まで到達し、自分の名前を墨書した「勢州一志郡雲出松浦武四郎」という標識を立てています。11月江戸に帰って直ちに「初航蝦夷日誌」の記録整理に精力を傾けます。

2回目 1846年(弘化3年)3月からの二回目蝦夷地調査では、西蝦夷地・北蝦夷地(樺太)などを調査。この間武四郎は、蝦夷地に先住していたアイヌの人びととの交わりを通して、アイヌ語(蝦夷語)を勉強しています。11月江差で頼山陽の四男・頼三樹三郎と会い、冬至の日に「一日百印百詩」の書画会を催しています。翌年北陸を巡って11月中旬江戸に戻り、探検記録の整理と蝦夷に関する著述に専念します。

3回目 1849年(嘉永2年)32歳、三回目の蝦夷地調査では、千島の国後島・択捉島を調査。このときは、武四郎のアイヌ語はもはやほとんど不自由を感じないまでに上達していたようです。

翌1850年(嘉永3年)以降著作に専念し、調査記録「初航蝦夷日誌」12巻・「再航蝦夷日誌」15巻・「三航蝦夷日誌」8巻(合計35巻)を完成します。また「三航蝦夷全図」・「蝦夷語」なども完成。

さらに「蝦夷大概図」を著しますが、これはわが国最初の北海道全図といわれます。しかし、これらの発刊に憤慨した松前藩などからつけねられるようになります。



1853年(嘉永6年)36歳、吉田松陰と海防問題を語り合う

・「初航・再航・三航蝦夷日誌」を水戸の徳川斉昭に献上、松前藩の恨みを買う。

・1854年(嘉永7年)宇和島藩の依頼で下田で、再来航海のペリー一行の様子を調べる。

4回目 その後、幕府から「蝦夷地御用御雇入」の命を受けて、翌1856年(安政3年)、四回目の蝦夷地調査では、北海道の海岸線と樺太を調査。この時、徳川斉昭から餞別五両をいただいています。「丙辰蝦夷日誌」・「東西蝦夷場所境取調書」・「蝦夷ばなし」 「竹四郎廻浦日記」31巻・「東西蝦夷山川地理取調日誌」85巻・「東西蝦夷山川地理取調紀行」24巻・「北蝦夷日誌」・「蝦夷地名奈留辺志」3冊・「近世蝦夷人物誌」9巻などを著しています。

5回目 さらに、1857年(安政4年)、五回目の蝦夷地調査で、石狩・天塩地方を調査。

6回目 1858年(安政5年)、六回目の蝦夷地調査で、北海道の海岸線と十勝・釧路・日高地方を調査。

翌1859年(42歳)、四～六回目の調査報告書を幕府に提出。蝦夷地の地図は、伊能忠敬(1745～1818)・その門弟間宮林蔵(1775～1844)、近藤重蔵(1771～1829)等の測量により海岸線はほぼ正確になっていましたが、武四郎の努力により内陸部の状況を詳細に図示した『東西蝦夷山川地理取調図』28枚が完成します。これは、海岸線・内陸部までを詳細にあらわした蝦夷地地図としては最大のもので、約9,800点のアイヌ語地名を収録した画期的な地図でした。「戊午蝦夷山川地理取調日誌」61巻、「蝦夷漫画」2冊の刊行。そしてアイヌ文化を紹介する本なども出版します。

またこの年、深川の儒学者梅園のもとに学問に通っていた武四郎(42歳)を見染めたという、旗本福田氏の娘「とう」と9月18日結婚しています。1860年(万延元年)～1864年(元治元年)には、蝦夷地の様子をわかりやすくまとめた紀行文などを出版しています。

この、六度に及ぶ詳細な調査では、先住民であるアイヌの人びとの協力を得て、その成果を調査報告をまとめ、寄稿や地図として出版、蝦夷地がどのようなところか、アイヌ文化のすばらしさを伝えることに一生懸命努めています。武四郎は、周到綿密な記録メモ・写生などをもとに、その生涯にわたって膨大な記録と文書、日記・書簡と絵図、数多い浩瀚な著書を残しています。実地調査をもとにした武四郎の著書は、常にアイヌ側の視点で書かれており、和人の過酷な差別・搾取の非道をきびしく糾弾しています。武四郎は、当時の場所請負人であった飛騨屋・村山伝兵衛・鷹田屋、そして柏屋藤野喜兵衛らが、多くのアイヌ人を遠い漁場などへ長期的に強制連行して酷使し、女を慰安の道具としていた悲惨な状況に対する憤りを書き記し、松前藩にも訴えています。

■開拓使判官時代

武四郎は、1868年(明治元年)4月、明治政府から徴収士函館府判事に任命され、蝦夷地探検の業績により一万五千疋を賜っています。さらに、翌2年5月蝦夷地「開拓御用掛」を拝命、7月開拓大主典拝命しています。

さて、明治政府にとっては、ロシアの脅威にさらされた蝦夷地の防備と開拓は急務でした。1869年(明治2年)7月、「箱館府」(明治2年9月、「箱館」を「函館」と改めます。)にかえて開拓使を設置しますが、初代長官には元佐賀藩主鍋島閑叟、開拓次官には元箱館府総督清水谷公考、開拓判官としては、札幌本府建設の先覚者島義勇、後の初代北海道長官岩村通俊と並んで、幕府時代からの蝦夷通といわれた武四郎(52歳)も開拓判官(従五位)に任命されます。そして8月15日武四郎の提案をもとにして、蝦夷地を「北海道」と改称し11ヵ国86郡を置きます。

「北海道」命名について、武四郎は、「北加伊道」「日高見道」「海北道」「海島道」「東北道」「千島道」の6案を提出しています。11カ国86郡については、次のとおりです。

渡島国(6郡)―亀田・茅部・福島・津軽・檜山・爾志

後志国(17郡)―久遠・奥尻・太櫓・瀬棚・島牧・寿都・歌棄・磯屋・岩内・古宇・積丹・
美国・古平・忍路・高島・小樽・余市

石狩国(7郡)―石狩・札幌・夕張・樺戸・空知・雨竜・上川

天塩国(8郡)―厚田・浜益・増毛・留萌・苫前・天塩・中川・上川

北見国(8郡)―宗谷・利尻・礼文・枝幸・紋別・常呂・網走・斜里

胆振国(8郡)―山越・虻田・有珠・室蘭・幌別・白老・勇払・千歳

日高国(7郡)―沙流・新冠・静内・三石・浦河・様似・幌泉

十勝国(7郡)―広尾・当縁・大津・下川・河東・河西・十勝

久摺国(8郡)―白糠・足寄・久摺・善報・阿寒・網走・上川・厚岸

根室国(5郡)―花咲・根室・野付・標津・目梨

千島国(2郡)―国後・択捉

この「北海道」の命名は、武四郎の提出した六案のひとつ、「北加伊」をもとにしています。それが「北海」となり、東海道や北陸道と同じく北海道に決定したのです。武四郎は、北海道の名前、国名(支庁名)、郡名をすべてアイヌ語に基づいて考えます。明治政府は、武四郎の考えた六案の名前の中から「北加伊道」を採用し、「北海道」と決定したのです。武四郎は、この命名について、「かい」はアイヌ語のカイ＝この土地で生まれた者、「北のアイヌ民族が暮らす大地」という意味を込めたといわれます。また、国名・郡名についても、ほとんど武四郎の原案通り採用されています。

武四郎は、「蝦夷通」の開拓判官として、開拓使長官にたいして、松前藩をほかにくつすこと・場所請負人制度を廃止すること・北海道を分割して諸藩に支配させることなど3点を主張していますが、聞き入れられず、また、先住民アイヌに対する差別・搾取などの開拓政策を批判して、その救済に努力しましたが、結局松前藩の居座り請負人の復活に失望して1870年(明治3年)3月、52歳の時、在任わずか7ヶ月で開拓使判官を辞職、従五位を返上します。明治政府は、武四郎の長年の功績を讃えて表彰(終身15人扶持)しています。

■趣味に生きた晩年

官位を辞した武四郎は、馬場先門の岩倉具視右大臣邸内の御長屋に寓居しましたが、1873年(明治6年)5月、神田五軒町に敷地600坪をもとめますが、家は20畳(6畳二間・4畳半・3畳)ほどの小さなものでした。後に隠居所と書齋を建て増します。「草の舎」という一畳敷きの書齋は、全国の社寺の廃材を集めて建てたものでした。この「一畳の書齋」には半間ほどの床の間・造り付けの戸棚や書棚・明かり窓などの工夫があり、武四郎の好きな空間であったといわれます。広い庭はほとんど自然のままの庭を好んだようです。長年一所不住の探検家の人生を生きた武四郎にとっては、初めての自分の家でした。ここで、武四郎は、一市井として、北海道関係の書物執筆に専念したのでした。

武四郎は、探検家として膨大な紀行文を執筆しただけでなく、詩歌を詠み、絵画をよくし、骨董品収集、考古学や天文・地理・植物・民俗学にも通じていました。また、天神信仰をおこなう

などさまざまな活動をしています。当時化け物のすむ山として恐れられた大台ヶ原山(1,695m)を終焉の地と定めて、1885年(明治18年)、68歳から70歳にかけて、3度にわたり調査しています。1887年(明治20年)、西日本各地をまわり、70歳にして富士山にも登っています。

1888年(明治21年)2月4日、下谷に住む親友鷲津毅堂宅で脳卒中で倒れて人力車で自宅に運ばれますが、10日午前4時東京神田五軒町の自宅で死去。享年71歳の生涯でした。12日浅草称福寺に埋葬されましたが、後に染井霊園に改葬されています。明治天皇は特旨をもってお供物料を下賜さ

れたということです。なお、遺言により、奈良と三重の県境にある大台ヶ原に追悼碑(分骨碑)が建てられています。

現在、松浦武四郎の銅像は、釧路市の幣舞公園に、道案内の老アイヌを従えて探検記をメモしている姿で建っています。武四郎の3回目の釧路調査(1858年・安政5年3月24日)からちょうど100年目にあたる1958年(昭和33年)11月に、阿寒国立公園観光協会有志によって、「松浦武四郎蝦夷地探検像」(中野五一製作)として建立されました。11月3日の除幕式では、東京から駆けつけた武四郎五代目の松浦一雄氏が除幕の綱を引き、釧路市長をはじめ多くの市民・30数名のアイヌも参列しておこなわれたようです。碑文では武四郎が阿寒の地を調査し景勝を紹介した功績を讃え「阿寒国立公園の父」として顕彰しています。釧路市は、武四郎に敬意を表して昭和7年、西幣舞町を「松浦町」と変更しています。また、留萌郡小平町のにしん文化歴史公園に銅像と歌碑(平成8,5)があり、天塩町鏡沼海浜公園にも遠くをみつめる武四郎の銅像と歌碑(平成9,5)が建立されています。また、「一暈の書齋」は、東京都三鷹市の国際基督教大学敷地内に移築保存され、国の登録文化財となっています。

「松浦武四郎蝦夷地探検像」台座正面の碑文

北海道及び釧路の名付け親 松浦武四郎は幕末に未開の地蝦夷探検の急務を説き一身を賭して苦難と闘いアイヌ民族の協力を得て東西蝦夷山川地理取調圖等蝦夷地開拓計畫の基礎を作成し為政者に供して諸種の献策を行いその促進をはかる

安政五年(一八五八年)阿寒国立公園地帯を探查して久摺日誌を記述せしより百年目に當りクスリ曾長メンカクシの砦趾たりしヌサウシチャシコツに像を建て北海道開発先覚者阿寒の父として永えに顕彰せんとするものである。 昭和三十三年(一九五八年)

阿寒国立公園観光協会

釧路市公民館長 丹葉 節郎撰

北海道g 悪芸大学教授 山口 野竹書

釧路市の幣舞公園にある松浦武四郎の銅像(昭和33年・中野五一作)：写真提供釧路市地域史料室

* 中野五一(1897-1978)は、富山県出身、小樽・北見ゆかりの彫刻家。鉄道の父クロフォード像など。

<主な参考文献及び参考資料>

- 「松浦武四郎蝦夷への照射」(日本の旅人⑭) 更科源蔵著 淡交社 □ 2004, 7, 23~8, 22 第58回特別展「松浦武四郎—時代と人びと」北海道開拓記念館 □北海道青少年叢書 北国に光を・掲げた人びと(26)「北海道の名づけ親 松浦武四郎」合田一道著 北海道科学文化協会 □「明治の群像8 開拓と探検」高倉新一郎編 三一書房 □ 三重県松阪市・松浦武四郎記念館資料 □「ほっかいどう百年物語」STV ラジオ編 中西出版 □「開拓につくした人びと第3巻」北海道総務部文書課編集 理論社刊 □「炎の人 松浦武四郎の生涯」本間寛治著 七賢出版 □「松浦武四郎」吉田武三著 吉川弘文館 □「北海道の名づけ親 松浦武四郎」合田一道著 □「北海道の歴史」榎本守恵著 北海道新聞社
- 「釧路碑文手帳Ⅰ」釧路新書22 釧路古文書研究会著 釧路市 □ 松浦武四郎研究会作成資料 □インターネット資料

開拓使顧問・北海道開拓の父 ホーレス・ケプロン

—滞日3年10ヵ月・3度にわたる長期北海道視察調査・膨大な「ケプロン報文」—

■まえがき

1869年(明治2年)7月、明治政府の開拓使設置により、北海道の本格的な開拓がスタートしますが、1870年(明治3年)5月、開拓次官となった黒田清隆(以下、「黒田」)は、北海道の開拓や農業経営の模範を米国に求めて、1871年(明治4年)4月、マサチューセッツ州出身の米国農務省長官(農務局長)ホーレス・ケプロン(1804-1885、当時67歳)を開拓使顧問として招聘しました。同年8月、来日したケプロンの指導で、早速東京の青山・麻布に官園が設けられ、北海道に導入する作物の試作、家畜の飼育や農業技術者の養成などが行われます。ケプロンは、滞日3年10ヵ月、その間3回にわたり、道内各地の視察・調査に来道し、詳細な「ケプロン報文」を作成しています。

「報文」は、北海道の基本的な開発計画を提案し、札幌を首都とすること、農業開発のために高等教育機関を設置することなどを明治政府に進言しています。このケプロンの進言により、マサチューセッツ農科大学長ウィリアム・S・クラークを迎えて札幌農学校が開校(明9,8,14)されます。ケプロンの提言は、すべて、北海道開拓の基礎事業、開発すべき諸産業の振興に関するものであり、その後の北海道の開拓・開発の重要な指針となるものであったといわれています。

2010年、北海道・マサチューセッツ州姉妹提携20周年を迎えるにあたり、北海道開拓の父ともいわれるホーレス・ケプロンの偉大な業績とその生涯を今一度検証してみたいと思います。

■ホーレス・ケプロンの生立ち

父ドクター・セス・ケプロンは、1656年ころ、英国から移住。独立戦争(1775-1783)が起きると1781年春陸軍に入隊。ハドソン川で実践に参加、ニューヨーク司令部に配属。1790年除隊、マサチューセッツ州アトロボロ(ボストンの南方100キロ余)に戻り、再び医学の勉強をします。1790年9月、アトロボロの医師ベザリール・マンの娘ユニース・マンと結婚。…1804年8月31日、父セス・ケプロンの4男としてホーレスが生まれています。そして、父の移住(医師開業)により2歳-19歳までニューヨーク州ホワイツボロで過ごしています。

その間、父は綿織物工場・毛織物工場の経営にも成功しています。(父は、1835年死去、74歳)。3人の兄たちは、父の事業が成功していた時期で、それぞれ大学へ進学しましたが、「まるで台風のようにやってきた不況」のために、ホーレス・ケプロン(以下「ケプロン」)は、大学進学断念を余儀なくされ、学歴は、旧制中学程度で、すぐに父の綿布製造業に従事して各分野の十分な知識を得て、すぐに事業に精通したといわれます。ケプロンは、1829年メリーランド州バルチモアの綿布工場の監督となり、後にベルの工場の責任者としても成功し、綿布製造業界の著名人となっていきます。

1833~34年、メリーランド州バルチモア-首都ワシントンをつなぐ鉄道建設現場で、労務者数千人の暴動が起こった時、ケプロンは知事の依頼によって、自警団の指揮をとってこれを鎮めたのです。その功績により知事は、ケプロン(30歳)を取り立て、メリーランド州の国民兵32連隊少佐に任命されます。さらにまた数千人の鉄道の暴動を鎮王したことにより、1834年3月、中佐に任命して

います。

ケブロンは、1834年、地元資産家のニコラス・スノードンの娘と結婚し、妻の所有するローレルの広大な地所で綿織物工場を経営し、1849年には、2500人を雇用しています。さらに、婦人が相続したスノードン家の土地を管理、地力の落ちた広大な荒廃地に資本を投入して、肥料を施して地力の回復に努め州第一の大規模農場に仕立て上げて科学的農業経営による作物栽培にも成功して、「農業の権威者」といわれます。1848年には、合衆国農業会副会長・メリーランド州農業協会会長となり、1850年のロンドン国際博覧会には、メリーランド州代表して出席しています。

しかし、1年前の妻ルイーザの死とともに、1840年代末からの恐慌のあおりをうけて、事業も思わしくなく、失意のどん底に落ち込んでいましたが、知人の働きかけで、1852年春、政府から北テキサス・インディアン居住地を治める特別任務の職を得て、各地で幾多の問題を適切に処理しています。

1854年、ケブロンは2年の任期を終えて、再婚した妻マーガレットや子どもたちとともにイリノイ州に移住し、再び酪農経営に取り組みます。やがて家畜の飼育者としても成功し、家畜の品評会でも度重なる入賞を果たし、全国の農業協会の役員として活動します。

1861年南北戦争が起こり、ケブロンは3人の息子と北軍に入隊。1863年(58歳)に大佐に昇進、各騎兵旅団の指揮を命ぜられます。1866年には准将(將軍)に昇任します。各地に参戦して64回の栄光に輝く戦闘に参加したといわれます。しかしこの間、長男は戦死、次・三男は負傷しました。終戦後、イリノイ州に戻りますが、牧場は荒廃して再び経営することは困難な状態になりました。このような苦境にあったとき、たまたま初代農務省長官がなくなり、その後任者として、1867年(慶応3年)、ケブロンが、合衆国農務省第2代長官(農務局長)の要職に「任命」されます。彼の健全な判断力、農場経営の豊かな知識、家畜・植物・土地に対する厳正な統計的認識、そのすぐれた部下統率能力などから、その職務はまったく適役といわれました。3年半在任して、1867～1870農務省年報の他、あらゆる農作物の実験栽培、土地管理、演芸・養蚕・酪農にまで及ぶすぐれた仕事を残して、マスコミからも多くの賛辞を受けています。

■明治政府の北海道開拓

明治政府は、ロシアの南下政策に対して、北方の防備のために北海道の開拓を急務としていました。それで、黒田次官の北地問題に関する建議書を1870年(明治3年)11月には、全面的に受け入れます。北海道開拓に必要とする、開拓に長じた外国人技術者の雇用と農業機械等購入を黒田清隆(以下「黒田」)に全て委任します。その費用についても開拓使の定額以外より支出することを保障しています。

1871年(明治4年)1月、黒田は、留学生を伴って米国に向けて出発します。黒田は、当初から北海道開拓に必要なお雇い外国人を米国に求める考えであったようです。また、直接の人選の衝にあった森有礼は、気候風土の相似したニューイングランドの州を念頭においていたようです。こうして、同年(明治4年)4月、黒田は、駐米公使森有礼とともにグラント大統領と会見して、日本政府の申し出を提示します。これを受けて米国は日本の要請を承認して、開拓使顧問としてホーレス・ケブロンを推薦しています。

■開拓使顧問ホーレス・ケブロンの招聘

(ケブロンの提示した条件をうけて日本政府が承認した契約の概要) ～北海道こと「えぞ」は、

日本の重要な領土であるが、内陸はまったく未開である。この「えぞ」の開発のために、その領土と島の農業その他の資源開発。地質・植物・鉱物の予備調査、道路・運河・町・駅の開発などの詳細な報告書を作成して提出すること。この任務のために、土木・建築・農業及び鉱業部門の主任助手を選任する。ホーレス・ケプロンの年俸は1万ドル（農務局長職は4,000ドル）。助手は3000～4000ドルとする。一行の日米往復と滞日中の生活の経費はすべて日本政府負担。さらに、家具つき住居提供、家賃・税免除。家事使用人・世話人・警備員を置く。～などの条件を提案しています。ケプロンを1871年(明治4年)5月15日に任命するも、後任の関係で大統領の承認が得られず、ケプロンが6月27日に、辞表を再提出してグラント大統領の承認を得ています。

ケプロン他3名の一行は、1871年(明治4年)8月1日サンフランシスコを出発、8月25日午後6時半横浜港に到着しました。東京での宿舎は芝増上寺の本坊が当てられました。早速、政府高官の饗宴をうけ、天皇にも謁見しています。ケプロンは来日に際し、工学・地質・鉱学関係担当の技師として合衆国農務省に勤務していたアンチセル、測量・土木関係担当の技師としてバルチモア・オハイオ鉄道に勤務していたワーフィールド、それに書記兼医師としてジョウジタウン医科大学解剖学助手・合衆国農務省図書館司書をしていたエルドリッジという優秀なスタッフを同行したのでした。

ケプロン在任中のお雇い外国人の大半は、ケプロンの推薦・承認のもとに採用されたこともあり、多くのアメリカ人技術者が中心となったようです。地質・測量・鉱山のライマンや助手マンロー(1872・明5来日～)、農業・牧畜のポーマー(1871・明4来日～)やダン(1873・明6来日～)などがよく知られています。

ケプロン帰国後も、札幌農学校関係では、初代教頭・農学・化学・数学のクラーク、土木工学・数学・第2代教頭のホイラー、化学・農学・数学・第3代教頭のペンハロー(3名、1876・明9来日～)、農学・官園監督・第4代教頭のブルックス(1877・明10来日～)、生理学・解剖学・病院医術顧問のカッター、数学・土木のピーボディー(2名、1878・明11来日～)などを迎えています。また、茅沼・幌内炭鉱のゴージョー、ダウス(2名、1879・明12来日～)、鉄道敷設・土木顧問のクロフォード(1878・明11来日～)、水産加工・魚肉缶詰製造のトリート(1877・明10来日～)などが招かれており、ケプロンを筆頭に48名の「お雇い外国人」がアメリカ人でした。

■ホーレス・ケプロンの雄大な開拓計画とその業績

黒田は、明治政府の「開拓使10年計画」(明5～明14)の計画立案・事業推進のために、ケプロンの「農科大学を興すべし」の献言を受けて、まず、1872年(明治5年)3月、東京芝増上寺山内に「仮学校」を開校します。お雇い教師はほとんどアメリカ人を採用しています。(この「仮学校」が、1875年(明治8年)8月、札幌に移転して「札幌学校」(校長調所広丈)となり、翌1876年(明治9年)7月31日クラーク、ホイラー、ペンハローの一行を札幌に迎えて、8月14日の「札幌農学校」(校長調所広丈・教頭クラーク博士)の開校へとつながります。)

ケプロンは、1871年(明治4年)9月、早速、東京に農事試験場「官園」3ヶ所設置して、アメリカから輸入した動植物を管理しました。同時に北海道の七重・札幌にも官園が設置されました。札幌では、札幌本庁敷地北側に3600坪(後に40万坪に拡大)の御手作場設け、さまざまな農作物が栽培され「葡萄園」「ホップ園」「果樹園」なども設けられました。その後、1876年(明治9年)には、この官園のうち、30万坪が札幌農学校農場に移管されました。

開拓使は、ケプロンの献策により、札幌市内大通一北1条・東1丁目一東4丁目を工業ゾーンとして、さまざまな「官営工場」を建設しました。現在のサッポロビールの原点でもある「開拓使麦酒醸造所」もこの地に誕生しています。

ケプロンは1871年(明治4年)8月来日、以後3年10ヶ月日本に滞在しますが、まず8月～10月、アンチセルとワーフィールドを開拓予備調査のため北海道に派遣しています。一行は、函館から恵山岬をまわって、噴火湾を横切り室蘭に渡り、海岸沿いに勇払川、千歳方面を通って札幌着。札幌附近が全道の首府たるべき地点であることを確認しています。約2ヶ月間馬に乗って巡視し、豊平川架橋(当時は明治4年4月の仮橋)の急務、製造工場や水車の設置場所の選定、札幌室蘭間の道路計画なども含めた、北海道の気候・風土を総合的に考察した報告に基づいて、11月、「第1次報文」を開拓使に提出しています。

ケプロン自身の第1回目の道内巡検は、1872年(明治5年)5月、東京湾を出帆して、函館・室蘭を経て札幌に到着。札幌の「開拓使本庁舎」(~6年10月落成)の建築状況や製材場その他の諸工場の所在地(現在の大通り東1・2丁目附近全体の広い地域)を検分、さらに石狩・小樽を視察し、室蘭・函館を経て10月に帰京しています。

第2回目の道内巡検は、1873年(明治6年)6月出発、黒田の指示を受けて、東京の開拓使官園の試験成果を移植するために設置する、七重・札幌官園・試験場の調査、その輸送方法に関する現地調査、牧畜・耕種の適地調査、鉱山開採方法に関する調査などでした。函館・七重官園・室蘭を経由して札幌着。札幌の農作・工場を検分後、ライマンを伴って豊平川・石狩川の調査、石狩・当別視察、小樽・余市を経て岩内の茅沼炭鉱を検分、長万部・函館を経て9月に帰京しています。この第2回巡検後11月に、農業・牧畜、石狩各地炭田開発・輸送計画などを含む「第2次報文」を提出しています。

第3回目の道内巡検は、1874年(明治7年)5月出発。黒田の指示事項は、七重官園における果樹の点検と育成方法、室蘭に設置すべき木挽器械所の調査、新室蘭・札幌・小樽に予定している殖民(屯田)地の調査、札幌の種畜場・果樹・堤防の検分調査、ホロムイ・岩内石炭山の石炭採掘・運搬方法、その他鉱物の探査、浦河管内の牧畜・開墾の適地調査、漁業改良の方法調査など多岐にわたっています。函館・室蘭を経て6月札幌着。札幌近郊・小樽を調査。8月札幌発、勇払・浦河を経て、函館へ、そして8月末帰京しています。そして、1875年(明治8年)3月、ケプロンの開拓事業に関する具体的な意見や多彩な見解を総括した「開拓使顧問ホラシ・ケプロン報文」を提出しています。

さらに帰国に際して、契約を延期して「報文要略」をまとめて、開拓使に提出してから、1875年(明治8年)5月23日、帰国しています。

■帰国後のホーレス・ケプロン

ケプロンは、帰国後はワシントンに在住して静穏な余生を送ったといわれます。1876年(明治9年)には、ワシントン哲学会で「日本」と題する講演をし、また1877年(明治10年)西南戦争に際しては、黒田の要請(黒田は65,000ドルをケプロンに送金)に応じて鉄砲・弾薬の調達をしたり、開拓使からのいろいろな依頼に対応してなお日本に目を向けていたといわれます。晩年のケプロンにとって、日本とのきずなは貴重であったようです。ケプロンは時折、自宅に議員や各省の高官を招いて、日本から持ち帰った美術工芸品を披露するのを楽しみにしていたそうです。ケプロンの人

柄は、いつも誠実で奥ゆかしい態度で人に接し、虚飾を廃した質素な生活を好んだといわれます。

1884年(明治17年)1月、日本の天皇から勲二等旭日章が授与されました。ケプロンは、勲章と日本でのケプロンの功績を書き連ねた天皇署名入りの賞状に「深い感動」をおぼえたといわれます。

そして、1年後の1885年(明治18年)2月21日、ケプロンはワシントン記念塔完成を祝う式典に出席します。その日はよく晴れていたが、風の冷たい日であったそうです。帰宅後、気分の不調を訴えたケプロンは、その翌日、80歳の生涯を閉じたのでした。

ケプロンは、開拓使顧問在任中は、黒田の信頼もきわめて厚く、職務にたいしては誠実そのものであったといわれます。しかし、ケプロンの指導による北海道開拓事業の成果にたいしては、開拓使官員や内外新聞の批判、多くの優秀な部下たちとのトラブルなどもあって、きびしい評価もあったようです。ケプロンの北海道の総合的な開発の計画・構想は開拓使に対してのみ向けられ、顧問としての職分に徹していたようです。

<主な参考文献及び参考資料>

- 「ケプロン日誌—蝦夷と江戸」ホーレス・ケプロン著 西島照男訳 北海道新聞社
- ホーレス・ケプロン将軍—北海道開拓の父の人間像」メリット・スター著 西島照男訳 北海道出版企画センター
- 「ホーレス・ケプロン自伝」西島照男訳 北海道出版企画センター
- 「北海道を開拓したアメリカ人」藤田文子著 新潮選書
- 「ホーレス・ケプロンを語る—北海道開拓の恩人—」逢坂信彦著 丸善株式会社
- 「北門開拓とアメリカ文化—ケプロンとクラークの功績—」山本紘照著 文化書院刊
- お雇い外国人—開拓」原田一典著 鹿島出版会
- インターネット資料 他

北海道開拓の恩人 開拓使長官黒田清隆の生涯と業績

—開拓次官(明3～)長官(明7～明15)・開拓事業とすぐれた外国人の招聘に尽力—

■まえがき

北海道の本格的な近代化は、1869年(明治2年)7月、明治政府の開拓使設置によりスタートしますが、黒田清隆(1840—1900) <以下、「黒田」>は、1870年(明治3年)5月開拓次官、その後1874—1881年(明治7年8月—明治15年)開拓使長官として、多くの外国人指導者を招聘して、北海道の開発や農工業の振興に力を注ぎ、今日の北海道および近代都市札幌の発展の基礎を築いたのです。北海道開拓の恩人といわれる所以です。

黒田(30歳)は、農業経営の模範を米国に求めて、1871年(明治4年)4月、マサチューセッツ州出身の米国農務省長官(農務局長)ホーレス・ケプロン(1804—1885、当時67歳)を開拓使顧問として招聘しました。同年8月、来日したケプロンの指導で、早速、東京の青山・赤坂・麻布に官園が設けられ、北海道に導入する作物の試作、家畜の飼育や農業技術者の養成などが行われます。ケプロンは、滞日3年10ヵ月、その間3回にわたり、道内各地の視察・調査に來道し、北海道の基本的な開発計画を提案し、札幌を首都とすること、農業開発のために高等教育機関を設置することなどを内容とする詳細な「ケプロン報文」を作成しています。このケプロンの進言により、米国の進んだ畜産技術や農耕馬によるプラオの使用を普及させたエドウィン・ダン(1848—1931)を招き、またマサチューセッツ農科大学長ウィリアム・S・クラーク(1826—1886)を迎えて札幌農学校を開校(明9, 8, 14)させます。ケプロンの提言は、すべて、北海道開拓の基礎事業、開発すべき諸産業の振興に関するものであり、その後の北海道の開拓・開発の重要な指針となるものであったといわれています。

2010年、北海道・マサチューセッツ州姉妹提携20周年を迎えるにあたり、前号の北海道開拓の父「ホーレス・ケプロン」に続いて、今回は、そのプロモーター・北海道開拓の恩人「黒田清隆」の生涯と業績を掘り起こしてみたいと思います。

■黒田清隆の生立ち

黒田清隆は、1840年(天保11年)10月16日、薩摩藩士の家禄わずか4石の下級武士・黒田仲佐衛門清行の長男として生まれています。幼名了介。両親を早くに亡くし、姉の黒田たかが母親代わりの存在であったようです。黒田は、藩の若者を集団訓練する「郷中教育」でほとんど休まず軍事訓練をうける元氣者であったそうです。長じて薩摩藩の藩校「造士館」に学び、藩主島津斉彬の西欧の学問や新しい技術に目を向ける考え方の影響を強く受けます。1860年(万延元年)、藩から三両二人扶持を与えられて砲隊の砲手となり、異彩を放ったといわれます。当時すでに、薩摩藩では、溶鉱炉・鋼鉄製造炉・大小砲削磨機・その他製織工場などもあり、「集成館」という藩営工場群の工業活動が盛んであったようです。

1862年(文久2年)8月21日、生麦村(現、横浜市鶴見区)を通過中の薩摩藩主島津忠義後見役の叔父島津久光一行の行列に馬で乗り入れたイギリス商人C. L. リチャードソンら4人を殺傷した「生麦事件」の折、黒田は、薩摩藩随行者の一人として居合わせるも、自らは武器を振るわず、抜刀しようとした者を止めたといわれます。黒田自身は「示現流」の有数の使い手で、後年、宗家東郷重矯より皆伝

しています。

「生麦事件」に対する英国の賠償金要求を薩摩藩が拒否したために、1863年(文久3年)7月2日、英国艦隊7隻が鹿児島湾(錦江湾)に進入、暴風雨の中で薩摩の陸上砲台との間で激しい砲撃戦が展開されました。薩摩藩の諸砲台・藩直営工場の「集成館」は壊滅的損害を受け、民家や寺社までも大きな被害が及び、英国艦船の大砲の威力に驚きました。英国側も60名余の死傷者をだしています。この「薩英戦争」に砲隊の一員として参加した黒田は、外国のすぐれた技術や文化を取り入れなければならないことを一層強く感じます。黒田は留学を願い出て、藩主からロシア留学を命ぜられました。1863年(文久3年)12月、藩の要請で江戸にでて、砲術の指導者を養成する「江川塾」で、大砲の射程・照準などの正確な理論と実技を学び皆伝しています。

1866年(慶応2年)の薩長同盟に際しては、薩摩側の使者として土佐藩の坂本竜馬(1836-1867)に会い、大阪で薩摩の西郷隆盛(1828-1877)と長州の桂小五郎(後の木戸孝允・1833-1877)の対面を実現させています。そして討幕を目的とする政治的・軍事的な同盟、いわゆる「薩長連合」が成立します。

薩長を中心とする新政府軍と旧幕府軍の争いは続き、1868年(慶応4年)の「戊辰戦争」では、黒田は1月鳥羽伏見の戦いで薩摩藩小銃第1隊長として参戦。また北越戦争では、山県有朋とともに参謀を命ぜられます。夜襲を受けた長岡城の攻防で官軍主力は劣勢にたつも、黒田は新発田藩を降し新潟を占領して戦鬪を決したのでした。さらに、黒田は西郷と合流して米沢藩と庄内藩を帰順させて、9月27日庄内の鶴岡城を接收してこの方面の戦鬪を終えています。黒田はいったん帰郷。1869年(明治2年)1月、軍務官に任命されます。

1868年(慶応4年-9月8日明治と改元)、官軍は西郷隆盛を参謀として3月15日総攻撃を期して江戸に迫りますが、官軍の西郷隆盛と幕府の勝海舟(1823-1899)の歴史的会見により、「江戸城」の無血開城(4月11日)の運びとなります。

しかし、勝の江戸開城を不満とした旧幕府海軍副総裁榎本武揚(1836-1908)は、8月19日、旧幕府の新鋭艦「開陽」・「回天」など8隻を率いて北上、仙台湾に集結します。旧幕府陸軍奉行大鳥圭介の部隊など、その幕軍の数2,500人といわれます。評議の結果箱館をめざすこととなります。10月、榎本は噴火湾岸の森(鷲ノ木)に上陸して、箱館五稜郭(箱館裁判所-箱館府)を占領した大鳥圭介・土方歳三らと合流し、11月松前城をも陥し入れて全島平定成り、12月「蝦夷共和国」の独立を宣言して、蝦夷島総裁榎本武揚・副総裁松平太郎・海軍奉行荒井郁之助・陸軍奉行大鳥圭介の新政権を樹立します。これに対し、新政府軍の五稜郭を攻撃する「箱館戦争」がはじまります。黒田は新政府の陸軍総参謀として1869年(明治2年)3月、東京を出港、途中宮古湾海戦に際会しますが、4月19日江差に上陸して、官軍と旧幕府軍との最後の戦いの総指揮をとります。5月に旧幕府軍が箱館に追い詰められたのを見て、オランダ留学の外国近代科学(軍艦建造・船舶運用術・砲術・機関学)の新知識所有者榎本を惜しみ、助命の内部工作を手配します。最期を覚悟した榎本は、留学中の貴重な研究書「万国海律全書」上下二巻を黒田に届けます。この返礼として黒田は酒5樽と鶏卵500個を送ったといわれます。黒田は、5月11日を総攻撃と定めて、自ら少数の兵を率いて背後の箱館山を占領して奇襲攻撃をしかけます。土方の新撰組隊敵や伝習仕官隊が迎撃しますが、五稜郭に追い込まれます。この戦いで、土方は必死に交戦しますが、遂に流弾に当たって落命したのでした。黒田は榎本に降伏を勧めます。このとき、村橋久成が軍監として降伏勧告の任にあたっています。榎本は遂に意を決して、5月18日、部下1,000名と共に五稜郭を出て降伏しました。こうして「箱館戦争」は終結します。榎本ら首脳

部は東京の軍務官の獄に投げられ、一般兵士は弘前その他に軟禁されたといわれます。

<同年(明治2年)11月22日、黒田(28歳)は、大久保利通の世話により、旧旗本中山勝重長女せい(14歳)と結婚します。この結婚から明治6年ころまでが幸福な時期であったようです。黒田は子煩悩で明治5年の長男誕生を喜ぶも病死、そして明治8年待望の長女をもうけるも、またも翌年夭折。黒田は悲嘆に暮れ、妻も悲しみのあまり体調を損ないます。この悲しみの中で、妻の妹百子(9歳)を養女にむかえて、家庭も少し明るくなったといわれます。>

黒田は、戦後、榎本武揚助命を強く要求して厳罰を求める者と長い間対立し、助命嘆願のために剃髪までしています。これについては、1872年(明治5年)1月6日になってようやく榎本武揚・松平太郎・荒井郁之助・永井尚志・大島圭介・沢太郎右衛門らは、謹慎処分が無罪決着します。後に、開拓使に登用し、北海道開拓に協力させています。以後、榎本は黒田の「知恵袋」として活躍します。

■明治政府の北海道開拓

明治政府は、ロシアの南下政策に対して、北方の防備のために北海道の開拓を急務としていました。

黒田(29歳)は、1870年(明治3年)樺太専任開拓次官となり、7月から樺太出張してロシア関係の調整にあたるも危機感を強くします。北海道を視察して帰京すると、10月20日、北海道開拓の必要性を説く建議書を提出。すぐにも外国から開拓のことに長ずるものを雇い、北海道への移民・工業・鉱山測量などのことを実施すべきであると主張しました。明治政府は、この黒田の提案を全面的に受け入れて、北海道開拓に必要なとする、開拓に長じた外国人技術者の雇用と農業機械購入など、樺太・北海道全域の全てを黒田に委任します。その費用について、開拓使の定額予算以外からの支出も保障しています。

1871年(明治4年)1月4日、黒田(30歳)は、留学生7名を伴って米国に向けて出発、サンフランシスコから大陸横断鉄道でワシントンに到着します。黒田は、当初から北海道開拓に必要なお雇い外国人を主として米国に求める考えであったようです。また、直接の人選の衝にあった森有礼(1847-1889)は、気候風土の相似したニューイングランドの州を念頭においていたようです。こうして、同年(明治4年)4月、黒田(30歳)は、駐米公使の森有礼とともにグラント大統領に会見して、日本政府の申し出を提示します。これを受けて米国は日本の要請を承認して、開拓使顧問としてホールレス・ケプロン(67歳)を推薦しています。滞米中黒田は、密出国した野村高文という学生を通訳として採用したり、密出国の新島襄(後の同志社大学創立者)に学資を与えたりしています。また漂流して米国に流れ着いた漁船員なども援助して帰国させています。黒田はこの間、英・仏・蘭を経て、ロシアに至り、帰路米国で多くの資材・機械類を購入して、6月7日帰国します。帰国後、10月開拓使長官東久世通禧の辞任により、黒田は次官のまま開拓使の頂点にたつことになりました。

■開拓使顧問ホールレス・ケプロンの招聘

明治政府はケプロンを1871年(明治4年)5月15日に任命するも、後任の関係で大統領の承認が得られず、ケプロンが6月27日に、辞表を再提出してグラント大統領の承認を得ています。(ケプロンの年俸は1万ドル<農務局長職は4,000ドル>。助手は3000~4000ドル。一行の日米往復と滞日中の生活の経費はすべて日本政府負担。さらに、家具つき住居提供、家賃・税免除。家事使用人・世話人・警備員を置く~などの条件。)

ケプロン他3名の一行は、1871年(明治4年)8月1日サンフランシスコを出発、8月25日午後6

時半横浜港に到着しました。東京での宿舎は芝増上寺の本坊が「ケプロン館」に当てられました。早速、政府高官の饗宴をうけ、天皇にも謁見しています。ケプロンは来日に際し、工学・地質・鉱学関係担当の技師として合衆国農務省に勤務していたアンチセル、測量・土木関係担当の技師としてバルチモア・オハイオ鉄道に勤務していたワーフィールド、それに書記兼医師としてジョウジタウン医科大学解剖学助手・合衆国農務省図書館司書をしていたエルドリッジという優秀なスタッフを同行したのです。

■黒田清隆・ホーレス・ケプロンの北海道開拓計画

草創期の初代判官島義勇・その札幌都市計画の実施にあたった第2代判官岩村通俊のあとを受けて、黒田は、ケプロンと相談して北海道開拓の事業推進のために「開拓使10年計画」(明5～明14)を立てます。当時のお金で、1,000万円の予算で、外国の新しい技術や制度を取り入れて北海道を開拓しようと考えたのです。

まず、ケプロンの「農科大学を興すべし」の献言を受けて、1872年(明治5年)4月15日、東京芝増上寺山内に「開拓使仮学校」を開校します。校長荒井郁之助・教頭アンチセル・教授ワッソンとし、お雇い教師はほとんどアメリカ人を採用しています。官費生50名・私費生50名を定員として、官費生は10年・私費生は5年開拓使奉職を義務とします。(この「仮学校」が、校風弛緩により廃校・再建、女子校併設などの曲折を経て、1875年(明治8年)8月、札幌に移転して「札幌学校」(校長調所広丈)となり、翌1876年(明治9年)7月31日クラーク、ホイーラー、ペンハローの一行を札幌に迎えて、8月14日の「札幌農学校」(校長調所広丈・教頭クラーク博士)の開校へとつながります。)

ケプロンは、1871年(明治4年)9月、早速、東京の青山・赤坂・麻布に農事試験場「官園」3ヶ所設置して、アメリカから輸入した動植物を管理しました。(この建設・事業責任者に、村橋久成が任命されています。)開拓使は、「将来北海道で栽培する農作物は、まず東京の官園で試験栽培し、成功のメドがついてから、北海道に移殖しよう」と考えていました。後に、北海道の七重官園(のち七飯勸業試験場)・札幌官園が設置されました。札幌では、札幌本庁敷地北側に3600坪(後に40万坪に拡大)の御手作場を設け、さまざまな農作物が栽培され「葡萄園」・「ホップ園」・「果樹園」なども設けられました。その後、1876年(明治9年)には、この官園のうち、30万坪が札幌農学校農場に移管されました。

開拓使は、ケプロンの献策により、札幌市内大通～北1条・東1丁目～東4丁目を工業ゾーンとして、さまざまな「官営工場」を建設しました。当初、東京の官園内に建設予定であった「麦酒醸造所」ですが、村橋の提言が認められて、村橋久成と麦酒醸造技師中川清兵衛による「開拓使麦酒醸造所」(明9、今日のサッポロビールの原点)もこの地に誕生しています。「開拓使葡萄酒醸造所」「開拓使製糸所」などの開拓使諸工場設置も、黒田が若き日に薩摩藩で経験した近代科学重視の考え方が反映したものと考えられます。しかし、財政経理については、次第に赤字が累積して、早くも明治5年10月「札幌会議」で道政の立て直しが必要ということになり、明治6年2月岩村通俊(1840-1915)判官が辞任して、健全財政について定評のあった松本十郎(1840-1916)が迎えられます。松本は諸費の無駄を省き、新規事業を中止させ、6年には庁員を半数に整理してかえって事務能率をあげたといわれます。松本の緊縮方針により、一時札幌の建設ブームは去り、街は活気を失って、札幌を去る市民も少なくなかったそうです。こうして松本は8年1月に至って赤字を解消しています。しかしその後、松本は、樺太アイヌの対雁(ついしかり)強制移住をめぐる黒田と対立し、開拓使を去って故郷庄

内に帰り、一介の農民として生涯を送ったのでした。

1873年(明治6年)11月、黒田は屯田兵の創設を建議します。大久保利通(1830—1878)の支持を受け、12月に承認されます。この屯田兵制度は、北海道の開拓と北方警備の重要性に加えて、禄を失った士族救済の役割をはたす画期的な政策でした。1874年(明治7年)6月、黒田は、陸軍中將、北海道屯田憲兵事務総理。同年8月、参議兼開拓長官となり、榎本らの旧幕臣の多くを開拓使に登用しています。

1874年(明治7年)、ケプロンの進言により、屯田兵最初の入植地を札幌郡琴似村と定めて、兵屋208戸・中隊本部・練兵場・授産所などを建設しますが、この「琴似屯田兵村」建設の任にあたったのも村橋久成でした。翌年5月、屯田兵・家族965人第1陣が入植しています。以後、北海道には、最終的に37の兵村が出来、合計約4万人が入植します。〈屯田兵制度は1904年(明37)廃止まで続きます。〉

ケプロン在任中のお雇い外国人の大半は、ケプロンの推薦・承認のもとに採用されたこともあり、多くのアメリカ人技術者が中心となったようです。地質・測量・鉱山のライマンや助手マンロー(1872・明5来日～)、農業・牧畜のポーマー(1871・明4来日～)やダン(1873・明6来日～)などがよく知られています。

ケプロン帰国後も、札幌農学校関係では、初代教頭・農学・化学・数学のクラーク、土木工学・数学・第2代教頭のホイラー、化学・農学・数学・第3代教頭のペンハロー(3名、1876・明9来日～)、農学・官園監督・第4代教頭のブルックス(1877・明10来日～)、生理学・解剖学・病院医術顧問のカッター、数学・土木のピーボディ(2名、1878・明11来日～)などを迎えています。また、茅沼・幌内炭鉱のゴージョー、ダウス(2名、1879・明12来日～)、鉄道敷設・土木顧問のクロフォード(1878・明11来日～)、水産加工・魚肉缶詰製造のトリート(1877・明10来日～)などが招かれており、ケプロンを筆頭に48名の「お雇い外国人」がアメリカ人でした。

■西南戦争への参戦

1873年(明治6年)征韓論に敗れた西郷隆盛は、故郷鹿児島に帰ります。各地に士族反乱が起こり、西郷は薩摩士族12,000を擁して、各士族グループの反政府軍を率いて、1876年(明治9年)1月北上し、2月「西南戦争」最大の戦場、政府軍が守る熊本城の攻防となります。黒田軍の奇襲攻撃などもあり、3月20日、田原坂の激戦で政府軍が西郷軍を撃破して帰趨が決します。以後、西郷軍は鹿児島まで後退を続けて、9月24日「城山」も陥落し、西郷らが自刃して約半年におよぶ戦闘は終了します。政府軍58,600に対して、西郷軍の総兵力3万余・戦死約6,000・戦後処罰2,760(斬罪22)といわれます。

(この「西南戦争」には、北海道から屯田兵も政府軍の一翼として出征しました。准陸軍大佐堀基・准陸軍少佐佐山武四郎が、琴似・山鼻の屯田兵を率いて、人吉の戦闘に参加して西郷軍を撃ち破り、百姓部隊と蔑視されていた屯田兵の勇名をとどろかせたのです。)

黒田が戦場から帰ると、やせ細った妻せいと養女百子が出迎えます。翌明治11年(1879)3月28日、妻せいは亡くなります。肺結核で咯血して夜具には血が滲んでいたといわれます。しかし、黒田がもともと酒豪であり、失態もあったことから、「黒田が酒に酔って妻を殺した…」という風説が流れていました。しかし、黒田は、亡き妻の位牌を守ってこの家をでることはなかったのです。養女百子は成人して、1877年(明治20年)に、陸軍少将黒木為基に嫁ぎ、黒田はひたすらその幸せを願っています。後、黒木は陸軍大将となり日露戦争で活躍、百子も賢夫人となって一家を支えています。

黒田は、またロシアの文化に対しても大きな関心をもっていました。榎本が日本の全権公使として、ロシアから、氷のとり方・毛皮加工・ペチカの構造などを報告しています。開拓使の貴賓用ホテ

ル「豊平館」(明治13年)も、アメリカの建築様式を基調に、榎本がロシアから送った図面も取り入れて建築されたものだという事です。

黒田は、1878年(明治11年)、ウラジオストックで開催した「北海道見本市」にでかけて、馬車・馬橇・馬の冬蹄鉄などを持ち帰り、また樺太コルサコフ(大泊)から防寒具・ペチカ・丸太家屋を調査して、その大工3人を雇用するなどしています。またストーブの使用や石造り・レンガ造りの建築をすすめ、札幌石山軟石の建築には補助金まで出したといわれます。明治12年函館大火の時には、自宅用に用意してあった建築木材を東京から函館に全部送らせたそうです。

1878年(明治11年)5月14日、明治の元勲大久保利通(1830-1878)の馬車が紀尾井坂で暴徒に襲われ刺客6人によって暗殺されます。49歳でした。黒田は、西南戦争で、崇敬する先輩西郷を死に追いやり、いままた、兄とも慕う大久保を失ったことに、大きな衝撃と絶望感を覚えたのでした。

1881年(明治13年)12月10日、黒田(41歳)は、本所の木材商丸山伝右衛門の三女滝子(18歳本所小町と評判の美女)と結婚し、3年後に娘梅子・55年後に嗣子清仲を授かります。1888年(明治21年)4月、黒田(48歳)は、第2代内閣総理大臣になります。翌年「大日本帝国憲法」が制定されます。1889年(明治22年)10月、総理大臣を辞め、枢密顧問官となります。

1895年(明治28年)2月、枢密院議長となります。このころ、農商務大臣を退いた榎本から、自分の長男武憲(東大卒・27歳)の嫁として、梅子(17歳)をもらい受けて黒田の恩義を子々孫々まで伝えたいという申し出があります。黒田は感激して応諾し、1898年(明治31年)暮れ、この二人の結婚式が行われています。晩年の黒田は、脳溢血、坐骨神経痛などに苦しんでいました。次第に坐骨神経痛が悪化して不眠が数日続き、実家に戻って看病していた梅子に看取られて、1900年(明治33年)8月23日、永眠しました。享年59歳。葬儀委員長は、生涯の盟友榎本武揚でした。また元札幌農学校生内村鑑三も熱烈な弔辞をささげたということです。火葬にして東京の青山墓地に葬られましたが、お墓は、札幌穴の沢(石山)産の石を取り寄せて造営されていたそうです。そして、8月25日に従一位大勲位菊花大綬章を授けられています。

■結び

黒田の北海道開拓計画がなければ、ケプロン招聘も札幌農学校の開校もなく、クラーク博士も札幌にこなかったでしょう。そして内村鑑三も新渡戸稲造も世に出なかったでしょう。

1906年(明39)大通公園に銅像が建てられましたが、1943年(昭18)戦争の資材として潰されました。そして、1968年(昭43)、北海道開道百年を記念して大通公園10丁目に東面して、「黒田清隆」「ホーレス・ケプロン」の銅像が建てられました。以来、二人の像はいつも札幌の街を見つめています。

<主な参考文献及び参考資料>

- 「黒田清隆とホーレス・ケプロンー北海道開拓の二大恩人ーその生涯と業績」逢坂信彦著 北海タイムス社
- 「黒田清隆ー埋れたる明治の礎石」井黒弥太郎著 みやま書房
- 「黒田清隆」井黒弥太郎著 日本歴史学会編集 吉川弘文館
- 「青雲の果てー武人黒田清隆の戦い」奥田静夫著 北海道出版企画センター
- 「新版 黒田清隆関係文書(鹿児島県歴史資料センター黎明館所蔵)」犬塚孝明・大島明子・広瀬順皓編修 北泉社
- 「北海道開拓をけん引した人 黒田清隆」奥田静夫著 屯田第54号 北海道屯田倶楽部
- 「維新 北海道人物伝 黒田清隆」青山侑著 旬刊時事ジャーナル
- インターネット資料 他



ホーレス・ケプロンの像 (背面の碑文)
左側の像 [大通公園西十丁目]

ホーレス・ケプロンは、アメリカ合衆国の人。明治四年わが国政府の招きに応じ、合衆国農務長官の要職を辞して、開拓使教師頭取兼顧問となり北海道開拓の大業に参画した。すなわち、多くの外国人技師を指導して本道の実情をきわめ、卓越した識見と豊かな経験に基づいて、北海道開拓の基本方策を進言し、開拓長官をたすけて、その実現に努めた。その勲業まことに偉大である。

ここに、北海道百年を迎えるにあたり、その偉業を回顧し、功績を永く後代に伝えるため、この像を建立する。

昭和四十二年十月

北海道開拓功労者顕彰像建立期成会
会長 廣瀬 経一



黒田 清隆の像 (背面の碑文)
右側の像 [大通公園西十丁目]

黒田清隆は鹿児島県の人。明治三年開拓次官、のち開拓長官に任ぜられ北海道開拓の大任にあたった。清隆はその性、明察果断にして、開拓の知識を先進国に学ぶ必要を痛感し自ら海外におもむき、知見を広めるとともに、ホーレス・ケプロンをはじめ、多数の外国人技師を招き、その進言を入れ着々開拓の巨歩を進めた。

北海道開発の基礎は、まさに清隆の卓見により確立したものとといふべく、その勲業まことに偉大である。

ここに北海道百年を迎えるにあたり、その偉業を回顧し、功績を永く後代に伝えるため、この像を建立する。

昭和四十二年十月

北海道開拓功労者顕彰像建立期成会
会長 廣瀬 経一

姉妹提携 20 周年記念 プレ・フォーラム

〔記録抄〕

日 時 平成 21 年 9 月 19 日 (土) 13:30 ~ 16:15
会 場 道庁赤れんが庁舎 2 階会議室 (札幌市中央区北 3 条西 6 丁目)
後 援 在札幌米国総領事館、北海道、北海道日米協会、(社) 北方圏センター、
(財) 札幌国際プラザ、北海道国際女性協会、北海道女性国際交流連絡協議会

2010 年は、北海道と米国マサチューセッツ州が 1990 年に姉妹提携関係を結び学術・文化・経済・市民交流などの活動を続けてきて、ちょうど 20 周年の節目の年に当たります。このことを踏まえて、今年から来年にかけて、いくつかの記念事業を計画しています。まず、最初の記念事業として、プレ・フォーラムを開催しました。紙面の都合により、ここでは、シンポジウム「北海道の近代化とマサチューセッツ人脈」の各スピーカーの発表要旨をご紹介します。

シンポジウム：テーマ「北海道の近代化とマサチューセッツ人脈」—発表要旨—

① 御手洗昭治

(札幌大学教授、日本交渉学会会長、北海道日米協会理事、北海道・マサチューセッツ協会会員)

「黒船以前の日米関係の夜明け：マサチューセッツ出港船と日本」

—以下で取り上げるアメリカ船「レディ・ワシントン号」と「キャップテン・ケンドリック」の内容は、筆者が 1994 年に出版した『黒船以前：アメリカの対日政策はそこから始った！！』（第一書房）、並びに「サムライ異文化交渉史」（ゆまに書房, 2007 年）に基づくものである。—

今回の発表では、独立以後のアメリカの対日・アジア政策の動向についてマサチューセッツ州を出港し、オレゴン州にも立ち寄り最初の日米貿易交渉に臨んだジョン・ケンドリック船長にフォーカスを当てながら黒船来航以前の日米関係の夜明けについて若干の考察を試みたい。

15 世紀の大航海時代以来、イギリスをはじめとするヨーロッパ列強とアメリカは、相互の関連を深めるようになり序々に世界の一体化へと歴史の歩みは進んでいった。アメリカは、1776 年経済学者のアダム・スミスが「国富論」を出版した年に独立宣言を公布しその後、1780 年代からは中国貿易に関心を示し始めた。多くの歴史学者は、中国貿易に関しての活動は商人にまかされ、アメリカ政府としては積極的な支援を与えていなかったと指摘する。しかしながら、ハーバード大学の政治歴史学者のアーネスト・メイは「当時、アメリカの政府高官であり、後の米国大統領になったトーマス・ジャファソンだけは別であった」と主張する。

それを裏づけるのが、二隻の帆船の日本への来航である。当時共和国であったアメリカ国旗を掲げ、これまでの通説とは違いアメリカの私免許状（的国船舶の拿捕を許可した政府発行の

免許状)を保持し、州議会から公的な役割(東洋貿易の振興)や支援を得て日本に初めて来航したのは、1791年のキャプテン・ケンドリックと副官のロバート・グレイ率いるブリガンディーン型(二本マスト)帆船「レディ・ワシントン号」とスループ型(一本マスト)の帆船「グレース号」である。ハーバード大学の歴史学者でケネディ政権時代に駐日アメリカ大使を務めた故エドウィン O. ライシャワー氏と同じくハーバード大学の歴史学者であるアルバート・クレイグ氏も、上記の二隻について次のように述べている。

「早くも一七九一年には、二隻のアメリカ船が日本の領域に進出していた。そして、一七九七年には、東インド会社のオランダ当局にチャーターされたアメリカ船が破損した自らの船を補充するために長崎に入港した。1837年には広東のアメリカ商人が、小型船のモリソン号を日本に向け出航させた・・・」

[As E. O. Reischauer & A. M. Craig at Harvard briefly illustrated], As early as 1791 two American ships had entered Japanese waters, and in 1797 another visited Nagasaki, chartered by the Dutch authorities in the East Indies to replace their own ships, cut off from them by the Napoleonic wars. An American businessman in Canton dispatched a small vessel, the Morrison, to Japan in 1837 to repatriate seven Japanese castaways and through this act of good will, to open up relations with Japan, but the unarmed ship was fired on by the Japanese and driven off (御手洗 昭治『サムライ異文化交渉史』)

このライシャワーとクレイグ両氏が指摘している1791年にウイリアム・スチュアート船長のニューヨーク船籍「エリザ号」以前に日本の紀伊の大島に「貿易交渉」のために来航した二隻のアメリカ船とは、一隻がケンドリック船長率いる90トンの「レディ・ワシントン号」であり、ほかの一隻とは、その船に伴い、副官のウイリアム・ダグラス船長率いた「グレース号」のことである。「黒船」を率いて那覇経由で江戸湾に来航したペリー提督より遡ること62年前の寛政3年、3月の出来事である。

また、歴史家のデネットはアメリカ国旗は掲げていたもののオランダのチャーター船として長崎に入港した「エリザ号」について以下の説明を加えている。

The relations between the Dutch and the Americans became very friendly, and when the newly created Batavian Republic hesitated to trust the annual Company ship to Nagasaki under a flag which the British might not respect, the Eliza, under the America flag, was chartered for the voyage(1789). For several years thereafter the American flag appeared regularly in Japan each season, and when the Department of State, in 1832, began to assemble information with a view to treaty relations with Japan, it was mainly through Dutch sources and through Americans who, in the employ of the Dutch, had been to Nagasaki, that the information was secured. (御手洗 昭治『黒船以前』)

紀州における日米の夜明けと日米交渉のプレリュード

英文の歴史資料によれば、ケンドリック船長一行は、紀州の南の海岸に到着し、土地の人々から歓迎を受けた記録が残されている。

「ケンドリック船長は、ここで米国国旗を掲げたが、この方面でアメリカ国旗が翻ったのは、おそらくこれが初めてのことであろう。一行は中国から日本へ良質のラッコの皮を二百枚ほど積んではいたものの、日本側はその使い方をまったく知らなかった。」このためアメリカ側のペリー以前に行なわれた最初の対日交渉は成立にいたらなかった。

「その後、二、三日航海し、一行は一群の島々を発見した。島の住民が水を売りにやってきたので、この島を『水島』と名付けたのである。日本側はむろん、この島の住民たちと我々一行の中国人とは言葉を通してのコミュニケーションは困難であった。しかし、文字を通しての意思疎通ではお互いによく理解し合えた...。」

また「外国通覽」によれば、船には紅毛人 50 人のほか、黒人（アフロ・アメリカン）20 人、中国人 5 人ほどが、乗船していたと記録されている。彼等は酒を飲み、踊りごとを毎朝行なっていたようだ。そして、一行は木綿桶で水を取り、漁師にサイン入りの一書を渡した、内容の中身には何が記述されているかは定かではないが、「アメリカ合衆国のニュー・イングランド、ボストンのブリック型帆船『レディ・ワシントン号』指揮官、ジョン・ケンドリック」と示されている。

一外船左ノ一書ヲ渡シタル由

本船乃堤紅毛船、地名花其載、貨物乃堤銅鉄（鉄）乃火炮五十員在中華國赴皮草國而去無經貴地、偶遭風浪、漂流至此、在貴地、不過三五日之間、不好風而在此、好風即日去本船人一百口、貨物實銅鉄並無別物、船主名堅徳力記、此外蘭文モアシトナリ

なお、紀南遊囊という歴史録は、信州高遠の藩士で砲術家であった坂本天山によって記録されたものであるが、ケンドリック一行の樫野浦を含む十一日間の滞在中の動向を知る上で、興味深い情報を提供している。以下は坂本天山が、和歌山の泰地（太地）で捕鯨状況等を視察し陸路伊勢それに三重県の伊賀を経て大阪まで帰るまでの事が書かれており、その中に、高芝村の医師であった伊達李俊から十年程前に「アメリカ船二隻の大島立寄りの件を聞き書かされた文章があるのでその分原文から抜粋」と記述された歴史録の一部である。

前文省略... 須恵（須江）加志野（樫野）其ノ間ニ大島ト云フ島アリ、島ヨリ外ヲ乗り通ル、此ノ大島へ八十年前、外国ノ船二艘カカリテ、夜ハ大砲ヲ、昼ハ山ヨリ布ノ袋ニテ船中へ水ヲ取り、大島ノ木ヲ薪ニトリテ積み込み出デ走りシ処也此異国船ノ事、江戸ヨリ風説ニテ、郷国（信州高遠）ニ居タリシ時、聞き及ビシコトナリシガ、今度其ノ筆談ニ出タル伊達李俊（李俊ハ維徳軒ノ嗣ナリ）ガ語りシハ、大島ノ沖へ十三段ニ帆ヲ掛ケシ異国船リ... 以下略。

「須恵と樫野の間に、大島と云う島がある。その島の沖合に八十年前（寛政三年）、外国船二隻が、姿を現した。夜には、大砲を響かせ、日中には、山より木綿桶で水を取り船まで運び、大島の木を薪として船内に積み込み、船は出発したのである。

日米の数少ない文献で一致している点は、その殆どが日米親善の始まりともいえる「レディ・ワシントン号」による日本寄港を、一アメリカ商船による日本「漂着」として捉えていることである。しかし他方、ホスキンの日記は「ケンドリック船長は、3月にラークス湾よりニューヨーク出身のダグラス船長を伴って出港。そして、「レディ・ワシントン号とグレイス号は日本の南に位置した（紀伊半島）の港に入港。地元の人々から大歓迎を受けた。そこでケンドリック船長は、その地で最初ともいえるアメリカ国旗を掲げたのである。彼等は、日本まで二百枚ほどの上質のラッコの皮を運んだのであるが、地元日本人は、毛皮の使用方法をしらなかったのである。その後、数日間は、島の回りを航海。そして一群の島々を発見した。島の人々が水を売りに出向いて来たので、因みにこれ等の島を「水の島」と名付けることにした。ただし、それ等の島々は海図にも載っていない。他の日本人はむろん、島の住民たち、それに中国人（の乗組員達）は、お互い言葉によるコミュニケーションでは問題があった。しかし、文字を通しては、かなりの意思疎通ができたのである。これらの島々での滞在期間は短いものであった。これら二隻の船は島々に別れを告げた後、離れ離れになりながらアメリカ北西海岸を目指して進んでいった」と記録している。

筆者が1975年オレゴン州ポートランドにおいて「レディ・ワシントン号」に関する祝典に参加した後、リチャーズ女史が記載した英文も上記のホスキンの日記の一部を使用して「レディ・ワシントン号」の歴史的日本来航を歴史に残るシンボリックな出来事として記述している。以下がリチャーズ女史の記録である。日米関係はそこから始まったのである。

Lady Washington came to be the first American ship to land at a port in Japan in 1791, some 62 years prior to the entry of Commodore Perry and the official contact between the two nations in 1853. It is doubtful that Capt. John Kendrick, then in command of the "Lady Washington" realized the historic significance of the event when he anchored at Ohshima in the port of Kushimoto, 184 years ago.

[Hopkins gives the following epitome of the voyage:] "Captain Kendrick left Larks Bay in March in accompany with the Grace of New York Captain Douglass New York Captain Douglass they went into a harbor on the southern coast of Japan where they were received by the natives with the greatest hospitality. Here Captain Kendrick displayed the American flag which is probably the first ever seen in that quarter (御手洗 昭治『黒船以前』)

② 佐々木 晴美 (北海道・マサチューセッツ協会理事、北海道日米協会会員)

「北海道の近代化とマサチューセッツ人脈」

明治維新は、世界史の中で次のように捉えることが出来ましょう。すなわち、16世紀に始まった大航海時代とヨーロッパの膨張、収奪されるインディオと残酷な黒人奴隷貿易、ヨーロッ

パによる世界制覇、産業革命により生み出された新しい生産・輸送システムを含む資本主義経済の出現、アメリカ独立戦争とフランス革命、議会在主権を持つ国民国家の出現、列強による植民地化とそれに反発する独立運動、ロシアの南下・東方への侵出などの世界情勢の流れの中で起こった日本の政治的・経済的・社会的な大変革と捉えることができると思います。直接的には、18世紀のインドの植民地化をめぐるイギリスとフランスの抗争～イギリス側の勝利とインドの完全植民地化（1877）、1840～1842年のイギリスと清朝との間のアヘン戦争と南京条約締結、1851～1864年の清朝における「太平天国」とイギリス・フランスと清朝との間のアロー戦争勃発などのアジアの動向、特に、これらのアジア情勢の中での清朝の衰退に江戸幕府のみならず東シナ海に面した雄藩が強い危機感を抱いていた状況の中で、1853年、1854年のペリー艦隊の来航を迎えたことが大きく影響したと言えましょう。その後、1853～1856年のクリミア戦争でオスマントルコ帝国とイギリス・フランス・サルディニア王国との連合軍に敗れ、トルコへの南下に失敗した後、1858年には清朝との間にアイグン条約を締結してウスリー江東部を両国の共同管理地とし、1860年にイギリス・フランス両軍が北京を占領した際に、清朝とイギリス・フランスとの和約に仲介の労をとったとして、露・清北京条約を締結し広大な沿海州を割譲させ、しかも、その翌年には、日本海に臨む不凍港都市・ウラジオストク（「東方を支配せよ」の意味）を建設したロシアの膨張にも、早くからオランダを通して最近の世界情勢を伝える「風説書」を受け取っていた江戸幕府が危機感を抱いたであろうことは容易に推察できます。

かくして、欧米の主権国家を手本とし、集権的官僚制の確立、法体系の整備、領土の確定、富国強兵、殖産興業を基本政策とした明治新政府にとって、日本の北辺に位置してロシアと国境を接し、約83,000平方キロメートルの面積を有する北海道の開拓～近代化は、最重要課題の一つでした。

明治新政府は、明治2（1869）年9月、開拓使を設置し、北海道の本格的な開拓に着手しました。明治4（1871）年1月、開拓使次官であった黒田清隆がアメリカに渡り、当時のグラント大統領に面会し、開拓使顧問の招聘を依頼し、その結果、農務局長であったホーレス・ケプロン（1804～1885、当時67歳）が大統領によって指名され、同年3月、開拓使顧問契約が成立しました。同年7月、ホーレス・ケプロンは、秘書エルドリッジ、科学技師アンチセル、土木技師ウオーフィールドを伴い横浜に上陸したことは広く知られています。この時、東京で、彼等一行は宮中吹上御所に招かれ、明治天皇に激励の言葉を受けています。また、離日に際しても、明治天皇が、彼等を招き、その労をねぎらっておられます。このことから、当時の明治新政府が北海道の開拓～近代化に、いかに真剣に取り組んでいたかがわかります。

ホーレス・ケプロンらが、3年10カ月の日本滞在中に行った各種調査に基づいて作成した「ケプロン報文」は、その後の北海道の開拓～近代化に関する重要な指針となりました。当時のアメリカ合衆国政府の重要な地位にあり、かつ、高齢であったにもかかわらず、明治新政府が、近代化に向けて全力を傾注していた状況を受け止め、殆ど未開の地であった北海道の開拓～近代化に向けて大きな貢献をされたホーレス・ケプロンは、北海道とマサチューセッツ人脈を結ぶ原点となりました。

なお、北海道の開拓～近代化に際し、ケプロンは基礎的事業重視・独立自営殖民・民営・自由

主義の立場に立ったのに対し、黒田は国の財政事情などから収益を上げる事業を重視し、民間資本力の脆弱から官営・保護主義の立場（渡航料や鍋釜の支給、営業や家を建てるための資金の貸与、食料の支給など）に立ったと言われます。明治政府が採用した黒田の方針が、後年の北海道の官依存体質の原点となったと思われま。

北海道とマサチューセッツ州の今後の交流の進め方については、「異文明の融和・融合～世界平和のための国際フォーラム」の北海道・マサチューセッツ州共同開催を提案します。

（趣旨） 明治維新後、開拓使顧問ホーレス・ケブロンに端を発するアメリカ、特に、マサチューセッツ人脈の助言と指導を通して、欧米文明との融和・融合を図りながら、その近代化を進めてきた北海道とマサチューセッツ州の政府・関係団体・識者らが協働して、「異文明の融和・融合～世界平和のための国際フォーラム」（開催要領は筆者作製別紙）を開催し、21世紀に入っても、なお、何の罪もない多くの市民、とりわけ、女性や子供達に不条理な死と苦難の日々を強いている異文明間の対立・抗争の悲劇的な状況を、現今の世界の英知を集め、少しでも融和・融合～世界平和の方向に転換するための方策について、地球史的・人類史的視点に立った議論・考察を行い、それに基づくメッセージを国際社会に発信することにより、世界の平和に寄与することを目指す。

③ 中垣 正史 （北海道・マサチューセッツ協会理事・事務局長）

ー世界にむけて開かれた目ー「北海道の近代化とマサチューセッツ人脈」〈資料として記録圧縮〉

1. 幕末から明治新政府へー日本の近代化への原動力となった人たちのほとんどが欧米の留学生

- ◆薩摩藩英国留学生ー1865年(慶応元年)3月、15名の留学生と4名の使節団を英国に派遣
森有礼→駐米公使(少弁務使)。初代文部大臣。村橋久成→戊辰戦争の砲隊長として活躍、その後開拓使へ(1874・明7 琴似屯田兵屋 208 戸建設、1876・明9 中川清兵衛技師とサッポロビール創設)。など
- ◆長州藩青年5名密出国→1863年(文久3年)5月、藩黙認で英国留学。井上馨→薩英戦争勃発により翌年帰国。大蔵大臣。殖産興業に尽力、財界に大きな力を持つ。伊藤博文→薩英戦争勃発により翌年帰国。初代内閣総理大臣。憲法草案起草。など
- ◆岩倉使節団の派遣<1871年(明治4年)11月12日～1873年(明治6年)9月13日>
米国・ヨーロッパ各国(12カ国)へ1年10ヵ月、岩倉具視(46歳)他107名派遣
ー1864 元治元年函館から密航米国留学していた新島襄(28歳)が通訳として同行ー

2. 明治政府の開拓使設置ー北海道の近代化へのステップ

- ◆明治2年(1869)7月、明治政府の開拓使設置 ー同年8月蝦夷地を北海道と改称。
黒田清隆が、明治3年(1870)5月開拓次官となり、明治7年(1874)8月には、第三代

開拓使長官となり開拓使廃止直前＜最後の開拓使長官西郷従道は、明 15, 1, 11－15, 2, 8 の短期在任＞の明治 15 年(1882) 1 月まで、本道行政の直接の責任者として活躍。北海道の開拓の基礎を築いた最大の功労者。一明治 4 年(1871 年)1 月、開拓次官黒田清隆(31 歳)、留学生 7 名とともに渡米(2 月 12 日～6 月 7 日)、森有礼(30 歳・駐米公使)とともにグラント大統領(49 歳)に開拓使顧問の招聘を依頼、米国農務省長官ホーレス・ケブロン(1804-1885、当時 67 歳)の顧問契約を成立させる。(この間、英・仏・蘭を経て露に至り、帰路米国で機械等を購入)。合計 78 人の外国人(そのうちアメリカ人 48 人)を招いて北海道開拓に欧米の先進技術を導入したのも黒田の高い識見によるものでした。

ホーレス・ケブロン＜1871 年(明治 4)8 月 25 日来日～1875 年(明治 8)5 月 23 日離日＞は、明治 4 年(1871 年)8 月、秘書エルドリッジ、科学技術師アンチセル、土木技師ワーフィールドを伴って来日。滞日約 3 年 9 カ月。アンチセル、ワーフィールドの開拓予備調査、ケブロン自身の 3 回にわたる道内各地の長期視察・調査を通してまとめられた「ケブロン報告書」(①明治 4 年(1871) 11 月、②明治 6 年(1873) 11 月、③明治 8 年(1875) 3 月)、さらに離日に際して、開拓使に提出した「報文要略」は、その後の北海道開拓の重要な指針となります。

3、ケブロン山脈・・・マサチューセッツ人脈(アメリカ人指導者たち)

ケブロン＜年俸 10,000 ドル＞は来日に際し、工学・地質・鉱学関係担当の技師として合衆国農務省に勤務していたアンチセル、測量・土木関係担当の技師としてバルチモア・オハイオ鉄道に勤務していたワーフィールド、それに書記兼医師としてジョウジタウン医科大学解剖学助手・合衆国農務省図書館司書をしていたエルドリッジという優秀なスタッフを同行しました。

ケブロン在任中のお雇い外国人の大半は、ケブロンの推薦・承認のもとに採用されたこともあり、多くのアメリカ人技術者が中心となったようです。地質・測量・鉱山開発のベンジャミン・S・ライマン＜年俸 7,000 ドル＞(1835－1920)＜1873・明 6, 1, 18 来日～1880・明 13, 12, 22 離日・滞在 6 年半＞助手マンロー(1872・明 5 来日～後、コロンビア大学 学部長)、農業・牧畜のポーマー(1871・明 4 来日～) オハイオ州の牧畜酪農家エドウィン・ダン(1848－1931)＜1873・明 6, 7 来日・25 歳～明 9, 6 来札―明 15, 12 離札～1931・昭 6, 5, 15 東京自宅死去＞などがよく知られています。明治 9 年(1876)6 月、エドウィン・ダンは、園芸担当のポーマーと共に札幌官園に転勤し、直ちに真駒内牧牛場の建設に着手、搾乳場・乳製品加工場・用水路など、牧場の施設が整備していきます。

ケブロン帰国後も、札幌農学校関係では、初代教頭・農学・化学・数学のウィリアム・S・クラーク＜年俸 7,200 ドル＞(1826－1886)＜1876・明 9, 7, 31 来札・当時 50 歳～1877・明 10, 4, 16 離札・滞在 8 ヶ月 16 日＞、土木工学・数学・第 2 代教頭で、時計台・モデルバーン・豊平橋などを設計したウィリアム・ホイーラー＜年俸 3,000 ドル＞(1851－1932)＜1876・明 9, 7, 31 来札・当時 25 歳～1879・明 12, 12 帰国・滞在 3 年半＞、化学・農学・数学・第 3 代教頭で、石鹸・ローソク・マッチ・コークス・魚油などの製造実験をしたディヴィッド・ペンハロ＜年俸 2,500 ドル＞(1851－1932)＜1876・明 9, 7, 31 来札・当時 22 歳～明 13, 8・滞在 4 年

間>、農学・官園監督・第4代教頭で、丘珠タマネギ・トウモロコシ・カボチャ・トマト・キャベツなどを栽培したウィリアム・ブルックス<年俸2,500ドル>(1851-1938)<1877・明10、2来日・当時26歳~明21・滞在10年7ヶ月>、生理学・解剖学・病院医術顧問で札幌の病院施設の充実・学校の身体検査の創始などに努めたジョン・C・カッター(1851-1909)<1878・明11、9来日~1887・明20、1・滞在8年4ヶ月。一死後1910年、遺言により札幌市に寄付された500ドルをもとに1938年・昭13に大通西5「聖恩碑」四隅にカッターさんの水飲み場が設置されている>、数学・土木のピーボディー(1878・明11、12着任~明14、7離任)、サマーズ(1880・明13、6着任~明15、6離任)、ストックブリッジ(1885・明18、5着任~明22、1離任)、ヘート(1888・明21、1着任~明25・8離任)、ブリガム(1889・明22、1着任~明26、11離任。<外国人教師の最後>)など合計10名を迎えています。これら札幌農学校初期の米国マサチューセッツ州出身の教師は、総じて勤勉で献身的に職務以外の仕事にも非常に熱心に取り組み、ほんとうに北海道開拓期の立派な指導者でした。

また、茅沼・幌内炭鉱のゴージョー、ダウス(2名、1879・明12来日~)、鉄道敷設・土木顧問のジョセフ・クロフォード(1878・明11来日~)、水産加工・魚肉缶詰製造のトリート(1877・明10来日~)などが招かれており、ケプロンを筆頭に、78名の「お雇い外国人」中48名がアメリカ人でした。

■ケプロンは、1871年(明治4年)9月、早速、東京に農事試験場「官園」3ヶ所設置して、アメリカから輸入した動植物を管理し、同時に北海道の七重・札幌にも官園を設置。札幌では、札幌本庁敷地北側に3600坪(後に40万坪に拡大)の「御手作場」を設け、種々の農作物を栽培。「葡萄園」「ホップ園」「果樹園」なども設けられる。その後、1876年(明治9年)には、この官園のうち、30万坪が札幌農学校農場に移管される。

開拓使は、ケプロンの献策により、札幌市内大通一北1条・東1丁目一東4丁目を工業ゾーンとして、多くの「官営工場」を建設する。現在のサッポロビールの原点「開拓使麦酒醸造所」がこの地に誕生する。

■ケプロンの進言を受けて、1872年(明治5年)3月開拓使「仮学校」開校。1875年(明治8年)9月札幌に移転して「札幌学校」とし、翌年(明9)8月14日クラーク博士一行を迎えて「札幌農学校」が開校されます。

開拓使麦酒醸造所を実現した村橋久成の生涯と業績

—薩摩藩英国留学生、そして黒田清隆とともに箱館戦争終結・開拓使事業に尽力—

■まえがき—明治維新の原動力

薩摩藩（現在の鹿児島県）は、明治維新と日本の近代化に有為の人材を多く輩出しています。…西郷隆盛、大久保利通。そして蝦夷から北海道への転換期の北海道近代化の推進力となった開拓使（明治2年7月～明治15年）時代の指導者の多くも、薩摩藩の出身でした。…黒田清隆、村橋久成、永山武一郎、時任為基（函館県令）、調所廣丈（初代札幌農学校長・札幌県令）、湯地定基（根室県令）、園田安賢（第8代北海道庁長官）、河島醇（第9代北海道庁長官）、山之内一次（第11代北海道庁長官）…。

江戸期の薩摩藩は、加賀百万石に次ぐ七十七万石の大国といわれます。しかし、1600年の関ヶ原合戦で西軍として徳川軍と戦って敗れ、領土没収は免れたものの、農民の人口比率が低いこと・毎年の台風被害などにより貧乏国となったようで、琉球・中国との貿易などをすすめ、財政建て直しを急務としていました。幕末には、藩主島津斉興の家臣調所広郷の強硬策により立て直しに成功したといわれます。次の藩主島津斉彬（1809-1858）は進歩的で広い視野の持ち主でした。斉彬は、早速、鉄を重要視してその実験室ともいふべき「花園製錬所」やその鉄工場群「集成館」などを建設します。そこでは、鉄砲・大砲などの武器や農具・薩摩切子のガラス製品などを開発しています。また藩校「造士館」、さらに洋学教育学校「開成所」を設置しています。この西欧の学問や新しい技術をいち早く導入する先見の明が、日本近代化の原動力となったのでした。

鹿児島中央駅前に、この近代日本の開花期に大きな役割を果たした「若き薩摩の群像」（昭和57年・中村晋也作）が建てられています。薩摩藩が、*「生麦事件」（1862・文久2、8、21）に対する英国の賠償金請求を拒否したために、1863年（文久3、7、2）英国艦隊7隻が鹿児島湾に進入、激しい砲撃戦となりました。この[薩英戦争]により西欧文明の威力を痛感させられた薩摩藩は、前藩主島津斉彬の遺志を継いで、1865年鎖国の禁を犯して19名の薩摩藩留学生を英国に派遣しています。彼らの多くは、幾多の困難を克服して学問や技術をおさめ、帰国後各分野ですぐれた業績をのこすこととなります。

その1人が、村橋久成（1842-1892）でした。村橋は、帰国後、黒田とともに戊辰戦争に加わり・箱館戦争では官軍の軍監として榎本への降伏勧告の任に当たっています。その後、開拓使に出仕して勸業事業を担当し、農事試験場「官園」の設置、「琴似屯田兵村」の建設、「開拓使麦酒醸造所」（現在サッポロビールの前身）創設など、北海道開拓事業に尽力しました。今回は、この「村橋久成」の生涯と業績を掘り起こしてみたいと思います。 <*「生麦事件」=「HOMAS」58号2頁参照>

(資料) 若き薩摩の群像＝1865年(慶応元年)薩摩藩派遣英国留学生

[薩摩藩英国使節団—4名]

新納久修(団長格・紡績機械買い付け) 松木弘安(御船奉行・帰国後博物館創立者) 五代友厚(御船奉行見習・紡績機械買い付け、後初代大阪商工会議所会頭) 堀孝之(英語通弁)

[留学生—15名]

町田久成(開成所掛大目付学頭・海軍測量学) 村橋直衛(小姓組番頭・陸軍学術、後開拓使事業に洋式農業技術導入) 畠山義成(当番頭・陸軍学術、帰国後渡米法律政治学を治め初代東京開成学校長<現東大>) 名越時成(当番頭・陸軍学術) 鮫島尚信(開成所句読師・文学を学ぶ、帰国後渡米、後初代在外公館弁務使<フランス駐在・特命全権公使>) 田中盛明(開成所句読師・化学を学び渡仏、帰国後兵庫県生野鉦山局長) 中村博愛(医師・医学を学び渡仏、帰国後開成所フランス語教授、後外交官<オランダ・ポルトガル・デンマーク公使>) 森有礼(開成所諸生・帰国後渡米、後初代駐米大使、初代文部大臣) 吉田清成(開成所句読師・海軍測量学、帰国後渡米政治経済学を学び、明治政府の財政・条約改正問題に取り組む、後駐米公使) 市来和彦(奥小姓開成所諸生・海軍測量学、帰国後渡米、後海軍兵学校長) 高見弥一(開成所諸生・海軍測量学、帰国後中学校数学教員) 東郷愛之進(開成所諸生・海軍機械術、慶応4年病没) 町田実積(開成所諸生・海軍機械術) 町田清次郎(開成所諸生・15歳幼少のため勉強科目を決めなかった) 磯水彦助(開成所諸生・13歳幼少のため勉強科目を決めなかった、スコットランドへ移り、後渡米して広大なぶどう園経営・葡萄酒製造に努め、ぶどう王として生涯を送っています。)

■村橋久成の生立ち

村橋久成(直衛)は、1842年(天保13年)10月、薩摩藩主島津家の一門である加治木島津家分家、村橋久柄の長男として出生。のち直衛、久成と改名。その幼少期については不明。幕末の薩摩藩にはきびしい階層がありました。鹿児島城下に住む城下士、地方に住む郷土に大別され、さらに城下士は御一門四家(隈州重富家・同加治木家・同垂水家・薩州今和泉家)を頂点に九つの家格に分かれていました。1848年(嘉永元年)、父村橋久柄は琉球着任の船が難破して行方不明となり、久成6歳にして家督を相続して、後、将来家老職に就くべき役職の御小姓組番頭として登城します。古い秩序が崩壊して行く時代の空気の中で、藩校「造士館」に学び、さらに俊才として、「開成所」(1864年・元治元年設立)諸生に選ばれて新しい洋学教育を受けます。そして翌年1865年(慶応元年)3月、23歳、薩摩藩派遣英国留学生の1人に選ばれて渡英、ロンドン大学法文学部で陸軍学術研究をめざします。

薩摩藩は生麦事件に端を発する「薩英戦争」(1863)で英国と、長州藩は攘夷の実行と称して次々と外国船を砲撃したことにより連合艦隊の長州藩総攻撃という「下関戦争」(1864)で英・仏・蘭・米と対戦して大打撃を受けます。鎖国の眠りから西欧列強の圧倒的な武力と先進文明に覚醒させられたのでした。そして、長崎のグラバー邸で知られる英国商人トーマス・ブレイク・グラバー(1838～1911)の「グラバー商会」の手引きを通じて薩長両藩の英国ロンドン大学

留学生派遣が実現します。

薩摩藩は、1865年（慶応元年）、4名の使節団と15名の留学生「サツマスチューデント」を派遣します。幕府の鎖国令下のため、全員変名で、甑島大島辺出張という名目で、3月23日朝、串木野羽島浦からグラバー商会が用意した蒸気船「オースタライエン号」で密かに出港しています。一行は、シンガポール・スエズ・地中海を経て、約2ヶ月後の5月28日英国サザンプトン港着、同日夜ロンドンに到着します。「グラバー商会」のライル・ホームというイギリス人の世話で、学生たちはロンドン大学に留学します。一行は途中、船上で髻（まげ）を切り落としたといわれます。

一方、長州藩は、1863年（文久3年）5月12日、5名の青年のロンドン留学を黙認して、グラバー商会の手引きで横浜港から密出国させています。井上馨（後初代外務大臣）・遠藤勤助（後造幣業に尽力、造幣局長）・山尾庸三（グラスゴーで造船を学び、明治4年工学寮〈東大工学部〉創立、法制局長官）・伊藤博文（初代内閣総理大臣、大日本帝国憲法発布）・井上勝（後鉄道の父。新橋-横浜間日本初の鉄道敷設。鉄道庁長官、小岩井農場創設者）のいわゆる「長州ファイブ」です。井上馨と伊藤博文の二人は、ロンドンの新聞紙上で薩英戦争勃発・迫り来る下関総攻撃の危機のことを知り、世界情勢を藩に説得するために、翌年3月急遽帰国しています。その後、1865年（慶応元年）、奇しくもロンドンで、薩摩藩留学生と長州藩残り三人の留学生が面会しています。〈「畠山義成洋行日記」にその経緯が記されています。〉

村橋は、ロンドン大学の専攻を、当初海軍だったのを渡航後陸軍学術に転向しています。英国滞在中、イギリスの世界最先端の近代農業の姿を見聞したことが、帰国後、開拓使で北海道の近代農業推進に大きく役立つこととなります。イギリス到着後約2ヶ月の7月29日、一行はロンドンの北約70キロのベッドフォードの鉄工所見学・ハワード農園見学に出かけています。最新式の蒸気機関諸機械とその操作方法、また人馬による農耕しか知らなかった目には自動鋤・刈取機などの農業機械は大きな驚嘆であり、感動的な体験であり近代的農業との鮮烈な出会いだったといわれます。

村橋は、多くの強い衝撃をうけて、1866年（慶応2年）3月28日、ロンドンを発ち、松木弘安・イギリス人2名とともに、滞英1年で他の留学生より先に帰国の途につきました。約2ヶ月後上海着、イギリス帆船に乗り換えて、帆船操縦術習得のため同乗していた紀州藩士陸奥宗光（後の外務大臣）とともに5月24日、薩摩阿久根に到着。翌日村橋と松木は鹿児島城下に入りました。村橋が英国に留学していた期間は、幕末の動乱期にあり、時代は、一気に討幕・維新にむけて動きだしていました。

1867年（慶応3年）10月大政奉還、翌年慶応から明治へと年号があらたまります。旧幕府軍と薩長を中心とした新政府軍が激突する戊辰戦争で幕をあげます。

■ 戊辰・箱館戦争に活躍、開拓使出仕

村橋は、1867年（慶応3年）秋結婚。そして翌年7月16日、戊辰戦争の加治木大砲隊長として250名の部下をひきつれて出陣し、東北各地を転戦しています。箱館戦争では、新政府軍の軍監として、参謀黒田清隆とともに活躍します。旧幕府軍との和平交渉のキーマンとなり、箱館病院院長高松凌雲を通して榎本武揚に降伏を勧告します。しかし榎本は、徹底抗戦を伝える返

書と日本海軍の将来のためにと「海律全書」（榎本がオランダ留学中に手にいれて長く秘蔵していた書物）を、高松を通じて官軍の総参謀黒田清隆に贈ったのでした。黒田は返礼として酒五樽と鶏卵 500 個を贈って箆城の労をねぎらったといわれています。しかし、数日にして榎本軍は降伏を表明して、五稜郭は落城します。村橋はこの箱館戦争終結の決定的な現場に立ち会っていたのです。戦後、村橋は7月14日、郷里に戻りますが、長男亀千代（久次）は顔をみることなく夭折、妻志うは実家に戻っていました。

1871年（明治4年）11月、開拓使東京出張所に出仕。次官（のち長官）黒田清隆に用いられて、翌年東京官園勸業事業を担当、1873年（明治6年）12月七飯開墾場の責任者となり農業振興に努力します。

1874年（明治7年）、ケプロンの進言により、屯田兵最初の入植地を札幌郡琴似村と定めて、兵屋 208 戸・中隊本部・練兵場・授産所などを建設しますが、この「琴似屯田兵村」建設の任にあたったのも村橋久成でした。翌年5月、屯田兵・家族 965 人第1陣が入植し、以後、北海道には、最終的に 37 の兵村が出来、合計約 4 万人が入植します。＜屯田兵制度は 1904 年（明 37）廃止まで続きます。＞

1871年（明治4年）9月、開拓使は、東京の青山・赤坂・麻布に農事試験場「官園」3ヶ所設置して、アメリカから輸入した動植物を管理しました。（この建設・事業責任者に、村橋久成が任命されています）。開拓使は、「将来北海道で栽培する農作物は、まず東京の官園で試験栽培し、成功のメドがついてから、北海道に移殖しよう」と考えていました。後に、北海道の七重官園（のち七飯勸業試験場）・札幌官園が設置されました。札幌では、札幌本庁敷地北側に 3600 坪（後に 40 万坪に拡大）の御手作場を設け、さまざまな農作物が栽培され「葡萄園」・「ホップ園」・「果樹園」なども設けられました。その後、1876年（明治9年）には、この官園のうち、30 万坪が札幌農学校農場に移管されました。

開拓使は、1875年（明治8年）、「麦酒醸造所建設」も、まず東京青山の官園で試験をすることにしました。しかし、開拓使東京出張所農業課の最上職の村橋は、北海道には、建設用の木材・水・冷製ビールに必要な氷雪などが豊富にあり、最初から札幌に建設すべきことを建議して、その主張が認められたのでした。それ以前に、アンチセルが岩内で、そしてボーマーも日高で野生のホップを発見し、ケプロンに報告していたことも作用したかもしれません。

■開拓使麦酒醸造所建設と中川清兵衛

1876年（明治9年）5月、いよいよ、「創成川以東は工業地帯にすべし」というケプロンの進言を受けて造成されていた開拓使通り（現在の北3条通り）の創成川東の事業所群ゾーンに、「開拓使麦酒醸造所」「葡萄酒醸造所」「製糸所」の三つの施設建設をすすめられ、また鶏卵孵化場、仮博物館、牧羊場なども創設され、北海道産業の基礎が固められていきました。

村橋（33 歳）は、青木周蔵の紹介で、ドイツビール醸造法を習得した中川清兵衛（28 歳）を迎えて、いわば二人三脚の努力で、日本最初の本格的な官営のビール工場を完成させたのでした。1876年（明治9年）9月23日開業式の時、ビール樽を並べて白い塗料で「麦とホップを製すればビールといふ酒になる」と大書させた写真が残っています。

技師の中川清兵衛（1848～1916）は、越後国三島郡与板（現在新潟県長岡市）出身で、17歳の時、

横浜のドイツ商館に勤務。幕府の禁を犯して1865年(慶応元年)4月イギリスへ渡航、1872年(明治5年)ドイツへ移り、当時ドイツ留学中の青木周蔵(後に外務大臣)の支援をうけて、最大のベルリンビール醸造会社ティボリ工場で修業します。2年2ヶ月後の1875年(明治8年)5月、同社社長・工場長・技師長連盟の豪華な「修業証書」(現在サッポロビール博物館所蔵)を受けて帰国しています。

この厳しいビール醸造技術を習得した中川技師抜きには、「開拓使麦酒醸造所」(今日の「サッポロビール」)の誕生はなかったのです。中川は、醸造所の設計・機械・予算などのすべてをまかされて、苦勞の末、翌年6月、日本人の手によるドイツビールの醸造に始めて成功したのです。中川は、開拓使から高給を支給され、札幌で大きな洋風官舎住んだといわれます。

中川が造ったビールの宣伝コピーは、「風味爽快ニシテ健胃ノ効アリ」でした。1881年(明治14年)明治天皇が醸造所を行幸された際には、中川自身が天皇のジョッキにビールを注いだという記録も残っているそうです。1885年(明治18年)、醸造所は民間に払い下げとなり、実業家大倉喜八郎経営のサッポロビール誕生となります。翌年招いたドイツ人技師マックス・ポールマンと中川は意見が合わず、1891年(明治24年)2月、このビール会社をやめて家族とともに小樽へ移住、「中川旅館」(現在の「ホテルふる川」のある所)を経営したといわれます。1898年(明治31年)繁盛していた旅館を手放して横浜へ移住。そして1916年(大正5年)食道癌で死去、享年69歳でした。彼の末期の水は生前の希望によりサッポロビールでなされたといわれます。

■開拓使辞職

1877年(明治10年)6月、「冷製札幌麦酒」と名づけられた札幌産のビールがはじめて東京に到着したときは、輸送の長旅のあいだに内圧によってコルクが抜けて中身が噴出してしまうような状態であったようです。その後、ホップとビール酵母の確保・ビンの確保・輸送手段などあらゆる困難を乗り越えて、ビール生産がようやく軌道にのっていました。しかし、村橋は、1879年(明治12年)1月、病氣療養のため、1ヶ月間熱海温泉へ出発、その後東京在勤となり、勸業課長に任せられます。

村橋は、1880年(明治13年)5月13日進退伺を黒田長官に提出するも却下され、6月9日、勸業試験場長に任せられます。しかし突然、翌年5月4日、開拓使を辞職します。5月11日「奉職中職務格別勲励として慰勞金200円下賜されています。北海道近代的農業の実現に情熱を傾注してきた村橋にとっては、明治13年11月の官有物民間払い下げ公示後、「薩摩閥の官財癒着」として新聞にすっぱ抜かれた一大スキャンダル・明治15年開拓使廃止決定などによって、夢を打ち砕かれた大きな憤りと絶望だったようです。

辞職後の村橋は、その後ぶつりと音信を絶ったのです。どこでどうしていたのか、今日でもその経過はいっさい謎のままになっています、…雲水のような身なりに姿を変えて、十数年間各地を行脚放浪していたのではないかと推測されています。その果てに、1892年(明治25年)9月25日、神戸の路上で倒れていたところを発見されたのでした。

■結び・村橋久成の死

1892年(明治25年)9月25日、神戸市葺合村六軒道の路上で、巡視中の巡査が倒れ伏して動

かない男性を発見しました。男は取り調べに対して最初は偽名を名のり、身元が判然としないまま、衰弱が激しく、3日後の9月28日夜息をひきとりました。身元不明のまま遺体は、神戸の墓地に仮埋葬されました……<死亡認(診断書)は、肺結核・心臓弁膜病>。

そして、半月後の10月10日の「神戸又新日報」に次のような死亡広告が載ったといわれます。

鹿児島県鹿児島郡塩屋村 村橋 久成

1、相貌 年齢四十八歳、身幹五尺五寸位。顔丸ク色黒キ方、薄キ当痘痕アリ。

目大ニシテ鼻隆キ方。前歯一本欠。頭髮薄キ方。其他常体。

1、着衣 紺木綿シャツ一枚、白木綿三尺帯一筋。

右ノ者本年九月二十五日當市葺合村ニ於テ疾病ノ為メ倒レ居リ、當庁救護中
同月二十八日死亡ニ付、仮埋葬ス。心當リノ者ハ申出ヘシ。

明治二十五年十月 神戸市役所

さらに、10月18日、新聞「日本」雑報欄に、この死亡広告を転載、「英士の末路」という次のような記事が掲載されたのです・

この行倒人村橋久成とは、そも如何なる人の身の果てなるや。またこれ当年英豪の士ならんとは、聞くも憐れの物語なり。また新子の語るを聞けば、村橋氏は鹿児島藩の士族にして、薩摩一百二郷の内、加治木領主の分家なり。維新前薩摩藩主が時勢の趣ところを看破し、藩士中最も俊秀の聞こえある少年十名を選抜して英京倫敦に留学せしむべしとして甲乙と詮索ありし時、村橋氏もその十指の中に数えられ、故の鮫島尚信、森有礼、吉田清成、今の松村淳蔵等の諸氏と串木野の湊より舟出して、八重の潮路を名誉と勇氣に擁護せられ英国に渡航し、蛍雪苦学の結果も見えて前途極めて多望なりしが、留まること1年計りにして不幸にも他の二三の学友と共に召還せられし後ち、藩にありて文武を励み続けるが、幾くもなく戊辰の戦争となり、村橋は当時参謀長たる黒田清隆氏の手へ属し、調所廣丈、安田定則両氏らと奥羽箱館に出軍し勇名を官賊の間に轟かし、殊に黒田氏に厚遇せられしが乱平いで後ち、特に軍功を賞せられ物を賜う等の事あり。黒田氏の開拓使長官となるに及んで調所廣丈、堀基、小牧昌業諸氏と肩を並べて奏任官たりしが、氏は其後何事に感じてや不図遁世の志を抱き、朋友親族の切に留むるをも聴かて官を捨てて飄然行脚の身となり、身のなる果てを朋友知己にも知らせたり。定めなきが浮き世の常とは云え、左りとは墓なき最期かなと揚升庵曰く、青史幾行名姓、北郎無数荒丘、前人田地後人収、説其龍争虎鬪、觀し来れば榮枯盛衰は夢のごとく功名富貴は幻に似たり。村橋氏の感する何の爲めに感せしやは知らされとも、其の末路を見て轉た凄然たるものあり。

また、10月20日、新聞「日本」投稿欄に、旧友の弔歌弔文が掲載されました。

村橋久成氏を弔う はかなしみ君もはかなくなりにはけりはかなきものは扱もうき世か

路傍の斃死、君にありては九品の浄室に寂を遂げたりといはんか、隻岡の法師嘗て歌うを聞けば、ここもまた浮世なりけり。よそながら思ひしままの山水もかなと。扱は浮世ながらの浄境なきを觀ぜしならん。さるとても当年十秀才の一人英京の留学生。

これらの新聞記事で、はじめて村橋の凄絶な死を知った旧友の開拓使元幹部たちは驚き、連絡を取り合います。旧友たちが新聞「日本」の「英士の末路」によってその死を知り、元開拓使官吏加納通広が、村橋の実子圭二(東京在住)を伴って神戸に出かけて遺骨を持ち帰り、10月23日青山墓地で黒田清隆ら参列のもとに、村橋久成の葬儀がとりおこなわれたのでした。その葬儀には、時の政財界の大物が参列、または香典を寄せています。(村橋久成のお墓を守ってこられた、実の孫・村橋御代氏(圭二の子)所蔵の「香典料人名帳」によって窺い知ることができます。)

＝「夢のサムライ」より引用転載します＝

伯爵黒田清隆・伯爵夫人黒田瀧子、日本郵船会社社長森岡昌純、北海道炭礦鉄道会社堀直樹、日本郵船会社神戸支店長前田清照、貴族院議員湯地定基、鹿児島県知事山内隄雲、北海道炭礦鉄道会社向井三七、外務大臣陸奥宗光、北海道炭礦鉄道会社社長堀基、通信大臣秘書官佐藤秀頭、兵庫県警務部長野間口兼一、元開拓使官吏加納通広、元開拓使工業局長長谷部辰連、帝室

博物館館長小牧昌業、鳥取県知事調所廣丈、通信次官鈴木大亮、屯田司令官永山武四郎、海軍大臣仁景範、北海道炭礦鉄道会社副社長園田実徳、枢密院顧問西徳二郎、広島県知事折田平内、愛知県知事時任為基、北海道炭礦鉄道会社副社長二木彦七、北海道炭礦鉄道会社検査兼金井信之、小樽警察署長森長保、札幌麦酒会社内藤兼備、蚕糸製造業足立民治、北海道果樹協会理事阿部隆明、元開拓使官吏上野正、元開拓使官吏根岸定静、屯田兵司令部家村住義、元開拓使官吏永田盛庸、元開拓使官吏桑山敏、

現在、村橋久成は、東京・青山霊園に眠っています。墓石には丸に十の字の島津家の家紋があり、「正七位村橋久成墓 鹿児島県士族 明治二十五年九月二十八日没 享年五十有三」という文字が彫り込まれています。

1982年(昭和57年)の田中和夫著「残響」で、村橋の業績が広く知られるところとなり、翌年には、鹿児島の芸術院会員中村晋也氏製作の胸像「残響」が完成しています。

2004年(平成16年)2月村橋久成胸像「残響」札幌建立期成会(会長木原直彦)が発足して、それを札幌の知事公館前庭に建立。2005年(平成17年)9月23日、高橋はるみ知事によって除幕されました。



村橋久成胸像「残響」(知事公館前庭・題字は書家中野北冥氏揮毫)

村橋久成胸像「残響」

村橋久成(1842～1892)は、鹿児島県(薩摩藩)の人、幕末にロンドン大学に留学し、戊辰の役の箱館戦争では政府軍の軍監として活躍した。のち、開拓使に出仕して勸業事業を担当し、麦酒醸造所(サッポロビールの前身)をはじめ、琴似屯田兵村、七重勸業試験場、葡萄酒醸造所、製糸所、鶏卵孵化場、仮博物館、牧羊場、などを創設し、北海道産業の礎となる。1882年に職を辞して行脚放浪の身となり神戸市外で没した。その偉業は、1982年刊行の田中和夫著「残響」で知られるところとなり、翌年には中村晋也日本芸術院会員が胸像「残響」を制作。2004年2月に期成会が発足し、多くの方の賛同を得てこの像の建立をみた。

2005年9月

村橋久成胸像「残響」札幌建立期成会
会長 木原 直彦

<主な参考文献及び参考資料>

- 「残響」田中和夫著 北海道出版企画センター
- 「夢のサムライー北海道にビールの始まりをつくった薩摩人=村橋久成」西村英樹著 北海道出版企画センター
- 「札幌事始」さっぽろ文庫7 札幌市教育委員会編
- 「人脈北海道・産業界編 サッポロビール」北海道新聞記事(昭和 54, 3, 2 夕刊)
- 「波乱の生涯—村橋久成 サッポロビール生みの親」北海道新聞記事(昭和 54, 12, 19 夕刊)
- 「村橋久成晩年の謎に迫る」北海道新聞記事平成 21, 12, 31
- 「村橋久成胸像「残響」建立記念誌」村橋久成胸像「残響」札幌建立期成会編 中西出版株式会社
- 「箱館戦争銘々伝」好川之範 近江幸雄編 新人物往来社
- 「夜明けの雷鳴」吉村 昭著 文春文庫
- サッポロビール博物館資料
- その他、インターネット資料など

ケプロンの通訳～開拓使判官 湯地定基の生涯と業績

—薩摩藩第二次米国留学生、そして黒田清隆のもと開拓使事業に尽力・根室県令—

■まえがき

北海道の近代化は、明治政府の開拓使設置(1869年<明治2年>7月)により本格的にスタートします。初代判官島義勇(1822-1874)、第2代判官岩村通俊(1840-1915)の先見の明、続く黒田清隆(1840-1900)開拓使次官(のち長官)の指導力と、黒田の招きによる多くの米国の先進技術・教育の専門家たち、開拓使顧問のホーレス・ケプロン(1804-1885)、鉱山・地質測量のベンジャミン・S・ライマン(1835-1920)、農業牧畜のエドウィン・ダン(1858-1931)、高等教育のウィリアム・S・クラーク(1826-1886)、ウィリアム・ホィーラー(1851-1932)、デヴィッド・P・ペンハロー(1854-1910)・・・などのすぐれた指導力により、各分野の開拓事業が進められたのでした。札幌農学校も、クラーク博士一行を迎えて1876年(明治9年)8月14日に開校しています。

薩摩藩(現在の鹿児島県)は、明治維新と日本の近代化に有為の人材を多く輩出しています・・・西郷隆盛、大久保利通。そして特に、蝦夷から北海道への転換期の北海道近代化の推進力となった開拓使(明治2年7月～明治15年)時代の指導者の多くは、薩摩藩の出身でした・・・黒田清隆、村橋久成、永山武四郎、時任為基、調所廣丈、湯地定基、岡田安賢、河島醇、山之内一次・・・。

今回は、この北海道の開拓事業推進に大きな足跡をのこした一人、湯地定基(1843-1928)の生涯と業績をたどってみたいと思います。彼は、米国留学帰国後開拓使に出仕、ケプロンら外国人顧問の通訳を務め、その後、七重勸業試験場長、根室県令などを務めています。その間、漁業・農業の改善普及などに取り組み、特に馬鈴薯の栽培を勧めて、特産品にまで事業を発展させたので、芋判官・芋県令ともいわれて、その生涯を北海道の洋式農業普及をめざして誠実に歩んだ人といえます。

■湯地定基の生い立ち—アメリカ留学の薩摩藩士

湯地定基(ゆちさだもと)は、1843年(天保14年)9月4日、薩摩国鹿児島郡鹿児島泉町で、薩摩藩士湯地定之・貞の長男として出生。別名「治右衛門」。父定之は、進歩的な人で、長男・3男をアメリカに藩費留学させ、7人の子の末子「静子」(後に乃木希典夫人となり、大正元年9月13日、明治天皇<7月30日崩御>の御大葬の日に、希典夫妻殉死)も10歳で友人の開く塾に入れています。

1869年(明治2年)8月、24歳のとき、仁礼景範・江夏壯助・種子島敬輔・吉原重俊らと共に薩摩藩第二回留学生としてイギリスに渡り、1870年(明治3年)9月藩命によりアメリカに渡り、マサチューセッツ農科大学へ留学、クラーク博士(後の札幌農学校初代教頭)の薫陶を受けて農政学を学び、ます。ケプロンの記録によると、ニュージャージー州のブルンスウィック大学でも学んだようです。そして、翌1871年(明4年)12月27日帰国します。

■開拓使出仕—ケプロン一行の通訳として活躍

1872年(明治5年)1月、湯地は、薩摩藩出身の尊敬する先輩黒田清隆開拓使次官に招かれて、

開拓使8等として出仕。開拓使顧問として来日していたホーレス・ケプロン(滞日：1871・明4年8月25日～1875・明8年5月23日)と同行のアンチセル、ワーフィールド、エルドリッジ一行の通訳の任に当たります。湯地は、以後3回に及ぶ、ケプロンの長期北海道出張すべてに通訳として随行したといわれます。ケプロンによると、湯地は口数の少ない、きわめて謹直な人柄であったようです。

まず、1871年(明治4年)8月～10月、アンチセルとワーフィールドの開拓予備調査のため北海道巡検。一行は、函館から恵山岬をまわって、噴火湾を横切り室蘭に渡り、海岸沿いに勇払川、千歳方面を通過して札幌着。札幌附近が全道の首府たるべき地点であることを確認します。約2ヶ月間馬に乗って巡視し、豊平川架橋(当時は明治4年4月の仮橋)の急務、製造工場や水車の設置場所の選定、札幌室蘭間の道路計画なども含めたものでした。

ケプロン自身の第1回目の道内巡検は、1872年(明治5年)5月～10月。東京湾を出帆して、函館・室蘭を経て札幌に到着。札幌の「開拓使本庁舎」(~6年10月落成)の建築状況や製材場その他の諸工場の所在地(現在の大通り東1・2丁目附近全体の広い地域)を検分、さらに石狩・小樽を視察し、室蘭・函館を経て帰京しています。

第2回目の道内巡検は、1873年(明治6年)6月～9月。黒田の指示を受けて、東京の開拓使官園の試験成果を移植するために設置する、七重・札幌官園・試験場の調査、その輸送方法に関する現地調査、牧畜・耕種の適地調査、鉱山開採方法に関する調査などでした。函館・七重官園・室蘭を経由して札幌着。札幌の農作・工場を検分後、ライマンを伴って豊平川・石狩川の調査、石狩・当別視察、小樽・余市を経て岩内の茅沼炭鉱を検分、長万部・函館を経て9月に帰京しています。

第3回目の道内巡検は、1874年(明治7年)5月～8月。七重官園における果樹の点検と育成方法、室蘭に設置すべき木挽器械所の調査、新室蘭・札幌・小樽に予定している殖民(屯田)地の調査、札幌の種畜場・果樹・堤防の検分調査、ホロムイ・岩内石炭山の石炭採掘・運搬方法、その他鉱物の探査、浦河管内の牧畜・開墾の適地調査、漁業改良の方法調査など多岐にわたっています。函館・室蘭を経て6月札幌着。札幌近郊・小樽を調査。8月札幌発、勇払・浦河を経て、函館へ、そして8月末帰京しています。

これらの長期にわたる北海道巡検、そして高く評価されている「ケプロン報文」等は、実は、通訳としての湯地定基の協力なくしては、決して結実しなかったものと思われます。湯地の果たした役割と功績はきわめて大きなものがあります。

■七重の官園一馬鈴薯の原種を移入して、はじめて栽培に成功

ケプロンの帰国後、湯地は、1875年(明8年)2月、七重開墾場(現、七飯町)の経営にあたり、洋式農業の普及に努めます。1876年(明9年)7月、はじめて北海道においてになった明治天皇御巡幸の案内役も務めており、洋式農具の使用法をご覧にいれ、チーズやアイスクリームなどを差し上げたといわれます。その時に植えたアカマツ並木が、現在も国道5号線沿いに見ることができます。

くなお、1941年(昭和16年)、照宮成子内親王殿下が、大沼にお成りになったのを記念して補植を行っています。七飯町開基100年(昭和52年)の調査によると、樹齢100年以上のもの808本、40年以上のもの345本、そのころ補植されたもの371本で、合計1,525本のアカマツ、ク

ロマツが植えられていました。また、この松並木は1975年(昭和50年)、七飯町の町木に指定されています。>

1877年(明10年)4月、札幌農学校の任期を終えたクラーク博士が、帰国を前にわざわざ七重に立ち寄ったのは、かつての教え子「湯地定基」を激励するためでした。湯地は、1878年(明11年)2月には牧場などの実際調査のため根室へ出張しています。同年7月には七重勸業試験場長になります。湯地は、米国マサチューセッツ州産のリンゴや芋(馬鈴薯)の原種を移入して、この寒冷の地ではじめて栽培に成功しています。後に、七重町が「男爵いも発祥の地」となる原点はここにあります。またこの間、アメリカ留学で体得した新知識により、農業畜産の改善、農産物の加工、水車整備、馬具・農具の製造を行い、多くの伝習生を育てています。その中には、アイヌの子弟もいました。1880年(明13年)には、札幌農学校1期生の小野兼基、柳本通義を招いて、育種や牧場経営を担当させて、みごとに試験場の成績をあげたといわれます。



函館市五稜郭公園裏の「男爵薯を讃ふ」碑

碑文 北海道帝国大学総長 伊藤誠哉書

(表) 男爵薯を讃ふ

(裏) 男爵薯は明治四十年頃時も函館船渠会社社長男爵川田龍吉氏がアメリカ原産のアイリッシュコブラーを七飯村の農場に輸入したもので輸入者に因んで男爵薯と称したものである
この薯は極めて早熟な上に病害に強く本道の風土にも適するもので約四十年の間に全道に普及栽培されその声価は全国的に高まるに至った
このように本道農業経営とわが国食料対策の上に安定性を築いた功績は広く世に紹介されてよいと思ふ

ここに渡島管内に於けるこの薯の生産に係わる者が図って男爵薯保存協会を設立し事案の一としてこの碑を建てその由来を明らかにすると共に川田男爵の功績を讃え永く感謝の意を記念するものである

昭和二十二年五月建立 男爵薯保存協会
〈昭和二十二年九月二十日除幕式 当時は五稜郭公園正面入口付近に建立〉

■ “根室のいも県令” —初代根室県令(知事)

1882年(明15年)2月、開拓使が廃止となり、北海道に函館(県令時任為基)・札幌(県令調所広丈)・根室の三県が置かれた時、湯地は、根室県令(知事)を命ぜられ赴任します。当時の根室・北方領土の人びとは、食糧不足に悩まされていたので、漁業中心の経営はきびしいため、着任早々部下に命じて洋式農業の普及に力を入れます。しかし米麦はもちろん、野菜類も他所に求めなければならないほどの寒冷な地であり、食糧供給のための海路も不安定でした。前任地七重で、ジャガイモが寒冷な北海道によく適することを熟知していた湯地は、当時五升芋と呼ばれていたジャガイモの種をもって各戸を回り、農具を与えるなどして強制的に奨励したといわれます。人に会うと、口ぐせのようにジャガイモの栽培を勧める県令の熱心さに、しぶしぶ重い腰を上げて試作してみると、海霧の多い根室でも比較的収穫がよかったようです。冬季間の食糧事情の緩和に役だっただけでなく、その後根室地方の特産品にまで成長させたのでした。こうして、人びとは「五升芋」奨励に熱心な県令を「芋判官」と呼ぶようになります。

湯地は、またコンブ・サケ・マス漁や魚かす製造の改善、千島北部の警備、アイヌ移住などにも尽力したので、こうした彼の功績を記念して、根室には、定基町(さだもとちょう)という地名が残っています。根室滞在は5年間。北海道で一番古い公共図書館の設置にも尽力しています。

■北海道庁勤務時代

1886年(明19年)三県廃止。北海道庁の誕生により、湯地は、北海道庁理事官(副知事相当)に就任します。北海道庁は、新しい農村建設のための植民選定・区画事業推進の資料調査を必要として、翌年、初代北海道庁長官岩村通俊は、湯地定基に2ヵ年の欧米派遣を命じます。湯地は、小野兼基、堀宗一(クラーク博士の通訳堀基の弟)を随員として、1888年(明21年)1月出発、ベルリンを拠点に、ヨーロッパ各国の農村や植民政策・甜菜農業などを視察。次いでアメリカに渡り、特色ある植民地の区画や処分方法を調査、ジョンズホプキンス大学では農村発達史の講義も受けて、1889年(明22年)9月に帰国します。植民地選定事業は、湯地の調査報告や札幌農学校教授佐藤昌介らの献策を受けて、内田瀨(きよし)らによって本格的な区画策定、移民導入がすすめられたといわれます。その最初が奈良県十津川の大洪水による樺戸郡新十津川集団入植でした。こうして、湯地によって路線が敷かれて、植民地開発が進められていきました。

■栗山で農場経営

湯地は、1890年(明23年)、48歳で、元老院議員に転じ、次いで貴族院議員に勅撰されますが、北海道への思いは強く、1893年(明26年)、東京の所有地を売り払って、私費を投じて空

知の栗山に 280 ヘクタールの貸下げを受けて、自宅を移して農場を経営、洋式機械を使って開墾をすすめ、開拓に成功しています。天照大神を祀る湯地神社を創建、地域住民の無事と繁栄を託しました。湯地は小作人たちに深い愛情を注ぎ、太平洋戦争後の農地解放まで農場経営を続けました。小作人 36 戸は、今も「湯地部落」として、豊かな農村となっています。

■晩年

湯地は、晩年を東京で過ごし、1928 年(昭和 3 年 2 月 10 日死去。享年 84 歳。8 男 2 女があり、栗山町の農場は子孫が引き継ぎ、「種子用ハウレンソウ」の栽培で有名になったといわれています。

<主な参考文献及び参考資料>

「北海道の歴史」 榎本守恵著 北海道新聞社 □ 「星霜」2 北海道史 明治 2(1875~1885) 北海道新聞社編 □ 「北海道歴史人物事典」北海道新聞社 編 □ 「静寂の声—乃木稀典夫妻の生涯」上・下 渡辺淳一著 文芸春秋社 □ 「北海道開拓功労者関係資料集録」(北海道) □ 「札幌事始」 さつぼろ文庫 7 札幌市教育委員会編 □ 「開拓の群像」中 北海道 □ 「根室・千島歴史人名事典」 根室・千島歴史人名事典編集委員会 編 □ 七飯町 資料 □ 栗山町 資料 □ インターネット資料など

-定山溪温泉の開祖- 知られざる 美泉 定山(1805~1877) の生涯

「美泉定山」(みいづみじょうざん)は、文化2年(1805)1月7日、備前国(岡山県)赤坂村周匝村黒本の池田藩主祈祷所の繁昌院妙音寺6代目宮崎行辨の次男として生まれる。幼名「常三」。幼くして仏門に入り、文政4年(1821)、17歳で、現在の倉敷市にある五流尊瀧院の道場に入山、滝に打たれ、断食の荒行に耐えて5年間の修行を積み、名を「常山」と改める。さらに、真言密教の奥義を極めるために、弘法大師の高野山できびしい修行を重ねて修験僧となった常山は、いよいよ霊山霊地を遍歴する諸国行脚の旅に出る。

北へ北へと向かい、仙台にしばらく滞在の後、山形県の出羽三山(月山・羽黒山・湯殿山)に籠もり、続いて秋田太平山の前岳・中岳・奥岳の三峰を踏破した後、嘉永5年(1852)津軽の三厩にたどり着く。いよいよ蝦夷地に渡る決意を固め、ちょうど立ち寄った御用船に身を任せて竜飛岬を越え、嘉永6年(1853)、蝦夷地松前に渡る。このとき、年齢48歳。

蝦夷地に渡った常山は、まず、松前藩の祈祷所、海渡山阿吶寺に入る。しかし、松前にはあまり長くとどまっておらず、さらに蝦夷地巡錫の旅がはじまる。安政元年(1854)、久遠(今の大成町)の太田山大権現に籠もること5年、ここでは、名を「宗健」と改め別当(住職)を務め、「太田の法印さま」と村びとから崇拜されたといわれる。

＜蝦夷地探検の松浦武四郎が、安政3年(1856)、太田山で備前生まれの僧「宗健」と会い、新道開発について語り合ったという記述(「西蝦夷日誌」)がある。武四郎39歳。常山51歳。＞

文久元年(1861)、常山は、さらに海岸沿いに北上して、船路で神威岬、積丹岬を回り、小樽内の張碓村にたどり着く。常山は、張碓村で、太田山時代の知人野村治兵衛のもとに腰を落ち着け、真摯に教化に努める。漁業円満・海上安全の祈祷に熱心で、その徳望は村内で評判となる。およそ5年滞在、アイヌの案内で温泉の出るところを探索して、「湯の澤鉦泉」を発見、葛山勇助や漁民の応援を得て、浴場を建て経営をはじめ。知人野村治兵衛ゆかりの女を迎えて共に鉦泉経営に当たり、また治兵衛の二女ツルを養女にする。常山は、歌・俳諧・絵画・彫刻にも秀でており、武道もたしなんでいて、その徳望はたちまち小樽内一帯の評判になったといわれる。

その後、常山がアイヌの若者に教えられて、現在の定山溪温泉を発見したのは、慶応2年(1866)。この温泉に住んで、ここを永住の地と定める。61歳。この地「定山溪」に定住した最初の人といわれる。常山はこの地こそ、自分がほんとうに捜し求めていた地であるとして、背後の山を「常山」と名づけて道場とし、毎朝、山野をめぐって天地に祈り、温泉場の開発に努めた。明治3年(1870)開拓使初代判官島義勇に道路開削を懇請し着工の約束を得るも、島はわずか4ヶ月で解任。後任の岩村通俊は常山の案内で温泉場に赴き、その素晴らしさに感動して、明治4年(1871)常山を「湯守」に任命し、浴場・宿泊所を建て新しい橋を架けた。

こうして常山は、扶持米(給料)を給される身分となり、初志がやっと実現する。常山は、これまでの苦難に満ちた巡錫の長い道りを振り返り、現在の幸せな思いを橋に託して「回春橋」

(現在の「月見橋」の前身)と名づけた。また、常山はこの年、平岸村開拓に入植した旧伊達藩士ゆかりのキンという41歳の女性を娶り、雇い人佐藤伊勢造夫婦と共に本格的に温泉場の経営にあたる。

この年明治4年(1871)10月、虻田—札幌間の本願寺道路が完成し、道路検分に来た東久世開拓使長官がこの温泉に立ち寄り、常山の温泉場開発の信念と熱意に心打たれ、常山の名をとって「この地を常山溪とせよ」と命じた。(これが後に、「定山溪」となる。)また後に、岩村通俊は、野生の鹿が傷を癒しに湯に浸かっていたことを常山から知らされ、この湯場を「鹿の湯」と名づけた。

常山は、湯守として温泉場の経営を続けるが、生活はきびしく、明治6年(1873)夏の大洪水で、回春橋は流され、本願寺街道も損壊してしまう。明治7年(1874)7月には、後任の開拓使大判官松本十郎の財政引締め政策により湯守廃止となる。常山は、自力できびしい温泉経営の決意をする。(この時に、新たな姓名「美泉定山」を名乗る)

明治9年(1876)、定山は、温泉開発の一策として小樽—定山溪間の山道開削に努力するも、資金難のために断念している。

翌明治10年(1877)11月、定山は、妻に行き先も告げず突然行方不明になり、還ることはなかった。その最期は長く不明であったが、昭和54年(1979)秋、小樽の正法寺の過去帳に、「明治十年(一八七七)十一月四日死亡 美泉定山法印」という戒名の記録が見つっている。72歳の生涯。これによると、定山は、行脚中に、突然心臓発作かなかで倒れ、死後10数日を経て張碓の村人に発見されて、舟で正法寺に運ばれたたようで、孤独な死と考えられる。

さて、定山の没後、未亡人キンは、明治13年(1880)温泉経営の一切を佐藤伊勢造に譲渡して、平岸村に帰り、養子を迎えて美泉家継承に努めたといわれる。

「美泉定山」を記念するもの

大正5年(1916)曹洞宗定山溪説教所が定山を開基として開山され、昭和18年(1943)移設建立。昭和21年(1946)12月、「定山寺」と寺号を改める。昭和3年(1928)定山50回忌に、「温泉開祖・美泉定山」の碑を建立。続いて昭和9年(1934)、前北大総長佐藤昌介の揮毫による定山の碑を定山寺境内に建立している。また、札幌出身の彫刻家木村恵保が、定山坐像を制作して定山寺に寄進している。

昭和25年(1950)には、定山溪神社(明治44年(1911)8月6日創立)に、祭神として合祀される。昭和41年(1966)3月、定山寺檀家総代(小須田多鶴代)が夫の一周忌に因み、「開祖美泉定山記念碑」を建立している。碑右横面に定山和尚の略歴、碑左横面には曹洞宗大徳山定山寺創立誌が刻まれている。

昭和62年(1987)、定山没後110年にあたり、定山溪温泉繁栄の礎を築いた偉業を讃えて定山溪ホテル前に「美泉定山銅像」が建てられる。また平成17年(2005)には、定山生誕100年を記念して「定山源泉公園」が造成されて「美泉定山坐像」が建立される。

*

温泉の泉質・効能など 定山溪温泉は、豊平川の河流に沿って数十箇所の湧出口から自噴している。この温泉は、定山溪の背後に大きく広がる無意根山系の地下水が数十年の年月をかけて

地下 2,000mほどにあるマグマの熱により加熱されて、この地域の断層にそって噴出したものと考えられる。湯は無色透明(ナトリウム塩化物泉)70～90度で、一般的には「弱塩泉」と呼ばれる。神経痛、リウマチ、創傷に効能ありといわれる。

参考資料	<input type="checkbox"/> 「定山溪温泉」さっぽろ文庫 59	<input type="checkbox"/> 「定山溪温泉のあゆみ」(定山溪観光協会)
	定山溪郷土博物館資料	<input type="checkbox"/> 「ほっかいどう百年物語」(STV ラジオ編・中西出版)
	<input type="checkbox"/> 「南区開拓夜話」(札幌市南区 30 周年記念誌)	<input type="checkbox"/> インターネット資料 など

清廉無私の官僚～開拓使大判官松本十郎の生涯と業績

-アイヌからも慕われた「厚司判官」・引締め政策により開拓使財政再建に成功-

■まえがき

北海道が、明治政府の「開拓使」<開拓政策を推進する地方行政機関として東京芝増上寺境内におかれた>の設置(1869年<明治2年>7月)後、初代判官島義勇(1822-1874)、第2代判官岩村通俊(1840-1915)の先見の明、続く黒田清隆(1840-1900)開拓使次官(のち長官)の指導力と、黒田の招きによる多くの米国の先進技術・教育の専門家たち、開拓使顧問のホーレス・ケブロン(1804-1885)、鉱山・地質測量のベンジャミン・S・ライマン(1835-1920)、農業牧畜のエドウィン・ダン(1858-1931)、高等教育のウィリアム・S・クラーク(1826-1886)、ウィリアム・ホイラー(1851-1932)、デヴィッド・P・ペンハロー(1854-1910)・・・などのすぐれた指導力により、各分野の開拓事業が進められてきたことは、周知のことです。

黒田清隆を中心とする「薩摩閥」の開拓使人事は有名なことです。事実、彼は、北海道の開拓・近代化のために、幅広く有為の人材を採用しています。その推進力となった開拓使(明治2年7月～明治15年)時代の指導者の多くは、薩摩藩の出身でした・・・黒田清隆、村橋久成、永山武四郎、時任為基、調所廣丈、湯地定基、岡田安賢、河島醇、山之内一次・・・。

しかし、黒田はまた、1868年(慶応4年)1月3日～6日鳥羽伏見の戦いにはじまる「戊辰戦争」～1869年(明治2年)5月18日の「函館戦争」終結にいたるまで、敵対していた人物も多く採用しています。後に、黒田の「知恵袋」といわれた榎本武揚をはじめ、松平太郎・荒井郁之助・永井尚志・大鳥圭介など、そして、庄内藩の松本十郎(1839-1916)もその一人でした。

今回は、北海道の開拓使事業の逼迫した財政再建に大きく貢献した人物、松本十郎(1839-1916)の生涯と業績をたどってみたいと思います。彼は、庄内藩士の子として生まれ、藩校致道館に学び、頭角をあらわして、江戸の昌平黌にも通っています。1863年(文久3年)江戸幕府の命を受けて、父戸田文之助とともに、蝦夷地警備のため、天塩の苫前・石狩の浜益に渡っています。この地で地元のアイヌの生活を見聞します。庄内藩は、戊辰戦争で敗北するも恩赦をうけ、1869年(明治2年)、彼は黒田清隆に認められて開拓判官に推薦されて根室国に赴任します。ここではアイヌからも「厚司判官」と慕われています。1873年(明治6年)黒田の命を受けて、大判官として札幌の本庁舎で、巨額の赤字を抱えていた開拓使の行政改革と緊縮財政をすすめたのでした。ところが、1875年(明治8年)7月、黒田の樺太アイヌの北海道への強制移住計画に憤慨して、辞表を提出し故郷鶴岡に帰郷します。その後は、再び仕官することなく、一介の農民として生涯を送ったのでした。

■松本十郎の生い立ち

松本十郎は、1839年(天保10年)8月18日、庄内藩鶴ヶ岡城下新屋敷(現山形県鶴岡市若葉町)に、近習頭取戸田文之助、母満の二男二女の長男として生まれ、幼名は重松、長じて惣十郎直温と名乗っています。幼児期は体が弱く、12歳の頃から田宮流居合を修練し、武技は彼のもつ

とも得意とするところで、剣をもって身をたてようとするほどでした。15歳のころから藩校「致道館」に学び、他の子弟に比べてかなりの晩学でしたが、すぐに抜群の成績で頭角をあらわしたといわれます。藩命により、江戸へ上って市中警護の仕事に携わりながら、暇を見ては幕府の昌平黌に通い識見を深めています。1859年(安政6年)、19歳の時、縁あって黒谷市兵衛時敏の長女直(17歳)と結婚しています。

ロシアの南下が激しくなり、幕府は1854年(安政元年)蝦夷地を松前藩より引き上げ、箱館奉行を置いて、沿岸警備を厳重にします。はじめ仙台など5藩が分担しますが、後に庄内藩も加えられます。1863年(文久3年)5月、松本は、幕府の命を受けた父戸田文之助に従って、蝦夷地の警備と開拓のため、百数十名の藩士・農夫・職人らとともに赴任し、1865年(慶応元年)6月まで、天塩の苫前・翌年石狩の浜益の経営に当たっています。この地で地元のアイヌの生活を見聞することになります。

戊辰戦争(1868年1月～1869年5月)では、松本は、庄内藩2番大隊幕僚として活躍。奥羽軍に与して戦うも敗北。降伏後、松本は黒田清隆らの新政府要人と会い、藩の戦後について運動し恩赦を受けますが、藩命で、京都に上ることになったとき、朝敵藩士の身分を隠すため、「戸田惣十郎」から「松本十郎」と名を変えています。この時から、松本十郎になります。

■開拓使出仕―「アツシ判官」

1869年(明治2年)7月、「開拓使」設置により開拓使長官に東久世通禧長官(公卿)をいただき、肥前の島義勇、土佐の岩村通俊、越後の竹田信順、蝦夷通として知られた松浦武四郎などが判官として名を連ねていますが、官軍の黒田清隆は、ただ一人賊軍の庄内藩から、松本十郎の才能を認めて判官に推薦したのです。また、8月15日、開拓使は、松浦武四郎の原案をもとに蝦夷地を「北海道」と改称して11カ国86群を置き、北蝦夷地の書字を「樺太」に統一します。

こうして新政府の「官員」となった松本は、ザンギリ頭となり、属僚130名を連れて「北海道」根室国に赴任します(この時30歳)。同年9月21日、イギリス船テールズ号が、開拓三神を奉じた東久世長官、島義勇主席判官以下の官員、米や資材、さらに移民約200名を乗せて品川沖を出港します。25日函館に入港して、30日函館の「開拓使出張所」を開設します。(この日以降、「箱館」が「函館」に改められます)函館には長官と岩村通俊がとどまり、島義勇判官は札幌建設のため陸路出発することとなります。

テールズ号は、29日に函館を出港して東進、10月2日根室港に着き、松本と医師その他の官員、移民、米や資材を下ろし、さらに竹田信順判官、移民をのせてオホーツク海を北上して宗谷に向かっています。

松本が着任した当時の根室はほとんど手つかずの未開の地でしたが、10月9日「開拓使根室出張所」を開設。まず漁場を独占していた請負人制度を廃し「漁場持」と変更、誰でも自由に活動できるようにします<全面的に請負人制度を廃したのは明治9年9月>。さらに税制を改め、出納を厳正にし、学校、病院、牢獄を建てるなどして、行政の実績をあげています。翌明治3年、根室は東京府に移管ということになり、松本は憤慨して辞表を提出しますが、黒田の尽力により移管中止となり松本は根室に戻ります。松本の「沈勇にして伶俐」な仕事ぶり・人格は、1870年(明治3年)根室一帯の海岸線測量に協力していたイギリス軍艦の海軍士官によって広く海外にまで伝えられたそうです。

松本は当時、アイヌの「アツシ」と呼ばれる羽織を着用して、地元のアイヌの人々とも分け隔てなく接し、また無私な性格で、自己の蓄財を考慮することなく、私財を惜しみなく地元の発展に寄付したといわれます。自費で各地に出張して民情を探って施策に反映させています。ここでは、アイヌからも慕われて「アツシ判官」と呼ばれています。1872年(明治5年)には釧路・北見・千島が担当地域に加えられたので、松本は、これらの地域も視察して回り、住民の生活安定に努めたのでした。

■北海道庁勤務時代―「大判官」

このような実績が認められて、1873年(明治6年)2月黒田開拓次官の命を受けて、7月大判官として札幌本庁舎在勤となります(この時33歳)。北海道開拓の全権を任された彼は、まず赤字体質となっていた事業全体を見直し、開拓使の官員を整理して綱紀を引き締め、帳簿を点検して徹底的に冗費を省き、前任者岩村通俊時代の役人700人を300人までに削減したといわれます。この大胆な行政改革と緊縮財政をすすめた結果、わずか2年で、巨額の累積赤字の解消に成功します。

しかしこれは役所のことであって、札幌は一時期不況に陥り、離道する者が続出しました。岩村の好況時には960人であった人口が、わずか396人にまで減少しています。財政難に加えて、1874年(明治6年)2月には樽前山が噴火するという天災も重なり、松本の評判は今ひとつでした。

松本の健全財政政策は徐々に成果をあげ、その声望も次第に高まっていきます。ケブロンへの助言もあり、逃亡した者も戻れば、一時の留守扱いとして認め、家作料の80パーセントを割り引きし、残りは月割りにして長期返済とするなどの対策を講じた結果、1874年(明治7年)末の人口は2,162人に増加します。彼は、民心をつかむため、役所の周囲の土塁、豊平川の堤防、白石移民小屋建設などの公共事業を発注したり、また農林漁業の保護政策の改善、農産物の流通対策、稲作の奨励など、殖産興業の基盤整備に努力しています。

松本は、毎日朝六時に登庁して、てきばきと書類を点検し決裁を終えると、若い者の仕事の達成に手を貸し、ことに法律書にはよく目を通すようにすすめ、自分も法規をよく読んで勉強したといわれます。だれにでも「さん」をつけて呼び、決して呼び捨てにすることがなかったといいます。官吏が呼び捨てにして給仕の少年を使っているのをたしなめたこともあったようです。異名通り「アツシ」を羽織って、毎日管内を巡回したといわれます。大判官という立場にありながら、誰にでも道を譲り、また、役人の出張といえば、役得と喜ばれたのに、出張旅費を節約して受け取らなかったといわれます。苫小牧出張は5日の正当旅費を請求できる時代に、松本は握り飯を腰につけて朝早く馬で出発し、夕刻には帰札するという率先垂範ぶりであったそうです。

こうした中で、岩村判官によって起工式(明5,7)を挙げた白亜の開拓使札幌本庁舎の建築が1873年(明治6年)10月29日に完成しています。(総工費32,000余円。翌年1月開庁式。)

松本は、自宅では小使一人・書生一人をおくだけの清廉潔白・簡素なせいかつでした。寸暇を惜しんで官邸(現在の札幌テレビ塔に近い南大通)のまわりを耕作し、開拓使顧問のケブロンもその作物の出来栄えに感心したといわれます。また草花を愛して、庭に松葉牡丹やアメリカ産の花々などを植えて、咲き乱れる多くの美しい花を女性や子供たちに分け与え、人々に「御

花屋敷」・「松本判官のお花畑」と呼ばれたそうです。＜大通の花壇の原点はここにあるとも言われています。＞

1975年(明治8年)、大判官松本の進言を受けて、黒田開拓使長官は、札幌の南1条から北側西8丁目以西の地域を開拓して養蚕業を奨励することを決めます。松本は、以前広大な桑畑の開墾に成功していた山形の庄内藩士に桑畑の造成を要請します。156名の庄内藩士が来道し、6月4日から9月15日までの間、約21万坪の土地を開墾し、桑苗4万株を植えています。その後、藩士は山形へ帰り、新たに養蚕を志す人たちが移り住みます。(後に、この地域は「桑園」と呼ばれます。)

1875年(明治8年)、千島樺太交換条約により、樺太はロシア領となります。明治政府は10月21日、樺太アイヌ854名をひとまず宗谷に移住させますが、黒田は、札幌近郊の対雁(ついしかり)に移住させて開拓農業に従事させようとしています。狩猟漁労を生業とするアイヌの人たちはこの計画に同意できないと訴えます。現地担当者の説得とアイヌの陳情が翌年(明9)に入っても続きます。このような宗谷の樺太アイヌ代表達の嘆願を受けて、松本は明治8年から9年にかけて、樺太アイヌと黒田長官との間に入って何とか事態を收拾しようと努めます。樺太アイヌの代表が札幌本庁を訪れたり、松本が宗谷に行つてアイヌの説得を試みたりします。アイヌの人たちをぜひこのまま宗谷においてほしいと黒田に強く訴えます。黒田と松本の亀裂は、榎本武揚などの土地漁りや各地の土地払い下げは役人の汚職まがいの許しがたい行為だとする考えとあわせて、樺太アイヌの石狩強制移住問題により、決定的なものとなっていきます。

■石狩十勝両河紀行―最後の北海道内陸踏破行

そして、松本は1875年(明治8年)6月8日～7月12日の間、「石狩十勝両河紀行」という、石狩川・十勝川流域踏破の旅にでます。行政視察の名目ですが、通訳の亀石熊五郎とアイヌ人夫以外は、役人の随行は誰もいなくて、大判官の出張としては異例のことでした。まず馬で郊外の雁木村に至り、食料・薬品・毛布・天幕・酒などを積み込んで、舟で豊平川を下ります。翌日、アイヌの漕ぐ舟で石狩川を北上、美唄で松浦武四郎の案内人もつとめたアイヌの長老セッカウシが同行道案内を申し出ています。石狩川は鮭が群をなして遡上していたといいます。各地で多くの人たちに会い、和人とアイヌの給料の差別の実態を知り心を痛めています。

6月17日上川近文泊り、19日陸行開始。笹藪を掻き分け、藪蚊の襲撃に悩ませられながら、苦勞の末山越えて、ライマンと同じコースをたどり、石狩川の水源地シノマン岳に達します。そこから音更川に沿って下り、やっと十勝川に達し、芽室、帯広に入ります。十勝は鹿の天国で、至るところに鹿の小道があり、時に風のように木の葉をそよがせて走り去る鹿の大群も見られたといいます。

ここで道案内のアイヌ人、セッカウシ、ウトウンベ、アヤンたちと別れて、暦舟川沿いに太平洋岸の大津へ向かいます。ここからは多くの和人に迎えられて「大判官」の接待をうけたようです。広尾から様似、浦河、三石、静内を経て、千歳から川舟を雇って石狩へ下ります。7月12日早朝、石狩河口から馬で篠路村に立ち寄り、年来の農友、篠路の開祖早山清太郎(1817-1907)に会っています。松本としては別れの挨拶のつもりであったようです。午前10時帰札、出迎いの堀中判官、調所少判官に帰着を告げ、登庁はせず官邸に戻ります。帰札後も黒田からは何の返答もなく、アイヌの強制移住はすでに6月23日に実行されていました。松本は自分の無

力を嘆き憤慨し、辞任を決意して辞表を提出。黒田の慰留も聞き入れず、7月13日早朝、馬夫とともに官邸を出発して、島松沢の心を許した農友、寒地稲作の祖とされる中山久蔵(1828—1919)宅に立ち寄ります。中山は突然の別れに驚き、馬上で語り合いながら苫小牧まで同行してくれたのでした。こうして、心許した早山や中山らに分かれを告げて、室蘭、噴火湾を回って森から函館に向かいます。この時、黒田が「玄武丸」で函館に来ていること知り、会わないように手筈を整えて、16日、「庚午丸」に乗り込み出発します。こうして津軽海峡を越えて船川港に上陸し、秋田を経て、17日、松本は故郷鶴岡への道を急いだのでした、(この時38歳)。

彼の清廉無私の為政は高い評価を受けた反面、薩摩閥で固められていた開拓使において、財政建て直しの仕事を終えた段階においては、もはや松本の存在は許されない状況にあったという歴史の見方もあるようです。(1876年9月<松本大判官の後任は、薩摩藩土堀基>)

■晩年— 一介の農夫として

職を投げ打って庄内(現鶴岡市)へ帰った松本は、再び官途につくことはありませんでした。自ら農夫と称し、先祖伝来の武家屋敷の菜園を一人耕しながら悠々自適の毎日を過ごし、酒に親しみ、時には郊外に出て友と語ることもあったようです。1876年(明治9年)11月、私財を投じて戊辰戦争戦死者の招魂碑を、鶴ヶ岡大督寺(現常念寺)境内に建立して、盛大な供養を行っています。また、漢文に長じた松本は顕彰碑など建碑の撰文を依頼されて書いており、60基を越えるといわれます。松本は、政治向きのことは口にせず、もっぱら漢学同好の士と語るのを楽しみにしています。松本は、雨の日は多く中国の古典に読み耽る読書家でした。

松本は、家族の者にも無口な老人になっていったといわれますが、大変な筆力で、北海道のことを記した「根室も志保草」や自分の生涯の回顧録「空語集」140巻、「農業聞書」5巻など多数の著書・文献を書き残しています。官にあった時も、辞して農民であった時も、たまに酒をたしなむ以外は、質素な生活に甘んじています。開拓使大判官時代でさえも、家に書生一人を置いただけであったといわれます。蓑笠翁・松農夫・一樽居士・蝦夷骨董・腕力農夫などを号としています。76歳の時の書に「死生は天にあり、誹誉は人に任せ、ただ農を楽しむのみ」と書いています。また、松本の家族は、二男三女があり、長男小太郎は30歳で病死。次男小次郎(陸軍士官学校卒)、1900年(明治33年)11月、札幌月寒の第25連隊旗手として奉職しています。

松本の鶴岡での40余年にわたる長い晴耕雨読の生活も終りを迎えます。松本が生涯を閉じたのは、1916年(大正5年)でした。同じ年の4月26日妻逝去(73歳)、そして11月27日十郎逝去。尿毒症による病死、77歳でした。現在、鶴ヶ岡安国寺に眠っています

■あとがき

1908年(明治41年)庄内農学校長若林功(札幌農学校出身)が、書籍に困まれた書齋に松本を訪ね、て、学生のために講演を依頼するも、一笑に付されています。その2年後に北海道史の研究者河野常吉が訪ねて、秘話・秘録を得て「松本十郎翁談話」を出版しています。

松本十郎を記念するものとしては、1996年(平成8年)4月、「松本十郎を顕彰する会」が発足して、2001年(平成13年)5月に「松本十郎翁頌徳碑」(鶴岡市立図書館前庭)を建立しています。松本が活躍した根室には、今もその名をとった「松本町」があります。

中山久蔵翁との交友を示すものとして、旧島松駅通所(旧中山久蔵宅)には、1907年(明治40年)1月、松本が中山久蔵翁80歳を祝して書き送った長文の手紙が陳列されており、1915年(大

正4年に贈った書「大黒の槌にもまさる鋏の先」の掛け軸があります。また、松本の生前(大正2年?)、当時札幌農学校の学生であった松本友(十郎の孫)が、松本の手紙を携えて中山久蔵宅を訪問して歓迎されています。

< 松本十郎の活躍と業績について、多岐にわたる部分は、紙数の関係で割愛しました。 >

<主な参考文献及び参考資料>

- 「北海道の歴史」榎本守恵著 北海道新聞社
- 「星霜」2 北海道史 明治2(1875~1885) 北海道新聞社編
- 「北海道の歴史」田端宏・桑原真人・船津功・関口明共著 山川出版社
- 「異形の人—厚司判官松本十郎伝」井黒弥太郎著 北海道新聞社
- 「さらば・蝦夷地—松本十郎伝」北国諒星著 北海道出版企画センター
- 「北海道開拓功労者関係資料集録」(北海道)
- 「開拓使時代」さっぽろ文庫 札幌市教育委員会編
- 「開拓の群像」中 北海道
- 「根室・千島歴史人名事典」根室・千島歴史人名事典編集委員会 編
- インターネット資料など

札幌市の水道とウィリアム・ホィーラーの業績

—あの札幌農学校のホィーラー考案の浄水装置が、現在も標準方式として採用されています—

2009年(平成21年)9月5日、「北海道を知る歴史発見の旅シリーズ・伏見地区歴史散策と藻岩山登山コース」を実施しました。伏見地区の観音寺・伏見稻荷神社に次いで、札幌市水道記念館・札幌市水道局藻岩浄水場を見学しましたが、その時に「ホィーラー式重力開放型濾過池」「ホィーラー式下部集水装置」なるものが、現在も標準方式として使用されていることを知り、驚きました。早速、ウィリアム・ホィーラーの出身地である米国マサチューセッツ州コンコードのDr. トーマス・カーチンにこのことを知らせました。そして、2010年(平成22年)7月6日、カーチン先生一行と藻岩浄水場を再び訪れて、「ホィーラー式」に再会し、感動をあらたにしたのでした。しかし……

しかし、札幌に水道が創設されたのは、1937年(昭和12年)。そして、ウィリアム・ホィーラー(1851-1932)が、クラーク博士・ペンハローとともに来札したのは、1876年(明治9年)です。この年札幌農学校開校(8月14日)。初代教頭クラーク博士に続いて、ホィーラーは第2代教頭となり約3年半滞在中、1879年(明治12年)12月に帰国していますので、時代的には、札幌の水道設置とホィーラー在札期間の接点はまったく考えられません。

ホィーラーは、札幌農学校のすぐれた運営、教育指導はもちろんのこと、気象観測所設置や鉄道敷設の実地調査、コロニアル洋式の「演武場」(今日の時計台)の設計、また牛馬や牧草・農機具を収容できる三層づくりの巨大な「モデルバーン」(模範畜舎)の設計・施工など多くの業績を残しています。しかし、この時期は、札幌は豊富な地下水に恵まれていたので、「水道」のことはまだ問題として浮上していませんでした。

そこで、このナゾを調べてみることにしました…ホィーラーは、1879年(明治12年)12月帰国後は、土木工学の権威としてボストンに建設事務所を開設、アメリカ東部諸州の、非常に多くの上水道・下水道工事を手がけていたのです。…実は、ここにアメリカ方式(「ホィーラー式」)の原点があると考えられます。以下に、歴史的な経緯をたどって見ましょう。

北海道の近代的な「水道」は、1889年(明治22年)の函館に次いで、1892年(明治25年)の月形政治犯や凶悪犯を収容していた「樺戸集治監(明治14年設置)」がふくれあがる収容者の飲み水確保のために完成させた上水道が最初とされます。

札幌では、1909年(明治42年)になって、地下水の得がたい月寒高台にあった歩兵第25連隊(第7師団)の月寒軍用水道が完成しています。その後、昭和初期に、札幌の琴似十二軒地区と円山地区で、地下水を汲み上げて住宅地に給水するという水道が建設されています。

1931年(昭和6年)当時、道内各都市では、全国最初の横浜(1889・明20)に次ぐ2番目の函館(1889・明22)のほか、根室、岩見沢、小樽、室蘭、稚内、釧路にはすでに水道があり、大都市としては、札幌市と旭川市だけがない状況でした。札幌では、特に水道の緊急な必要がないほど容易に豊富な地下水が得られたこともあり、井戸の利用、特にポンプ井戸が急速に普及していました。

札幌市の水道事業の歴史は幾多の紆余曲折を経ていきます。1910年(明治43年)から、調査

費などの予算計上・議会提案などが繰り返されますが、豊かな地下水に恵まれた札幌では、定山溪温泉の下水や尿の混入した水は危険であるなどの反対意見もあり、また水力発電事業関係との豊平川の水利権問題があり、このような事情が、札幌の水道事業を大きく遅らせたのでした。

札幌の上水道は、やっと1934年(昭和9年)6月24日起工式を行い着工、1937年(昭和12年)4月1日に初めて通水を開始し、同年6月30日内外の諸工事終了、7月28日「藻岩浄水場」で盛大な落成式を行っています。(これにより、7月28日が「水道記念日」とされます。)

藻岩浄水場は、当時としては、最も新しい水道技術が採用され、機械化・自動化を駆使した最新鋭の設備であったといわれます。浄水方式としてアメリカの「急速砂濾過法」(ホイラー式)を採用したことが、当時としては画期的なことといわれました。藻岩第2浄水場第1期拡張工事(1958年・昭和33年)、第2期拡張工事(1967年・昭和42年)で、あわせて大型12基の沈澱池・濾過池を設置した時にも、この「ホイラー式」が標準装置として採用されています。今日では、札幌市の浄水場は、豊平川を水源とする藻岩浄水場・白川浄水場・定山溪浄水場、琴似発寒川を水源とする西野浄水場、星置川を水源とする宮町浄水場の5ヶ所があります。

わが国最初の、1889年(明治20年)竣工の横浜水道が、イギリス式の「緩速砂濾過法」を採用して以来、この浄水方式を採用するのが普通でした。しかし一方、アメリカで広く採用されている「急速砂濾過法」(ホイラー式)があり、これは装置が複雑で、多くの機械類・薬品を必要とする上管理も難しいが、水質的な適応範囲が広く、格段に大量の浄水を得ることが出来、水の大量消費に適しているといわれていました。

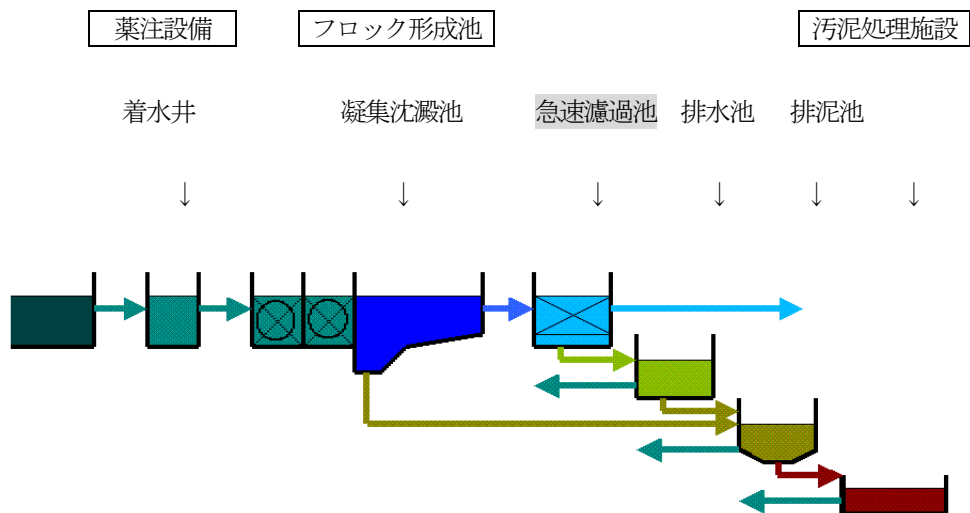
札幌市は、計画の段階から、技術上の問題、浄水場敷地などの諸問題を検討の末、この「急速砂濾過法」採用に踏み切ったのです。これが、アメリカの「ホイラー式」だったのでした。こうして意外な形で、「ウィリアム・ホイラー」が、再び札幌にやって来たといつてよいようです。

現在では、全国的にこの「ホイラー式」の浄水装置の採用が多く、東京、京都、神戸、大阪、仙台などでも採用されているようです。

参考資料 ①

急速濾過法[Rapid Filtration]

急速濾過法は、浄水処理の中核をなす重要な処理法ですが、そのメリットは意外によく知られていないような気がします。大規模な浄水場においてもっとも普及している浄水方法。



□**施設構成** 急速濾過システムは、原水濁度への守備範囲が広いこと、面積あたりの処理能力が高いこと、自動化が緩速濾過よりも容易なこと、などの特徴から、大規模な浄水場を中心に広く普及しています。ただ、溶解性物質などへの対応力は緩速濾過よりも低く、その後の原水の悪化によって高度処理と呼ばれるさまざまな追加処理を導入するケースが広がっています。

□**理論** 除去原理は、ストレーニング（篩い）、沈殿作用、吸着作用、フロックの成長などといわれています。急速濾過法では、原水に凝集剤と、必要に応じて助剤を投入し、これをなるべく急速に攪拌（混ぜ合わせる）して均等に行き渡らせます。凝集剤は、水の中の懸濁質（微細な固体状の不純物）を絡め取るようにして集め、フロックと呼ばれるふわふわの塊を形成させます。フロックは成長すると沈みやすくなりますので、これを**沈殿池**に導いて流速を落として沈めます。そして、最後の仕上げに**砂濾過池**で濾過して残ったフロックを取り除く方法です。濾過池で蓄積した懸濁質は、砂層を閉塞させて水の流れを阻害し、水のもつ位置エネルギーである水頭を消費しますので、あるていどの頻度で逆洗浄という逆向けの流れを起こして濾過層にたまった懸濁質を除き、汚泥として分離します。

参考資料 ② 緩速濾過法と急速濾過法

緩速濾過法[Slow Filtration] 1829年に英国のJames Simpsonが開発した砂濾過法で、その後ヨーロッパで普及し、やがて世界的に採用されるようになりました。日本では、戦前までヨー

ロツパの技術の影響を受け、上水道のほとんどが緩速濾過法を採用しました。この方法の特徴は、原水（処理される元の水）が細かい径の砂層（濾層）を一日3～6メートルとごく遅い速度で濾過されることです。このようにして濾過すると、砂層の表面に微生物の粘質膜ができ、この微生物膜の働きで濁りや細菌、藻類、油やアンモニア生窒素、有機物や異臭味、鉄やマンガンまでもが効果的に除去され、美味しくて安全性の高い水をつくることが出来ます。除去される細菌にはもちろん病原菌も含まれます。また、ある程度の水質変化に対して緩衝性があります。微生物の膜は表面から20～30 cm下層の砂にまで及びます。このように緩速濾過法では美味しくて安全な水を作ることが出来ますが、戦後、この緩速濾過法中心の水道が急速濾過法中心の処理法に大きく変換しました。これは次項に述べる急速濾過法を主とするアメリカの技術に影響されたこと、1950年代半ばから我が国の産業、経済が急速に発展成長したこと、これに応じて水道水の需要が急増したこと、また、水道普及率がめざましく伸びたことなどによります。急増する水道水の需要を賄うために、多くの浄水場が新設或いは拡張されましたが、特に規模の大きい浄水場では浄水システムに急速濾過法が採用されました。これは、規模の大きい浄水場の新設、拡張には用地難を伴うことが多く、また維持管理作業の面でも困難を伴うことから、狭い敷地で大量の水を処理できる急速濾過法が採用されることになったわけです。また処理する原水がある程度以上良質の水でなければならぬ緩速濾過の場合、水道水源環境の汚染による原水水質の劣化も緩速濾過池の使用比率の減少につながりました。

緩速濾過池は、急速濾過池に比べてその濾過速度からも明らかなように20～30倍の面積が必要となりますが、薬品処理などの付属設備は不必要になります。

この両者の得失は浄水場の規模によって変わり、一般に規模が大きくなるほど急速濾過法が有利になり、規模が小さくなるにしたがって緩速濾過法が有利になることが多いようです。大規模な浄水場では、緩速濾過法は付属設備が不必要なことを考慮に入れても、急速濾過法の数倍以上の敷地面積を要するとされています。

最近の上水道事業における急速濾過池利用率の全国平均は約92%位ですが、給水人口2万人以下の小規模上水道になると緩速濾過池の使用率が増加して10%を越えるようになり、1万人以下の給水人口では20%を超えるようになりました。また、緩速濾過の計画浄水量は、それまで僅かずつ減少していたものが、平成5年度からは横ばいとなっています。（水道統計の経年分析より、水道協会雑誌第791号）美味しくて安全な水を作ることの出来る緩速濾過法は、敷地の問題や水源水質の条件に問題がなければ、あるいは克服できる可能性がある場合には、今後、積極的に見直されるべきでしょう。

急速濾過法[Rapid Filtration] 緩速濾過に対する砂濾過の方法で、1872年にアメリカで出現したとされています。日本では、第二次大戦後にアメリカの影響を受けて、上水道工業用水道ともにこの濾過法が急速に普及しました。急速濾過は、緩速濾過の濾過速度に比較し濾過速度が非常に速いことが特徴で、上水道で採用されている濾過速度は、約5m/h（メートル/時間）です。しかし、最近では工業用水を中心に濾過速度を早くする試みが多くなりました。10～15m/hなどは普通速度となりつつあり、それ以上の速度の濾過法も出現しています。

この濾過法の特長は、濾過速度が速いため設備面積が少なく済み、大量の濾過水をつくることが出来ることです。しかし、砂層に生物膜が出来ず、物理的な濾過が主体で水質の変動に対する緩衝性が少ないため、薬品処理で安全性を確保せねばなりません。このため上水道における急速濾過では塩素処理による消毒が必須条件になります。また、水の美味しさの点でも緩速濾過法におよびません。急速濾過法は砂などの濾材(最も一般的な濾材は砂ですが、そのほか無煙炭粒=アンストラサイト粒やガーネット粒などが用いられることもあります)による物理的な濾過が基本であり、除去作用は緩速濾過のように砂層の生物膜によるものではありません。したがって、急速濾過法では清澄な水を得るために細かい径の濾材を用いると濾過抵抗が増加しますし、また、採水量を大にするために粗い径の濾材を使用すれば、濁質や微生物の漏洩が多くなります。このようなことから、結果的に適度な粒径の濾材を使用することになります。このため、急速濾過法ではある程度の細かい濁質や細菌など微生物の漏洩は避けられませんが、また、増水時の急な濁質の増加に対してはすぐに閉塞してしまうなど、原水水質の変化に対する緩衝性もあまりありません。

以上のようなことから、急速濾過方式ではこのような濁質などを効果的に除去するために前段に薬品沈澱池を置いているのが普通です。

薬品沈澱池では、原水に凝集剤を加えて濁質や微生物をフロック化したものを沈降分離して除去します。さらに上澄水中に残留したフロックは急速濾過装置(池)で濾過されます。しかし、細菌などは漏洩しますから、急速濾過法では塩素処理による消毒が必須条件になってくるわけです。これらのプロセスが組み合わされて急速濾過システムが構成されることになります。

(注). フロック : 水中に懸濁するコロイドなどの微粒子が結合して集合体となり、さらに大きくなって沈降しやすくなったり、濾過しやすくなった凝集体。

寒地稲作の祖～夢を追い続けた中山久蔵の生涯と業績 —耐寒品種「赤毛」栽培の成功から…今日の「きらら」「ゆめぴりか」誕生への道—

■まえがき

「豊葦原の瑞穂の国」（古事記）といわれる美しい稲穂が実る日本の「稲作」の歴史は古く、縄文時代の終りから弥生時代の初めにかけて、紀元前5世紀ごろ中国から伝来したといわれます。次第に本州北端まで到達し、そして日本の社会全体が稲作とともに歩み、「米」を主食とする食文化や風俗を培ってきました。米は、日本では主食として食べられる他に、酒や餅、味噌、醤油などの原料としても用いられてきました。

近世の日本では、太閤検地以後江戸時代を通じて、各藩の米の生産量（他の農産物・海産物も米の生産量に換算）で表す「石高制」を用いています。加賀百万石（120万石）とか薩摩七十二万石（90万石）・伊達六十二万石など……また、大名をはじめとする武士の収入（禄高）を表す場合も石高を用い、これは、明治時代の地租改正まで続いています。しかし、蝦夷地は江戸時代には米の収穫はなく、松前藩は唯一「無高」の藩といわれました。そのため一万石以上を大名とする制度の例外として、特別に一万石格を与えられて諸侯に列しています。

この寒冷の蝦夷地の稲作は、道南各地で試作されていますが、渡島大野地方（現北斗市大野町）で、寛文年間（1661～1672）次いで貞享2年（1685）試作され・さらに元禄5年（1692）、野田作右衛門という人が、四百五十坪を開墾して稲作を試み米十俵を収穫したといわれます。これが北海道の稲作の起源として、大野町に残る「北海道水田発祥の地碑」に刻されています。<5頁 [資料参照]>

しかし、まだ定着はしなかったようです。寛政11年（1799）以降、幕府の蝦夷地直轄時代に、幕府の積極的な施策により、道南地方で次第に稲作が定着していったようです。

明治政府の開拓使設置（1869年<明治2年>7月）以後、札幌を中心として北海道の近代化が推進されていきます。初代判官島義勇（1822—1874）、第2代判官岩村通俊（1840—1915）の先見の明、続く黒田清隆（1840—1900）開拓使次官（のち長官）の指導力と、黒田の招きによる多くの米国の先進技術・教育の専門家たち、開拓使顧問のホーレス・ケプロン（1804—1885）、鉱山・地質測量のベンジャミン・S・ライマン（1835—1920）、農業牧畜のエドウィン・ダン（1858—1931）、高等教育のウィリアム・S・クラーク（1826—1886）、ウィリアム・ホーラー（1851—1932）、デヴィッド・P・ペンハロー（1854—1910）……などのすぐれた指導力により、各分野の開拓事業が進められたのでした。札幌農学校も、クラーク博士一行を迎えて1876年（明治9年）8月14日に開校します。

この時代に、開拓使顧問ホーレス・ケプロンが指示したのは、寒冷地に稲作は不向きであり、アメリカ式の牧畜と畑作中心の混合農業の推進でした。

当初、開拓使はこの意見に従い、畑作・酪農中心の欧化政策を推進しますが、農家の米作りへの執着心は強く、各地で多くの寒地稲作の試作の努力がなされていきました。石狩地方では、古くは琴似の早山清太郎、篠路の森山兼光などの水稲試作があります。そのなかで苦労を重ね

て、北海道での本格的な米作りの成功とその普及に大きく貢献した先駆者、「寒地稲作の祖」と称される中山久蔵(1828-1919)の功績はきわめて大きいものです。今回、ここにその生涯と業績をたどってみたいと思います。

■中山(松村)久蔵の生い立ち

中山(松村)久蔵(1828-1919)は、1828年(文政11年)3月21日、河内国石川郡春日村(現、大阪府南河内郡太子町春日)の農業を営む旧家松村三右衛門の次男として生まれています。幼少時より青雲の志強く、1845年(弘化2年)4月、17歳の時、父兄の許諾なしに故郷を飛び出して江戸に行ったようです。その後大阪と江戸の間を諸国放浪、1853年(嘉永6年)、25歳の時、仙台藩士片倉英馬の知遇を得て仕官します。

この時期、蝦夷地のロシアに対する防備は松前藩だけではなく、東北諸藩が分担させられています。仙台藩は、白老から襟裳岬を経て十勝・厚岸・根室、さらに国後・択捉までを割り当てられています。その拠点となったのが白老陣屋(要塞)でした。久蔵も片倉に従って1856年(安政3年)の陣屋設置以後明治維新までの12年間、この白老陣屋と仙台間を何度か往復していたようです。白老在勤は1年交替でした。久蔵は、白老では、漁に出たり、開墾・農作物の栽培などもしていたと思われます。

明治維新後、久蔵はしばらく静岡に滞在したようですが、42歳の厄年を機に、主家を辞して北海道移住を決意し、1869年(明治2年)12月、白老に渡りました。人づてに苫小牧に移り、土佐藩出身の平三郎を養子に迎えて開墾に着手します。しかし、苫小牧の火山灰の土壌が農地開墾に向かないと判断して、1871年(明治4年)単身島松に入植します。苫小牧からの途中、数株の山ユリを掘ってきて、島松に植えたのが翌年以降増え続けて数十万株にもなったそうで、久蔵はこの山ユリや雑穀栽培を自分の農業の第一歩として、島松で六千坪を開墾しています。この時期、姓を松村から中山に改めています。これは、黒田長官の助言を受けて、島松の山林の中で、ただ一人開墾に立ち向かう決意をこめて中山姓にしたといわれます。この久蔵の驚異的な働きは評判となり、1872年(明治5年)松本十郎判官が島松に立ち寄り、当時開拓者に与えられていた一人分の扶助を進めますが、自力で開墾したいとして、久蔵はこれを辞退しています。堅忍不拔、自助自立の精神—これが久蔵の強い信念でした。松本十郎判官は、その後もたびたび立ち寄っています。

1873年(明治6年)には、札幌～室蘭間の「札幌本道」が開通しています。この札幌本道開設のために、久蔵は自分の畑地800坪を寄付したようです。

また、久蔵は、後になって、1896年(明治29年)、第7師団独立歩兵第1大隊(後の歩兵二十五連隊)の創設にあたり島松演習場として、百万坪の土地も無償で寄付したといわれます。

■耐寒品種「赤毛」の栽培

久蔵は粗末な小屋に住み、寒さと飢えと孤独に耐えながら、寒地稲作に取り組む決意をます。入植3年目の1873年(明治6年)に、久蔵は渡島大野へ出かけて、寒さに強いという「赤毛」と「白髭」種の種籾を持ち帰って一反歩の水田耕作を試みます。しかし、5月に蒔いた籾がなかなか発芽せず、風呂の湯を沸かして昼夜苗代に流し入れて発芽させ、その後も島松川の水を「暖水路」を通して温めて水田に引くという粘り強い苦勞の末、この秋始めて「赤毛」種で一反の水田から二石三斗の収穫を得たといわれます。これが北海道の米作りの夜明けとなりました。

その後、久蔵が苦勞を重ねて育てた「赤毛」種の種籾は、空知や上川の農家に無償で配布され、ここから全道に米作りが広がったのです。石狩平野の人々は、この品種を「赤毛」とは呼ばず、「中山種」と呼んで、久蔵の功績を称えたそうです。これがきっかけとなって、石狩平野の農家江藤庄三郎の「坊主」の発見、その小作人中田光治の努力により美唄一帯に作られるようになり、さらに上川盆地にまで広がり、「坊主2号」「坊主6号」などの優れた耐寒品種が生み出されていきます。1877年(明治10年)、久蔵はこの寒地稲作の成功を示すために、東京で開かれた第1回内閣勸業博覧会に自ら作った米を出品し、内務卿大久保利通の表彰をうけています。1879年(明治12年)には、開拓使に米一石(150kg)を献上するまでの収穫を上げるようになり、開拓使長官黒田清隆もこれまでの功績を称えて、1882年(明治15年)には、農商務卿西郷従道からも表彰されることとなります。1889年(明治19年)、新しく設置された北海道庁の民間指導員になっています。久蔵は、収穫した種籾を開拓者に無償で配り、農村を訪ね歩いて稲作の指導にもあたったといわれます。

1892年(明治25年)、久蔵は養子の留蔵を広島村大曲に入地させて水田の経営をさせています。また、広島村下仁井別の草分けといわれる谷喜三郎は、久蔵の指導を受けて水稻作りにあたり、この地区の開拓に貢献しています。久蔵の水稻栽培に対する研究心は強く、1873年(明治6年)から1901年(明治34年)までの気候・発育・反収などの克明な記録も残しています。

1903年(明治36年)には、明治天皇から緑綬褒章を受章しています。1910年(明治43年)以降、農業試験場での品種改良が行われ「富国」「石狩白毛」「新雪」などを生み出し稲作安定に寄与したといわれます。その後、一度に多くの籾まきが可能な「たこ足」という籾の直蒔機の使用・油紙を張った「温床苗代」などの技術的な面と品種改良の努力と工夫の末、広大な湿地帯や原野が豊かな水田へと変わっていきます。こうして、今日石狩平野を主産地とする北海道稲作は全国一の収穫量を誇る地域に発展していきます。

■島松駅通

1877年(明治10年)4月16日、札幌農学校教頭ウィリアム・S・クラーク博士(1826-1886)が、在任約8ヶ月で札幌を去るにあたり、多くの学生や職員に送られて、この中山久蔵宅(駅通)で食事の後、「Boys be ambitious-少年よ大志を抱け」の言葉を残して、別れを告げて帰国の途についたというのは、有名な話です。<[資料]クラーク博士記念碑(昭和25年11月建立)の写真参照>

1881年(明治14年)9月、東北・北海道ご巡幸中の明治天皇は、この中山久蔵宅(駅通)を御昼行在所として休憩されお食事をされています。54歳の久蔵が、7年間にわたって品種改良を重ねた「赤毛」の稲穂などをお見せしたのに対して、明治天皇から、労いのお言葉と金300円・御紋付き三つ組み銀杯を賜っています。中山久蔵が、正式に駅通取扱を命ぜられたのは、1884年(明治17年)8月16日からです。1ヵ年百三十円給付されて、1897年(明治30年)に廃止されるまで、駅通所の経営に当たっていたようです。<現在、「旧島松駅通所」は、国指定史跡として一般公開されています。>

■開拓への貢献

その後、久蔵は、地元の有力者となり、道路工事を監督したり、学校を建てるなど、公共事業にも力を尽くしたといわれます。また、久蔵は、早くから葡萄などの果樹栽培も始めており、1878

年(明治11年)からの蓮根(蓮)の栽培、さらに桃の栽培など、どんどん新しいことにチャレンジしています。

<この蓮は、後に北海道庁の池にも植えられたということです。>

1882年(明治15年)開拓使廃止、札幌・函館・根室の三県時代を経て、1886年(明治19年)北海道庁がスタートしますが、当初は庁内に米食禁止令が出され、稲作を試みた農民(屯田兵)が投獄されるということさえあったといわれますが、第4代北海道長官(1892-1896)北垣国道は、1892年(明治25年)、東京農科大学教授酒匂常明を北海道財務長官として迎えて、翌年から「稲作試験場」を上白石・真駒内に開設して、寒地稲作の推進を決めています。この稲作奨励策は、これまで他県に頼ってきた北海道の食料(米)自給率を高めることが急務であったのでした。これまでは、欧米式の畑作畜産を中心とした農業政策が一般的でしたが、中山久蔵の稲作の成功と道内各地への普及の実績への高い評価から各地への稲作奨励が推進されたのです。久蔵も、この後ろ盾を得て、どこへでも出かけて稲作栽培のコツを話して回り、惜しげもなく種籾を送り続けたということです。

後に、久蔵は、道庁の委嘱を受けて、北海道最初の農業普及員として、各地を回り稲作の指導に当たっています。1917年(大正6年)には、農学博士南鷹次郎を発起人として、「中山久蔵翁頌徳碑」が、島松に建てられています。

■晩年

久蔵は、北海道の稲作に成功してから、郷里河内国石川郡春日村(現大阪府南河内郡太子町)の菩提寺「光福寺」に、石段・石畳やお米一石を寄進しています。

北海道開拓期に大きな役割を果たした久蔵は、その後も、農業一筋の生活を貫いて、1919年(大正8年)2月13日、島松の地で亡くなりました。91歳でした。お墓は、北広島市上仁別にあります。郷里大阪の菩提寺「光福寺」の過去帳には「耕種院亀岳鑑翁居士」の戒名が残っています。

現在、奇しくも、島松の国指定史跡、旧島松駅通所の横には、「寒地稲作この地に始まる」の中山久蔵の記念碑と「Boys be ambitious」のクラーク博士の記念碑が並んでいます。

久蔵の家族についてあまり触れていませんが、後年妻トサとの間に一子要助がありました。東京の大学を出てサラリーマンになります。要助の一女ヒサを養女として島松に迎えます。このヒサが婿蒸次郎を迎えて中山家を継ぎます。その後、四代目久次、五代目徹と受け継がれています。そして、現在、北海道を拠点に活動しているアイドル歌手中山怜香さんは、六代目の孫にあたります。

■あとかき

1961年(昭和36年)、北海道産米の収穫量(85万4500ト)は、新潟県を抜いて全国一位となり、1967年(昭和42年)には、大豊作で道産米収穫量100万トを突破したといわれます。しかしその後、政府の減反政策(生産調整)の強化・政府買入価格の銘柄格差導入などにより、最低ランク道産米の低迷が続きます。

1980年(昭和55年)からの、道のプロジェクト「優良米の早期開発試験」に始まる、各地農業試験場のたゆまぬ品種改良の努力により、美味しい「ゆきひかり」(‘84・昭59)、「きらら397」(‘88・昭63)が誕生し、「きらら」は、全国的に脚光を浴び、ブームとなります。その後、「ほし

のゆめ」「ななつぼし」「ふっくりんこ」「おぼろづき」「ゆめぴりか」など、次々と全国ブランドの美味しいお米が誕生しています。

大陸から日本に伝播した稲作は弥生時代中期までには本州最北端まで達していたといわれますが、津軽海峡を渡るまでには非常に長い年月がかかっています。道内で始めて稲作が試みられたのは、江戸時代初期で、道南の一部(現在の北斗市)に限られていたようです。しばらく試行錯誤が続きますが、収穫は安定しませんでした。明治初期、開拓使が米国から招いたホーレス・ケプロンは札幌以北での稲作は不可能と断定、畑作を勧めます。開拓使もいったんは稲作を断念したのです。

しかし、本州からの開拓移民たちの稲作への熱意には強いものがありました。1873年(明治6年)、島松(現在の北広島市)に入植した中山久蔵が、耐寒性の強い「赤毛」という品種を使って、風呂の温水を苗代に注ぐなどの工夫と苦勞を重ねて、道央で初めてその収穫に成功し、そして、道内各地への稲作の普及に情熱を注ぎました。これが、今日の北海道稲作の原点となりました。「中山久蔵」をここに特筆する所以です。

[資料] 北海道水田発祥の地碑は、北海道各地に、その土地の稲作発祥を記念するものとして建てられています。ここには本稿に關係の深いもののみを、以下にご紹介させていただきます。

(1) 「北海道水田発祥之地」碑 (現在の北斗市大野町文月)



(碑文) 水田発祥由来

亀田郡大野村字文月押上のこの地に元禄五年農民作右衛門なる者南部の野田村から移って人々の定着は米にあるとして地を拓し自然水により四百五十坪を開田し産米十俵を収穫した爾来消長あったが後「御上田」と称して現在に及んでいる先人未踏の北辺に今日道産米三百万石の基礎はこうして発祥したものである

渡島支庁長 岡 武夫書

昭和二十四年八月建之

(説明版) 北海道水田発祥の地碑

蝦夷地の米作りには、寛文年間(1661~72)、貞享二年(1685)、元禄五年(1692)の記録がある。水田発祥の地碑は、元禄五年の「松島志」の記録と村民の伝承によって昭和二十四年(1949)に建てられた。

碑文には「押上(文月村)のこの地に元禄五年農民作右衛門なる者南部の野田村から移って、人々の定着は米にあるとしてこの地を拓し、四百五十坪(約15アール)を開田し、道米十俵(現在の二俵程度)を収穫した」と記されている。現在の道産米の基礎はこうして発祥した。

作右衛門の水田は二、三年で廃止され、その後も稲作は失敗と成功を繰り返し、文化二年(1805)には箱館奉行所が大規模な水田開発を行ったが、長くは続かなかった。

嘉永三年(1850)、大野村の高田松五郎・万次郎親子が苦心の末、米の収穫に成功すると、近隣の村々にも広がり、安政元年(1854)以降、米作りはようやく安定した。明治六年(1873)になって、島松(現北広島市)の中山久蔵がこの地の品種「赤毛」で寒地稲作に成功し、米造りは全道各地に広がったのである。

平成十八年三月吉日

北斗市教育委員会

(2) 「寒地稲作記念碑」(左)と「クラーク博士記念碑」(右) (北広島市 旧島松駅通所)



(碑オモテ) 寒地稲作

この地に

始まる

北海道知事 町村金五 (揮毫)

(碑ウラ) 碑文

ここは 明治六年 大阪府出身の中山久蔵が最初に米作を試みたところとして 永く記憶

さるべき地である

当時道南地方を除いては 北海道の米作は危険視され 万全の開拓方針をたてることができなかったが 明治四年 単身率先してこの地に入地し開墾に従事した久蔵は あえてまずここに水田一反歩を開き 種子を亀田郡大野村から求めてこれを試み成功し その安全さを証明したばかりではなく その種子を道内各地の希望者に無償配布して成功せしめたために付近の水田耕作熱は とみに高まり 空知 上川の穀倉を拓く基を開き ついに北海道を全国一の米産地に育てる因を作ったのである。

昭和三十九年九月

北海道大学教授農学博士 高倉新一郎 撰文

鈴木 凌雲 書

建立者 中山久蔵翁記念碑設立協賛会

広島村

<主な参考文献及び参考資料>

- 「北海道の歴史」 榎本守恵著 北海道新聞社
- 「星霜」2 北海道史 明治 2(1875～1885) 北海道新聞社編
- 「北海道の歴史」 田端宏・桑原真人・船津功・関口明共著 山川出版社
- 「北国に光を掲げた人々(19)―北海道の寒地稲作に挑んだ人・北広島市島松の中山久蔵」 堀内興一著 (財)北海道科学文化協会
- 「北海道の夜明け―開拓につくした人びと」 第二巻 北海道総務部文書課編集 理論社刊
- 「日本の農業につくした人々」 さえら伝記ライブラリー29 筑波常治著 さえら書房
- 「開拓使時代」 さっぽろ文庫 札幌市教育委員会編
- 「広島町の歩み」 現北広島市資料
- 「北海道水田発祥の地記念碑」 佐々木 多喜雄 著 北海道出版企画センター
- インターネット資料、他

世界地図に「間宮海峡」の名を残した間宮林蔵の生涯と業績

—江戸時代後期に北蝦夷地探検達成、そして蝦夷地の詳細な測量地図を作成—

■まえがき

北海道庁「赤れんが庁舎」の2階に、「樺太関係資料館」という展示室があります。ここには、間宮林蔵のことが詳しく紹介されています。銅像もあります。<本稿 2 頁に説明・年表・銅像を転載>

今回は、この「間宮林蔵」(1780年・安永9年～1844年・天保15年)の探検と測量の生涯とその業績をたどってみたいと思います。その時代は、開拓使時代(1869～1882)より、さらに一世紀前です…■時代背景

鎖国幕藩体制にとっては、ロシアのカムチャッカ半島・千島方面への進出やサハリンの南下政策は脅威でした。さらに江戸時代中期、多くの外国船が各地に寄港を求めてきます。1789年(寛政元年)6月、ロシア使節ラクスマン一行が、根室を経て箱館来航。1796年(寛政8年)9月、イギリス船プロビデンス号の内浦湾(室蘭)来航。この時、ブロートン船長が有珠山や駒ヶ岳などの火山群に驚き「ボルケイノーベイ(噴火湾)」と命名したといわれます。こうした度重なる外国船出沒に対して幕府は緊張の度を強めて、北辺の警備を急ぎます。幕府は1798年(寛政10年)蝦夷地再調査の上、翌年、東蝦夷地を直轄。松前根室間の道路を整備し、択捉航路を開き、伊能忠敬の東蝦夷地海岸測量(のち間宮林蔵が西海岸を測量)、八王子千人同心子弟の屯田入植、場所請負制度の廃止と直捌き実施、有珠・様似・厚岸に官寺を創建するなどの対策を講じています。

ロシア使節レザノフが長崎に来航したのは、1804年(文化元年)ですが、幕府に国交を拒絶され、憤激のあまり部下にカラフト・利尻・択捉で暴行略奪を行わせています。報をうけた幕府は、1807年(文化4年)松前藩を奥州梁川に移封して、蝦夷地全島を直轄とし、北奥諸藩に蝦夷地を警備させます。

1811年(文化8年)、千島列島を南下したロシア軍艦ディアナ号のゴローニン艦長は国後島に上陸、警備の日本側に抑留されます。ディアナ号は翌年艦長救出に来航、択捉近海で高田屋嘉兵衛を捕らえます。高田の誠実な調停尽力で問題は無事解決し、日露間の緊張は緩和します。それで、幕府は1821年(文政4)蝦夷地を松前藩に返しますが、内外の平穏は長続きしません。国籍不明の外国船が厚岸・有珠などに来航、警備の藩兵と交戦し、津軽海峡にも外国船が出沒し、幕府は松前藩に新たに築城を命じています。ペリー黒船来航の翌年、1854年(嘉永7年)日本は開国、箱館・下田の2港開港となり、幕府は蝦夷地の大部分を直轄し、箱館奉行を置きます。この時、日露間で、千島方面の国境は択捉島とウルップ島の間で決定しましたが、樺太方面は決まらず、課題として残りました。

■ 間宮林蔵の年譜・説明文・銅像

樺太関係資料館 <道庁赤れんが庁舎2階にあります>

1780年(安永9年)

常陸国筑波郡上手柳(現つくば市)の農家に生まれる。父間宮庄兵衛・母(森田)クマ。

1799年(寛政11年) 20歳

村上島之允に随行し蝦夷地(北海道)に渡る。

- 1803年(享和3年) 24歳 蝦夷地御用雇に任ぜられる。
- 1808年(文化5年) 29歳 カラフト探検を命ぜられ、松田伝十郎と共に北上し、6月20日ラッカに至り
カラフトの離島を確認。
- 1809年(文化6年) 30歳 再度カラフト探検を命ぜられ北上、5月カラフトの北端ナニオーに至り、
カラフトが離島であることを再確認。
6月アイヌのコーニらに同行し、海峡を渡り東韃靼に至り、デレンで
満州仮府
の役人と会う。
- 1810年(文化7年) 31歳 村上貞助の協力で、「北蝦夷島地図」、「北蝦夷分界余話」、「東韃地方紀行」
を著す。
- 1814年(文化11年) 35歳 蝦夷地測量。
- 1822年(文政5年) 43歳 松前奉行廃止。江戸に帰り普請役となる。
- 1824年(文政7年) 45歳 安房上総御前備掛手付となり、異国船渡来の噂を内偵のため、東北海岸
を巡視。
- 1826年(文政9年) 47歳 天文方兼書物奉行高橋景保がシーボルトに対し、クルーゼンシュテルン
の航海記と交換に、伊能忠敬の日本地図、間宮林蔵のカラフト地図を贈
ることを約束する。
- 1832年(天保3年) 53歳 シーボルト著「日本」で日本境界略図の翻訳図に「間宮の瀬戸」の名を始
めてヨーロッパに紹介される。
- 1842年(天保13年) 63歳 幕府、林蔵にカラフトおよび東韃靼地域の自製図模写を命ずる。
- 1844年(天保15年) 65歳 2月26日江戸本所外手町の寓居に没する。

＜参考文献「東韃紀行」間宮林蔵著 大谷恒彦訳「教育社」＞

間宮林蔵と樺太

松前藩がクシュンコタン(楠溪)に穴陣屋を設けたのは1679年(延宝7年)のことですが、それ以降も樺太の実態を調査するとともに漁場の開発やアイヌらとの交易もするようになっていました。

しかし、その樺太にもロシアの進出が目立つようになり、幕府は樺太を重要視するようになり、数名に樺太調査を命じていましたが、1808年(文化5年)間宮林蔵は松田伝十郎とともに樺太最北端まで踏破して樺太が離島であることを確認しました。

さらに翌年、間宮林蔵は単身樺太に渡り、北樺太のナニオーから海峡を渡り、黒竜江をさかのぼりデレンまで至りました。この時の記録は「東韃地方紀行」として刊行されましたが、後年シーボルトによって、この海峡は間宮の瀬戸としてヨーロッパに紹介され国際的に有名になりました。

樺太の歴史を語る上で忘れてはならない先駆者の一人です。



■間宮林蔵の生い立ち

1780年(安永9年)常陸国筑波郡上平柳(現伊奈町上平柳)の農家に生まれます。名は倫宗(ともむね)、号は蕪崇(ぶすう)、林蔵は通称です。林蔵は父庄兵衛、母クマの一人っ子として両親の愛情を一身にうけて育ちます。林蔵の祖先は、戦国時代、小田原北条氏の家来である間宮豊前守康俊が、秀吉の小田原攻めに敗れてこの地に落ちのびた末裔と伝えられています。林蔵は幼少より才気煥発、算術の才があり、神童と呼ばれたといわれます。8歳ころから寺子屋に通い、13歳の時筑波山に登り立身出世を祈願したりしたといわれます。

1795年(寛政7年)16歳の時、小貝川の堰止め工事に加わり、出張中の幕府普請役・下条吉之助に地理や算術の才能を認められて江戸に修行に出ます。地理学者村上島之允(1760-1808)に師事して規矩術(三角測量)を学び、1799年(寛政11年)20歳の時、村上島之允の従者として初めて蝦夷地に渡ります。1800年(寛政2年)蝦夷地御用掛雇となり、函館にて伊能忠敬(1745-1818)に偶然会い師事、のち天測術(緯度測定法)を学びます。24歳以降、東蝦夷地・南千島の測量に従事し、26歳の時には、天文地理御用掛として、蝦夷地日高のシツナイに勤務しています。

■蝦夷地測量

1806年(文化3年)、エトロフ島シャナ会所に勤務し測量・新道開発に当たっていた時、幕府から通商の要求を断られたロシア使節レザノフの部下が復讐のため、軍艦によりシャナの会所襲撃した「シャナ事件」に遭遇します。会所は防戦に努めるも、すべてを放棄して敗走、責任者2名が自決。江戸に上り取調べを受けますが、林蔵は徹底交戦を主張したことが認められて咎めなしでした。

■北蝦夷地探検

1808年(文化5年)29歳の時、第1回樺太探検を命じられ、調役下役元締松田伝十郎(1769-1843)と共に樺太に渡ります。伝十郎は西海岸、林蔵は東海岸を調査して6月20日ラッカ岬に至り、宗谷に戻っています。林蔵は再度の探検を願い出て、7月第2回探検に出発して樺太で越年、1809年(文化6年)海峡最狭部を突破して、最北端ナニオーにまで達します。そして、「間宮海峡」をしっかりと確認したのでした。そこからアイヌ酋長の舟で大陸に渡り、黒竜江下流地方を探検、清国の仮役所デレンで清国役人と会見しています。こうして、当時の清、ロシア及び日本の勢力範囲を確認しました。1810年(文化7年)9月宗谷に帰着。村上貞助(1780-1846)と共に、「東韃地方紀行」「北夷分界豫餘話」を編集し、「北蝦夷島地図」を作成しています。

さて林蔵は、この樺太調査には決死の覚悟で出発しています。郷里に戻って墓を建て、再び故郷に生きてもどることは出来ないのではないかという思いがあったようです。

■蝦夷地の測量・詳細な地図の作成

1811年(文化8年)江戸に帰り、「東韃地方紀行」等報告書を幕府に提出。4月松前奉行支配調役下役格に昇進します。この間、伊能忠敬から緯度測定法を学びます。12月江戸を立ち蝦夷地に向かい、松前の獄舎に捕らえられていたロシア軍少佐ゴローニンの尋問を行っています。その後一旦帰府、9月再び蝦夷地に下り、各地の測量を続けます。その後、父庄兵衛の死、伊能忠敬の死を弔うために、江戸に帰っています。

1912年(文化9年)、再度蝦夷地に渡り、3年がかりで、伊能忠敬の未測量地域の海岸や内陸部を歩き回って精密な測量を行っています。1821年(文政4年)完成の忠敬の『大日本沿岸輿地全図』

には、この林蔵の測量が大きく生かされています。この測量の成果はさらに、今日の北海道地図の基礎となる「蝦夷図」の完成となります。林蔵の「蝦夷図」には主な集落の地名が驚くほど精密に細かく記入されています。これは、林蔵が何度も蝦夷地に渡り、約12年間かけて、全道の各市町村をくまなく歩き、正確な測量をした成果なのです。後に、北海道の名付け親として「松浦武四郎」が有名になりますが、この「間宮林蔵」の北海道の精密な測量と詳細な地図作成について、その功績がもっと高く評価されるべき人物であると思います。

■隠密活動

1822年(文政5年)江戸に帰り普請役、1824年(文政7年)安房上総御備場掛手付を命ぜられ、異国船渡来の内偵のため、東北地方の海岸を巡視します。8月母の死を弔い、以後、外国船渡来の風聞や密貿易調査などの隠密活動に従事します。

外国人との文通がご法度の時代、1828年(文政11年)、高橋景保経由で届いたシーボルトの林蔵あての小包を、開封せずにそのまま勘定奉行に報告提出します。このことが発端となって、幕府天文方高橋景保とシーボルトとの交流が明らかとなり、「シーボルト事件」が起こったといわれています。

[注]シーボルト(1796~1866) <ドイツ人医師・博物学者>は、長崎出島のオランダ商館付医師として1823年(文政6)来日<27歳>、内科や眼科の手術を行い、ヨーロッパの科学技術を伝える。長崎奉行の好意より出島を出て、郊外の鳴滝塾で西洋医学・蘭学を教えて多くの弟子を育てます。一方、日本に関するあらゆる分野の資料を収集したといわれます。シーボルトが1826年(文政9)江戸参府の折、幕府天文方書物奉行の高橋景保(作左衛門)と親交を結び、シーボルトは景保に洋書を贈り、景保は見返りに御禁制の樺太・蝦夷・日本地図(伊能図)などを贈っていたことが発覚します。

高橋景保は伊能忠敬の「大日本沿岸輿地全図」を忠敬没後に完成させた優れた学者ですが、捕らえられ獄死(45歳)。その遺体は塩漬け保存の後、斬首刑に処せられたといわれます。一方シーボルトは、1829年(文政12年)追放処分となりますが、帰国後、1832年(天保3年)、その著書「日本」の中で、間宮海峡(まみやのせと)の名を初めて世界に紹介したのでした。

■晩年

酷な人間として非難され、探検家としての名声を失ったといわれます。事件の翌年、幕府から隠密を命じられて長崎に下ります。2年後、隠密として石見国浜田で密貿易事件摘発の発端を掴みます。以後、林蔵は人生の後半を隠密として、諸国を巡り諜報活動をしています。1834年(天保5年)以降、水戸藩へも出入りして、海防問題などを献策したといわれます。

晩年は身体が衰弱し、隠密行動も不可能になったようです。1838年(天保9年)、59歳の時に、長年の激務が祟り病床につきはじめて、6年後の1844年(天保15年)2月26日、江戸本所外手町の自宅で病死します。65歳の波乱に満ちた生涯でした。1904年(明治37年)、正五位の贈位を受けたあと、1910年(明治43年)、志賀重昂らの仲介で「顕彰記念碑」が建てられています。

林蔵には実子がなかったので、分家筋の子孫が継いで現在に至っています。茨城県筑波郡伊奈町上平柳には、郷土の偉人を顕彰する「間宮林蔵記念館」が1993年(平成3年)6月3日(測量の日)に開館しています。また、1971年(昭和46年)に移築・復元された茅葺屋根の農家「生家」

もあります。

林蔵のお墓は、郷里専称寺にあり、両親とともに眠っています。このお墓は、1807年(文化4年)樺太探検に出発するにあたり、林蔵自ら建立したお墓です。身分の低い武士にあった小さなお墓です。

お墓は、1955年(昭和30年)、茨城県の史跡に指定され、郷土の偉人「間宮林蔵」顕彰のため、子孫伊奈間宮家・専称寺の協力を得て、保存・公開されています。

■あとがきにかえて—北海道開拓の基礎を築いた探検家・測量家たち

江戸中期からのロシアの南下に備えるために、幕府は、蝦夷地探検隊を次々に送り込んでいきます。

◇**最上徳内**(1755—1836)、出羽国(山形県)の農家の生まれ。蝦夷地・千島エトロフ探検の先駆者。

生来学問を好み、天明元年(1781年)江戸に出て幕府の医師の下僕となり本田利明に学ぶ。1785年(天明5年)幕府第1回蝦夷地探検に参加、翌年千島エトロフ探検4ヶ月に及ぶ。北辺の急を幕府に報告。1807年(文化4年)ロシア船来航、支配調役として北方警備のことを監察し、またアイヌ交易の改善にも努力します。その後も蝦夷地調査を重ね、1798年(寛政10年)、東蝦夷地探検で近藤重蔵の配下として国後・択捉に渡ったのは、43歳、7度目の渡航でした。

蝦夷地に渡ることに9回に及びました。この探検の成果として「蝦夷草紙」など多くの地誌や地図、アイヌ語事典などを著しています。蘭医シーボルトの信頼厚く、その著書「日本」により、最上徳内は「18世紀における最も卓越した探検家」として海外にも紹介されました。徳内は、江戸の下町でひっそりと81歳の生涯を終えています。

◇**近藤重蔵**(1771—1829)、江戸町方与力、將軍直参旗本の家柄に生まれる。国後・エトロフ探検。

幼時神童と謳われ、13歳にして背丈180 ㍥ 。湯島聖堂の学問吟味に合格、24歳で長崎奉行。27歳、1798年(寛政10年)、東蝦夷地探検で下野源助、案内役の最上徳内らと国後・択捉に渡り調査後、「大日本恵登呂府」の標柱を立てて、調査団4名とアイヌ民族協力者11名の名前を書き連ねたといわれます。帰途、蝦夷地道路開削の最初といわれる広尾の山道三里半を開削、「東蝦新道記」を残しています。

翌年、再び択捉調査にあたり、高田屋嘉兵衛に命じて航路調査をしています。以来5度にわたり蝦夷地探検を行っています。江戸の戻って、幕府の本府を構えるのは石狩川下流が良いと進言しています。これが、後に松浦武四郎らの提言もあって、札幌が首都となる発端になったとされています。

晩年は、55歳の時、長男の殺人八丈島送りの事件で、父親の重蔵も禁固刑の身となり座敷牢の生活となります。3年後、不遇のまま58歳の生涯を終えています。

◇**伊能忠敬**(1745—1818)、下総(現千葉県九十九里町)の生まれ。18歳の時、酒造家伊能家の婿養子となります。忠敬は儉約を徹底して約10年で家業を建て直し、1783年(天明3年)の大飢饉の時(38歳)、私財をなげうって地域の窮民を救済したといわれます。この功績が幕府に認められ苗字・帯刀を許されています。

50歳の時、資産を残して引退。「地球の大きさを知りたい」という好奇心から、本格的に測

量・天文学を勉強するため江戸に出ます。当時浅草に星を観測して暦(こよみ)を作る天文方暦局があったのでした。そこで、当時の天文学の第1人者、高橋至時(よしとき)の門下生となります。時に、至時32歳。忠敬51歳。猛勉強の末、忠敬は巨費を投じて自宅を天文観測所に改造し、日本ではじめて金星の子午線経過を観測したといわれます。

その後、私費で全国各地の測量を行います。羅針で方位を調べ、歩数で距離を測定したのでした。幕府に願い出て、地図作成のため東日本全体の測量許可を得ます。1800年(寛政12年)55歳。江戸を出発。測量方法は、歩幅が一定になるように訓練し、数人で歩いて歩数の平均値を出して距離を計算する方法でした。昼は測量、夜は天体観測して誤差を修正するという努力を、3年間続けて、東日本の測量を終え江戸に戻ります。早速その結果を、師匠の至時と共に最新のオランダ天文学書と照らし合わせて、ほとんど誤差のない正確なものであることに感激したといわれます。しかし、その喜びの中、至時は天文学書の翻訳に無理を重ねて病に倒れ、翌年39歳で病死しています。

半年後、忠敬に、西日本地図作成の幕命が下ります。1805年(文化2年)60歳。再び江戸を出発。

今回はいわば国家的な事業として、100人規模の測量隊で本州・四国・九州へと測量を進めますが、体力が衰え始めた忠敬には過酷なものとなり、内陸部の調査、四国の測量に日数がかかり、九州の測量を終えて、江戸に戻ったのは、1815年(文化12年)2月19日。忠敬は70歳になっていました。

その後、実際の測量の数値の誤差を修正する計算に入ったとき、忠敬は肺病にかかっている、そのまま回復することなく、1818年(文政元年)73歳で病没しています。しかし、高橋景保(至時の息子)や弟子たちは、忠敬の死を伏せて地図を完成させたのでした。

こうして、1821年(文政4年)日本最初の実測地図「大日本沿海輿地全図」が江戸城大広間で公開されたのでした。大図214枚・中図8枚・小図3枚の途方もない規模のものでした。

後に、間宮林蔵の詳細な蝦夷地の探検測量により、補正完成した「大日本沿海輿地全図」により、はじめて北海道の正確な形が明らかになります。

忠敬の遺言「私が大事を成し遂げられたのは、至時先生のお陰である。どうか先生のそばに葬ってほしい」という願い通り、現在も、上野の源空寺に師弟の墓石が並んでいます。

◇**間宮林蔵**(1780—1844)、1799年(寛政11年)4月、初めて蝦夷地を踏査、翌年蝦夷地御用掛雇となり、箱館で偶然、伊能忠敬に会い師事します。以後、12年間にわたり蝦夷地探検・測量をしています。

1808年(文化5年)～翌年、カラフト探検により離島確認。「間宮海峡」の名を残す。〈詳細、本稿参照〉

◇**松浦武四郎**(1818—1888)、伊勢国須川村(現三重県松坂市)の庄屋に生まれる。国内各地遍歴の後、蝦夷地探検をめざします。1845年(弘化2年)以来、探検家として3回、幕府・政府役人として3回、15年間にわたり蝦夷地を内陸部も含めて縦横に踏査して、多くの探検日誌・地図などの優れた著作を残しています。後に、開拓使役人となり、「北海道」の名付け親として有名になります。

〈詳細は、「HOMAS」56号参照〉

■遠くを見つめる間宮林蔵…日本最北端 宗谷岬の銅像と説明板



間宮林蔵渡樺の地（説明板）

時あたかも文化5年4月13日(1808)幕命により間宮林蔵は、松田伝十郎と共に此の地より北蝦夷地(カラフト)探検の途についた。

流水は去ったものの、なお酷しい寒気と荒波の宗谷海峡をのりこえて人情、風俗の異なる北蝦夷に渡り、特に東海岸を隈なく調べた。

この年彼は単身北上して黒竜江をさかのぼり、北蝦夷は大陸と海峡をへだてた完全な独立島であることを発見した。

林蔵の「東鞆紀行」(とうたつきこう)は沿海州地方の世界最初の記録であり、後にシーボルトが「間宮の瀬戸」と名付けヨーロッパに発表してその功績をたたえた。

稚内市教育委員会

<主な参考文献及び参考資料>

- 「北海道の歴史」榎本守恵著 北海道新聞社
- 「続々ほっかいどう百年物語」STV ラジオ編 中西出版
- 「間宮林蔵」吉村 昭著 講談社文庫
- 「間宮林蔵・探検家一代一 - 海峡発見と北方民族」高橋大輔著 中公新書ラクレ
- 「樺太関係資料館」資料 道庁赤れんが庁舎
- インターネット資料など

アイヌ民族保護を訴え続けたジョン・バチラーの生涯と業績

—生活改善・学校・病院の設立に努力、アイヌの父として敬愛されたイギリス人宣教師—

■まえがき

「世界の文化の進歩は、凡ての人が皆生存権を有して居る様に、あらゆる民族もまた民族としての生存権が明らかに認められて参りました。之は当然なことであります。日本人が米国や其の他で、差別的待遇を受けて居ることを聞く時に、ほんとうに嫌な気が致します。日本は、大いにその非を責め、又世界にむかって人類平等主義を主張せなければならぬと思ひます。それをなす前に、同国民であるアイヌ族が持つて生れた其の生存権まで奪ひ去られ、山から山へ追ひ込められて、予防し得る病氣のため地上から滅び行かんとして居る事に注目され、其の開発向上策に誠意を示さるることを希望致します。 —「ジョン・バチラー自叙伝「我が記憶をたどりて」(昭和3年10月発行)より引用—

ジョン・バチラー博士(1854~1944)は、英国聖公会宣教師。23歳で来日して、先住民族アイヌの人々が、和人に土地を奪われ差別と迫害に苦しんでいることを知り、その救済のために北海道各地でキリスト教の伝道と同時に、その生活改善のために、各地に学校(愛隣学校)をつくり無料の病院を設立するなど、アイヌ民族の人権向上のために64年間、伝道・教育・医療などに献身的に努力しました。また、アイヌ語・アイヌ文化の研究、文字のないアイヌ語の世界初のアイヌ英和事典の編纂、出版などにより、アイヌ民族の存在を世界に広めました。

■時代背景

日本の近代化・民主化は、明治維新からはじまりますが、開拓使によって進められた北海道の開拓・近代化政策は、アイヌ民族にとっては新たな侵略支配の苦難の幕開けでしかなかったものでした。

それは、アイヌ人に和人と同様の姓名をつけ、和人の言葉を使い同じ文字を習得させる同化政策による、いわば「植民地支配」でした。また、男性の耳輪・女性の入墨を禁止し、アイヌ民族の伝統的な祭祀や習俗にまで干渉しました。サケ漁やシカ猟の禁止によって、狩猟民族の生活手段を奪い、言語や文化的伝統を根こそぎ破壊しようとするものだったといえるでしょう。

こういう時代の流れの中で、松本十郎判官のようにアイヌの文化に理解を示す人もありましたが、アイヌ民族の人権や文化を守る仕事は、むしろ外国人の宣教師や医師によって始められました。

イギリス人宣教師のジョン・バチラー博士は、64年間の長きにわたり、アイヌの人々のために尽くし、「アイヌの父」と呼ばれました。<バチラー博士については、本稿で詳述します。>

また、同じくイギリスの考古学・人類学者、医師のニール・G・マンロー博士(1863-1942)は、スコットランド出身、エジンバラ大学医学部卒。1892年(明治25年)29歳の時、インド航路の船医として来日、横浜ゼネラルホスピタル病院院長や軽井沢サナトリウム主任医師として働く一方、日本各地の旧石器時代の貝塚発掘などを行っています。1905年(明治38年)には日本に帰化。1932年(昭7)からは、アイヌ民族研究のため、看護師・通訳者として博士を助けた千代夫人(1885-1974)と共に、平取町二風谷に永住して、アイヌ人の衛生思想の普及に努めたり、患者を

無料で診察を続け、「先史時代の日本」「アイヌの信仰と儀式」などの著作も残しています。晩年は体調を崩し、1942年(昭和17年)4月12日、79歳で死去。現在は、ご夫妻共に、二風谷共同墓地に眠っています。また二風谷には、「マンロー博士記念館」・博士が持ってきて植えたといわれるドイツトウヒ並木などが保存されています。

今回は、北海道の「アイヌの父」として敬愛された、イギリス人宣教師ジョン・バチェラー博士(1854～1944)の北海道開拓時代の明治から大正、昭和の歴史に残した偉大な足跡をたどってみたいと思います。

■バチェラーの生い立ち

ジョン・バチェラー(John Batchelor)は、1854年3月20日、英国ロンドン南方サセックス州の田舎町アクフィールド村で、11人兄弟の6番目として生まれます。バチェラー家は、由緒正しい騎士の家系で、当時、両親は毛織物の仕立て業を営んでいました。父は、ハートフィールド市の市長を3期も務めています。信心深い両親は子供たちに洗礼を受けさせて、自由・平等・博愛のキリスト教精神を教え込んだといわれます。バチェラーも、幼いころから、貧しき者・弱き者を助けるように教えられ、虐げられている先住民に大きな関心を持っていたといわれます。当時、世界の覇権国家であった英国は、東洋に多くの植民地を支配しており、多くのキリスト教宣教師を派遣していました。

バチェラーは、14歳で小学校卒業後、弁護士を目指しますが、弁護士試験に失敗したため、大きな農場に職を得て、働きながら夜間学校を卒業します。さらに、ロンドンのイズリントン神学校、ケンブリッジ大学神学部を卒業します。そして、母校の勧めにより、香港にある東洋で働く宣教師養成のための聖ポーロ・カレッジ入学のため、母国を離れて香港へ行くことを決意しました。

1876年(明治9年)9月22日、22歳のバチェラーは、サザンプトン港を出港、11月11日、香港に到着、宣教師養成の神学と中国語の勉強が始まります。しかし、3ヶ月ほど過ぎたころから、香港の気候風土が身体に合わず体調を崩します。夜は、百足・油虫・蚊などに攻められて不眠症になり、そして、マラリアに罹り毎日高熱が続いたといわれます。

■宣教師として来日、函館へ

バチェラーは、英国と気候風土の似た土地へ転地療養を勧められて、日本行きを決めて香港を発ち、1877年(明治10年)3月15日、横浜港に到着します。早速、東京で医者診察を受けた結果、もっと寒冷の地が良いと勧められます。東京以北では、函館にしか聖公会がなかったので、函館行きを決心します。アメリカの小さな貨物船にやっとな乗せてもらって、1877年(明治10年)5月1日、23歳の若き英国聖公会の宣教師の卵として函館に到着したのです。函館では、聖公会北海道伝道の先駆者ウォルター・デニング司祭の指導を受けて、まず日本語の勉強をはじめ、半年くらい経ってからアイヌ語の勉強もはじめたようです。バチェラーは身体が快方に向かうにつれ、伝道の手伝いをはじめています。函館でアイヌ青年と出会い、日本の先住民アイヌの人たちが悲惨な生活と病に苦しんでいることを知り、当時の日本人の差別・偏見に満ちたアイヌ観に衝撃を受けます。

1878年(明治11年)秋、バチェラーは、札幌を訪問して、開拓使長官黒田清隆にも会見しています。その後、日本家屋を1軒借りて札幌に滞在し、対雁(ついしかり)のアイヌ、デンペカ

ら直接アイヌ語を習っています。デンペの案内で対雁を訪ねて、アイヌの風俗習慣などについての見聞を広めています。同年12月、札幌を引き上げて帰函します。この年、正式にアイヌ伝道者に任命されています。

1879年(明治12年)5月、胆振の有珠コタンを訪問、次いで、同年9月、函館聖公会のデニング司祭とともに、平取のアイヌコタンを訪ねて、和人からの差別と迫害を受けながらも懸命に生きているアイヌの人々に接し、これを契機にアイヌへの布教活動を決意します。バチェラーの正義感あふれる人格と熱心に唱えるキリスト教に、ペンリウク首長と平取コタンの人々は心打たれたといわれます。ペンリウク首長は、自分の家を増築してバチェラーの部屋を作ります。バチェラーは12月まで約3ヶ月滞在して、アイヌ語を学んでいます。またこの年、正式に英国聖公会の宣教師に任命され、いよいよアイヌ民族への布教と救済に全力を尽くしていくこととなります。バチェラーは、必死で日本語とアイヌ語を学び、その文化や宗教をよく理解し、アイヌ語で伝道を行っています。平取コタンの人々も、バチェラーを信じ、その話を素直に受け入れて、カムイの信仰と同時に、1人また1人と洗礼を受けたといわれます。1880年(明治13年)、デニング司祭、バチェラーを伴い、再度平取を訪問、帰途、札幌・石狩・室蘭・小樽方面も訪問しています。バチェラーはまた、翌年も平取を訪問、ペンリウク宅に6ヶ月滞在して、アイヌ語を学びつつ伝道しています。

1881年(明治14年)12月～翌年4月まで第1回英国帰国。郷里の家族や知友を訪ねて旧交をあたためた後、ケンブリッジ大学で6週間神学の特別研究をして、さらに、キリスト教を伝道する者には深い知識と教養が必要とされるとして、イズリントン神学校に再度入学して勉強をしています。

1884年(明治17年)元旦、東京英国大使館で、バチェラー(30歳)は、函館宣教師会代表ウォルタ・アンデレスの妹ルイザ((41歳)と結婚式を挙げています。彼女は清純なクリスチャンでした。同年1月下旬、アイヌの生活・風習・文化などを広く紹介した「蝦夷今昔物語」(和綴じ・66頁)を、<函館英国人バチロール>の名で出版しています。その後、夫人同伴で関西旅行、大阪で「アイヌ民族の風俗」について講演をしています。またこの年、夫人同伴で道内各地へ6ヶ月間の伝道旅行をします。

狩猟を禁止されたアイヌ民族の食生活の変化に伴う基礎体力の低下を心配して、バチェラーは、禁酒を強く勧めました。しかしこれが、日本人役人の布教活動に対する介入もあって、告訴事件となり、誤解を受けてコタンの人々との関係もこじれてしまいます。1885年(明治18年)、バチェラーは、住み慣れた平取滞在を打ち切り、室蘭・伊達・白老・釧路・厚岸・網走などのコタンを訪ねて、習得したアイヌ語で伝道して歩きました。

■幌別へ転居

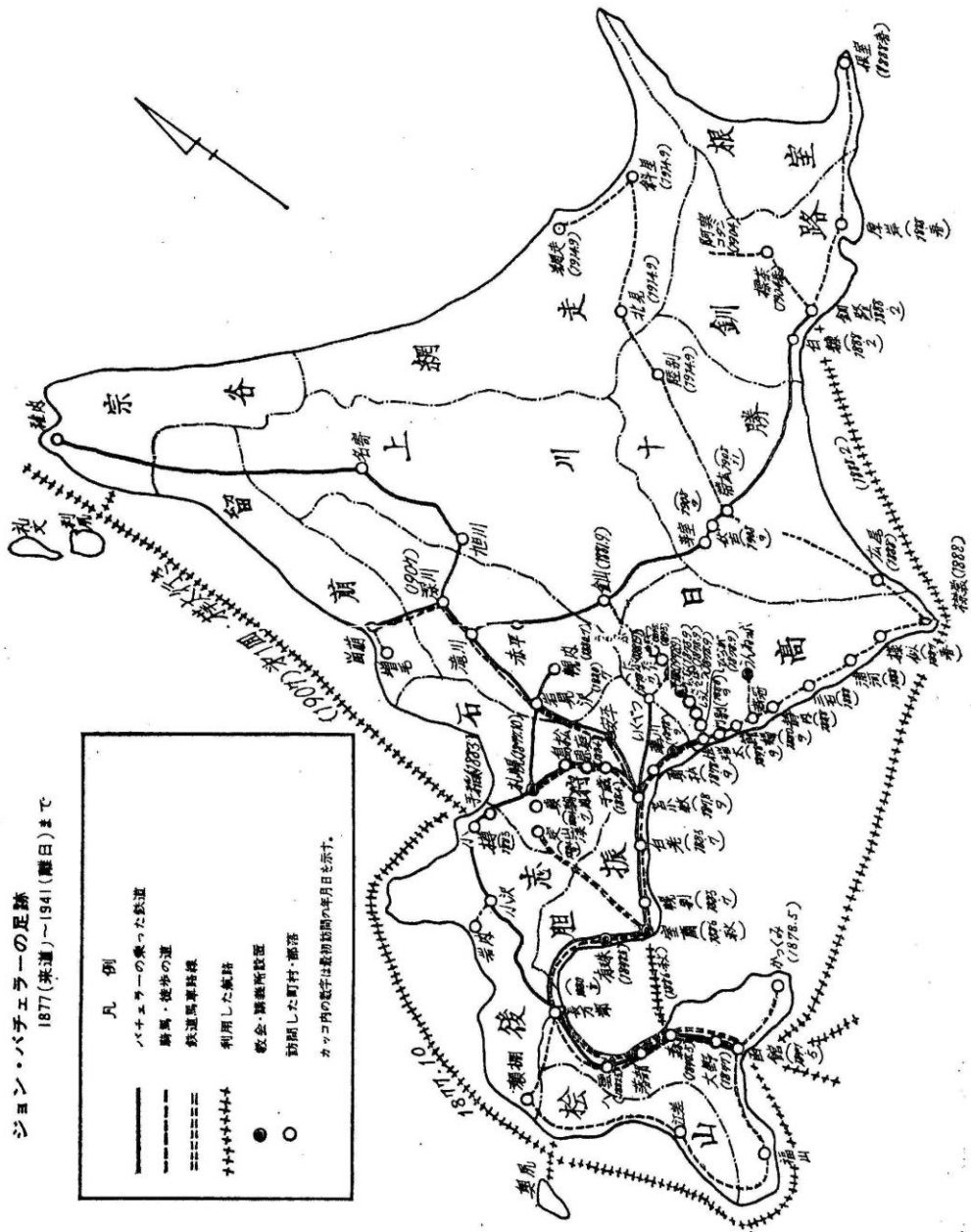
1886年(明19年)5月、バチェラーは、ルイザ夫人・養女キン、召使パラピタ夫妻の5人で、キリスト教布教のため、函館の住居を幌別に移して定住します。以後、札幌に転居するまでの6年間、ここを拠点として、遠くは日高方面までも馬に乗って布教に出かけたといわれます。1888年(明治21年)、バチェラーは、就学率の低いアイヌの子供のために、良心的な和人や伝道教会の募金を元に最初の「愛隣学校」を設立します。これが後の、全道各地のアイヌのための「愛隣学校」のモデルとなり、バチェラーはこの時の経験を活かして各地の指導にあたったといわれます。

1887年(明治20年)バチェラーは、英国の伝道教会から、正式にアイヌ民族の宣教師に任命されています。

この幌別の住居は、当時、その牧場で牛を飼い・農作もしていた邸宅跡の敷石とイチイ・ポプラの木・池の跡などが僅かに面影をとどめていて、現在、史跡に指定されています。

1890年(明治23年)1月～翌年6月下旬の間、バチェラー夫妻第2回の英国帰国。英国で、ある村の牧師を6ヶ月間努めています。また滞英中に、ヨハネ福音書・マルコ福音書などのアイヌ語訳を出版しています。

1891年(明治24年)37歳の時、バチェラーは平取に戻りコタンの人々と再会、ペンリウク首長も6年前の非礼を詫びて快く迎えます。コタンの人々とも信頼関係を取り戻し、以前よりも強い絆で結ばれた平取の人々は、次々とキリスト教に入信し、その数は100人以上にもなりました。1895年(明治28年)5月、バチェラーは、英国の伝道協会の援助を待ちきれず、自費で平取に教会堂を建てました。そして、次の伝道地 伊達町有珠へ向かいます。1896年(明治29年)、ここでも、有珠コタンの信者のために教会堂を建てています。



「ジョン・バチエラーの手紙」(仁多見巖訳編)より転載

■札幌に定住

1892年(明治25年)、バチエラーは、札幌に転居して、さらに伝道活動の幅を広げて、全道各

地、さらに樺太の辺地にまでおよび、樺太アイヌ、ギリヤーク人、オロッコ人などにも布教活動を行っています。1898年(明治31年)札幌に住宅を新築して、ここには離日まで住んでいます。

1896年(明治29年)英国聖公会派遣の、ロンドンの病院で看護婦をしていたエディース・メアリー・ブライアント女史(1859-1934)が来日。約1年半、札幌のバチェラーのもとでアイヌ語を学び、その後、平取に赴任し、13年間アイヌの伝道・医療・私塾を開いて子弟の教育に献身的に尽くしました。

<1900年(明治33年)12月～1902年(明治35年)5月の間、バチェラー第3回英国帰国>

札幌の自宅隣接地にアイヌ人のために、アイヌ民族の家屋様式を取り入れたかやぶきの無料診療所を開設します。バチェラーは、英国の伝道協会にもアイヌ民族の窮状を訴えて援助金を求めています。その経営は苦しく、バチェラーの生活費を削って入院患者の薬代に当てたりしたといわれます。その後次第に協力者も増え、札幌市立病院の関場不二彦院長もボランティア診療をしたため、その評判は全道各地に広まりました。連日遠方から訪れるアイヌの人々で、診療所はいっぱいになり、入院患者の多くがキリスト教の信仰に導かれて、身も心も癒されたといわれます。

さらに、自宅別棟に、「アイヌ・ガールズ・ホーム」を建築して、多くの身寄りのないアイヌの女子児童を引き取り、勉強を教えました。そして優秀な少女、向井八重子を支援して進学させています。

バチェラーは、1906年(明治39年)10月30日、八重子を養女に迎えますが、以後彼女は、バチェラー八重子として父親を助けて、共に各地で講演活動を行い、アイヌ民族の救済を訴え続けています。また、バチェラーは、八重子の弟・向井山雄の才能も見込んで、立教大学文学部神学科卒業まで学資の支援をしています。山雄は1918年(大正7年)卒業後、アイヌ伝道を開始、バチェラーの後継者として活躍します。また、八重子の末の妹チヨもバチェラーの世話のもとで、長じて聖公会牧師 岡村国夫司祭の妻として教会保育園の保母として尽力しています。

1908年(明治41年)12月～1910年(明治43年)4月の間、第4回英国帰国。バチェラーは、ルイザ夫人・八重子を伴って、シベリヤ鉄道経由で帰国。英国帰国直後に、日本から明治天皇下賜の勲四等の勲章が送られて感激したそうです。翌年秋、カンタベリー大僧正より神学博士の学位を贈られます。この間八重子は、バチェラー通訳により英国各地でアイヌについて講演をして寄付を受けています。

日本に帰ると、バチェラーは、明治天皇の観桜御会に招かれて、天皇に拝謁し握手を求められています。こうして、バチェラーは、アイヌ伝道者・アイヌ民族学者・アイヌ問題の権威者として、その名声は、日本全国に鳴り響いていたといわれます。

1920年(大正9年)には、アイヌ民族に中学校以上の教育を受けさせるために、寄宿舎「バチェラー学園」を創設しました。アイヌの子供たちを札幌に集めて、生活費や学費などの経済援助をして中学校以上の学校へ通学させたのです。これには有島武郎も感銘を受け、「惜しみなく愛は奪う」の道内講演旅行の講演料を寄付しています。また資金不足のため、1930年(昭和5年)、新渡戸稲造を会長とする「バチェラー学園後援会」が設立され、活発な募金運動が始められます。各新聞報道もあり、次第に寄付金が集まり、1931年(昭和6年)には待望の財団法人が認可されます。この学園からは、多くのアイヌの青少年が、教師、獣医、無線技師などとして、

世に送り出されたということです。

1923年(大正12年)には、バチェラー70歳で宣教師を退職します。アイヌ民族への伝道と救済に捧げた46年間でした。しかしその後も、バチェラーは札幌に住み、北海道に骨を埋める覚悟をして活動をつづけました。こうして、人生の大半をアイヌ民族のために尽くしたので、「アイヌの父」と呼ばれました。1928年(昭和3年)10月、自叙伝「我が記憶をたどりて」を刊行しています原文ローマ字を日本語文字に清書したのは得能松子でした。その夫は、北海道庁内務部長得能佳吉で、バチェラーによって信仰に導かれたキリスト教信者でした。彼は、後に岩手県知事になっています。また、バチェラーと長年交流のあった徳川義親公爵が序文を寄せています。

1932年(昭和7年)5月、勲三等瑞宝章を贈られます。1936年(昭和11年)4月6日、妻ルイザ(1843, 11, 29生)が、老衰のため92歳で死去します。現在も、札幌円山墓地の「ルイザ・バチェラー之墓」に眠っています。同年(昭和11年)10月～翌年3月の間、第5回英国帰国。そして10月、ルイザ夫人の姪、フローレンス・アンデレスが、バチェラー援助のため来日します。

バチェラーは、アイヌ語の言語学的研究とアイヌ文化の民俗学的研究に多くの優れた業績を残し、日本のアイヌ文化研究の先駆者の1人に数えられています。著書には、アイヌの生活・文化を紹介

した「蝦夷今昔物語」(1884・明17)、そして35歳の時に、北海道庁の依頼を受けて、世界初のアイヌ英和辞典・二万語におよぶ語彙を採録した「蝦和英三対辞書」(1889・明22)を出版しています。また、アイヌ語訳の聖書・賛美歌などもあり、40数冊の著書を出版しています。

バチェラーから洗礼を受けて、平取・旭川近文アイヌ部落で伝道師として布教していた金成マツ(幌別出身・1875-1961)を、1918年、金田一京助博士にはじめて紹介したのは、バチェラーでした。

金成マツは、「私が函館の学校(愛隣学校・7年間)にいけたのは、バチェラー先生が推薦してくれたからです。函館の学校でローマ字を習ったから文字を持たないアイヌの私にもユーカラが書けたんです。経済的にもずいぶん先生のお世話になりました。アイヌのためにただアイヌのためにと、実に熱心に働いた人でしたからね、とても良い人でした。」と述懐しています。金成マツは、金田一京助のアイヌ語研究に協力して多くのユーカラをローマ字で記録して残しました。幌別の「カンナリ家」は、その一族から、ユーカラ伝承者金成マツをはじめ、「アイヌ神謡集」の著者知里幸恵(1903-1922)、「分類アイヌ語事典」などのアイヌ語研究の権威者となった知里真志保博士(東京帝国大卒・北大教授・1909-1961)などを輩出した優秀な家系です。〈金成マツの妹、知里ナミの子が幸恵と真志保姉弟〉

バチェラーの紹介が機縁となり、金田一京助博士が知里真志保を支援したのでした。アイヌ語研究に一生を捧げた知里真志保は、このバチェラーの「蝦和英三対辞書」を土台にして研究を発展させています。このようにバチェラーこそ、わが国の本格的なアイヌ語・文化研究の先駆者といえます。



バチェラー夫妻と八重子(前列右)、弟山雄(後列右)

■向井(バチェラー)八重子(1884-1962)、違星北斗(1902-1929)のこと

八重子は、1884年(明治17年)6月13日、北海道伊達町有珠のアイヌ豪族の父向井富蔵(アイヌ名モロッチャロ)・母フチッセの6人兄弟の次女として生れます。八重子(フチ)・弟に山雄(1890年生まれ)がいます。父富蔵は、バチェラーがはじめて有珠を訪ねた時から知り合いとなり、幼い八重子もバチェラーによくなついていたといわれます。父は、相当な見識を持ち時勢を見る目もあり、財力も胆振国第1位を占めていた時期もあったといわれます。進歩的な人で八重子7歳の時に洗礼を受けさせています。八重子11歳の春、父は死去しますが、遺言により、葬儀はキリスト教で行っています。

その後、家屋敷を騙されて小野正次郎に奪われますが、伊達町の人々はその不正を知って小野正次郎はまったく信用を失ったといわれます。後年、八重子の弟・山雄が伊達町の町会議員となり、父に代わって活動しています。

八重子は、13歳の時札幌に出て、バチェラーの「アイヌ・ガール・スクール」に学び、1902年(明治35年)東京の聖ヒルダ神学校(香蘭女学校)に進学、18歳の時から、バチェラーの聖公会伝道師としてアイヌ伝道に活躍します。1906年(明治39年)10月30日、八重子はバチェラー夫妻の養女となります。バチェラー53歳・ルイザ64歳・八重子22歳でした。その契約書には「向井フチハ養父ジョン・バチェラー、養母ルイザ・バチェラーノ精神ヲ継承シテ同胞ヲ救ハン事ヲ生涯ノ勤メト為シ且ツ之ヲ永遠ニ伝フル事」とあり、八重子は、その通りの生涯を送ったのでした。八重子は、英語・アイヌ語・日本語を使い分けて訪問客や養母ルイザの通訳をしながらアイヌ人伝道に励みます。

1901年(明治41年)、八重子は養父母とともに、シベリア鉄道経由で英国に行き、カンタベリー大主教から伝道師として任命をうけ、滞在中、英国各地で講演を行っています。帰国後は、日本聖公会の幌別・平取の聖公会教会で伝道活動をしています。また、1912年(明治45年)7月、樺太伝道旅行、1919年(大正8年)美唄炭鉱・夕張炭鉱に働く挑戦人労働者への伝道にも出かけています。

八重子は、この頃から同族の悲惨な状態に心を痛めて、折々に詠んだ短歌を保存してしまし

た。それが、金田一京助の知るところとなり、1931年(昭和6年)4月10日、歌集「若きウタリ(同族)に」(竹柏会・東京堂発行)として出版されます。これには、金田一京助・佐々木信綱・新村出が序文を寄せています。これは、アイヌの誇りと悲しみを高らかに歌い上げた歌集で、アイヌ人が、始めて日本語で書いた魂の叫びといわれます。

また、八重子を敬慕していたアイヌ歌人、遑星北斗(余市生まれ・本名滝次郎、1902-1929)は、1914年(大正3年)小学校卒業後、出稼ぎなどで職を転々としませんが、各地でアイヌの地位向上の運動を始めます。1927年(昭和2年)には、平取に滞在してバチラー幼稚園で働いています。翌年には、売薬行商として各地を回ります。その後結核に罹り1929年(昭和4年)、27歳の若さで死亡しますが、アイヌ民族の差別的な状況に激しい怒りの声を投げつけた短歌は、遺歌文集「コタン」(希望社・後年草風館発行)に収められています。(北斗の句碑「春浅き鯉の浦や雪五尺」が余市水族館前に建てられています。また、二風谷小学校前には、短歌2首の歌碑があります。)

1936年(昭和11年)4月、養母ルイザが死去。1940年(昭和15年)養父バチラーの帰国、そして4年後に死去という悲しみに耐えて、八重子は、弟の向井山雄が司祭をしていた有珠のバチラー夫妻記念教会堂近くの自宅で、養父バチラーの愛読書250冊や遺品を守りながら静かに暮らしていました。1962年(昭和37年)4月、たまたま、かつて世話をした韓国人の招きで関西方面へ旅行中、京都で急逝したのです。4月29日死去、77歳の独身の生涯でした。

■バチラーの晩年

時代は、太平洋戦争への突入により、敵性外国人として帰国を余儀なくさせます。1940年(昭和15年)12月、この時、86歳のバチラーは、「必ず戻る」と八重子に言い残して、姪のアンデレスとともに日本を去りました。在日64年間でした。カナダのバンクーバー島の親類宅に2年間滞在します。再び日本に帰りたい気持ちで待機していたのではないかとされています。英国の郷里へ戻ってからも、バチラーは、戦火がおさまったらまた、アイヌの人々のもとへ戻りたいと願っていました。バチラーは、帰国の時も、ルイザ夫人の遺骨は円山墓地に残したままでした。それは、早くから夫妻ともに日本に骨を埋める決意をしていたからでした。英国の郷里アクフィールドの生家で、アンデレスが最後まで世話をしていましたが、1944年(昭和19年)4月2日、脳溢血のために、90歳の生涯を終えています。

その報せが日本に届いたのは、2年後の1946年(昭和21年)8月でした。バチラーを慕うアイヌの人々は、各地で追悼集会を開き、彼の功績を偲んだといわれます。平取町二風谷には、その功績を後世に伝えるため「バチラー保育園」が開設されています。そして、遠く離れた英国アクフィールド村にも、ジョン・バチラー記念碑が建てられています。中央部分に大きな北海道地図が浮き彫りにされ、漢字の「愛」一文字と「ホッカイドウ・ジャパン」という言葉が刻まれています。この記念碑は、平取を中心としたアイヌの人々の献金によって建設されています。「アイヌの父」ジョン・バチラーは、いつまでも、北海道に住むアイヌの人々の心の中に生き続けているといえましょう。

■バチラーを記念するもの

①ジョン・バチラー家跡(史跡：登別市青葉町32-1)

1886年(明19年)5月、バチラーは、家族と共に、函館から幌別に移り、以後、札幌に転居するまでの6年間、ここを拠点として、布教活動をしています。現在、その牧場で牛を飼い、農

作もしていた邸宅跡の敷石とイチイ・ポプラの木、池の跡が僅かに面影をとどめています。(史跡に指定)

②バチェラー保育園 (沙流郡平取町本町 65-2)

1895年(明治28年)5月、バチェラーが、自費で建てた教会堂を記念して、現在、「バチェラー保育園」として運営を続けています。

③バチェラー夫妻記念教会堂(伊達市向有珠 119)

1896年(明治29年)、バチェラーが建てた木造の教会を、1937年(昭和12年)、アイヌ民族で最初の司祭となった向井山雄氏らが、バチェラー夫妻の功績を讃えて石造りの記念堂として改築しました。現在は、「バチェラー夫妻記念教会堂」として保存されています。

④バチェラー博士旧宅(札幌市中央区北3条西9丁目、北大植物園内)

1898年(明治31年)建築のバチェラー博士の旧宅は、もと北3条西7丁目(北海道庁裏)にありました。1941年(昭和16年)の博士の帰国後は、財団法人バチェラー学園が管理、1953年(昭和28年)北海道に譲渡、1962年(昭和37年)に遺品とともに北海道大学に寄贈されて、翌年植物園内に移築。1964年(昭和39年)から1985年(昭和60年)まで、農学部附属博物館分館、通称「アイヌ博物館」として開館されましたが、現在は、一般公開せず収蔵庫として利用されています。非公開ですが、2階には、バチェラー博士ゆかりの家具・写真・図書資料などを展示した記念室があります。

■あとかき

世界の多くの先住民族、アメリカのネイティブアメリカン(インディアン)・オーストラリアのアボリジニ・アラスカのイヌイト(エスキモー)、日本のアイヌ…などが、不当な侵略抑圧をうけてきた歴史的経緯については周知のとおりですが、1993年の「国際先住民年」を契機として、世界の先住民(少数民族)の復権運動に対する関心が高まり、複数の民族が共生する社会をめざす相互理解へのさまざまな取り組みがなされています。

日本では、1899年(明治32年3月2日)以来の「北海道旧土人保護法」が廃止されて、やっと、1997年(平成9)、「アイヌ文化振興法」(アイヌ新法)が成立した今日、単なる伝統的風習への関心や観光的な視点だけでなく、真に差別や偏見を超えたアイヌ民族の文化や生活権を尊重した共生社会が求められているのではないのでしょうか。近年のアメリカ訪問団の来道においても、必ず、アイヌ民族問題がテーマのひとつとして上げられています。

<主な参考文献及び参考資料>

- 「第四集 ほっかいどう百年物語」STVラジオ編 中西出版
- 「ジョン・バチェラー自叙伝 我が記憶をたどりて」文録社
- 「アイヌの父、ジョン・バチェラー」仁多見 巖著 楡書房
- 「ジョン・バチェラーの手紙」仁多見 巖訳編 山本書店
- 「開拓につくした人びと」第七巻 北海道総務部文書課編集 理論社刊
- 平取聖公会宣教百三十周年記念誌「主に愛されて生きる」(日本聖公会北海道教区平取聖公会)
- 「郷土史ふれない」振内郷土史編集委員会編
- 「語りつぐ平取」平取町編集発行
- 平取町二風谷の現地取材資料
- インターネット資料など

アメリカ人宣教師ピアソン夫妻の生涯と滞日 40 年間の業績 ー北海道各地で、過酷な生活を続ける開拓者たちに愛と忍耐と勇気の伝道活動ー

■まえがき

アメリカ人宣教師ジョージ・ペック・ピアソン(George Peck Pierson) (1861～1939)は、米国ニュージャージー州エリザベス市の長老派教会牧師の家庭に生れ、1888年(明治21年)、日本伝道の命を受けて来日、東京の明治学院などで教えた後、1893年(明治26年)北海道に渡り、函館・室蘭・小樽・札幌・旭川・北見の各地で、過酷な生活に苦しんでいた開拓者たちに、愛と忍耐と勇気の伝道活動を続けました。ピアソン夫妻の活動は、明治の女子教育、監獄への訪問、廃娼運動にまで及ぶ40年間にわたるものでした。

今回は、このジョージ・ペック・ピアソン(1861～1939)と米国聖公会婦人宣教師アイダ・ゲップ(Ida Goepf) (1862～1937)夫妻の北海道における伝道活動を中心に、北海道の開拓に貢献したその生涯と業績をたどってみたいと思います。

■時代背景

明治政府の開拓使設置(1869年<明治2年>7月)によって本格的に進められた北海道の近代化の歴史を直線的に語ることはできません。幕末から困難な開墾に苦悩してきた開拓移民の歴史、先住民アイヌとの交流、さらに屯田兵制度による開拓政策などいろいろな側面があります。また多くの外国人指導者・宣教師などが、北海道開拓に果たした役割・業績にも大きいものがあります。

ペリー来航(1853～54)によってもたらされた開港を契機として、明治政府は急速な近代化を迫られます。そのために、先進諸外国より多くの指導者・技術者を招聘し、「お雇い外国人」として雇用しています。全国的な外国人雇用は、広範な分野にわたり、その実態を把握するのは、資料的に難しいのですが、ユネスコ東アジア文化研究センター「資料御雇外国人」には、1868年(明元)～1889年(明22)の間の官・公・私雇合計2,299人という記録があります。

そして、北海道開拓使「お雇い外国人」は、1871年(明4)～1881年(明14)の10年余の短期間に78人を招聘しています。これは、ロシアの南下政策に危機感を抱いた明治政府が、北海道開拓を急務としたことによります。78人のうち、48人までがマサチューセッツ州を中心としたアメリカ人でした。この経緯については、これまで詳細に取り上げてきましたので割愛しますが、今回は、アメリカ人宣教師夫妻の北海道開拓に果たした、献身的な貢献とその業績に着目したいと思います。

■ピアソンの生い立ち

ジョージ・ペック・ピアソン(1861～1939)は、1861年1月14日、米国ニュージャージー州の首都エリザベス市に、長老派教会牧師の息子として生まれました。南北戦争(1861-1865)が始まった年でした。

アメリカでは、この南北戦争で流された多くの血により、キリスト教会の平和を願う信仰復興・国内外への伝道が一層盛んになったといわれます。

大学教授の祖父、牧師の父を持つピアソンは、幼時から熱心なキリスト教徒として育てられ

ます。ピングリー中学校でピューリタニズムの信仰と豊かな知性・特性を磨き、1882年(明治15年)ニュージャージー大学(現プリンストン大学)卒業、4年間教職に就きます。その後、プリンストン神学校(1885-1888)に学びます。このころ、ドイツ人宣教師が日本語に翻訳した日本語の聖書と出会います。現在でも、世界に僅か16冊しか残っていないという貴重な聖書を、牧師の父から貰い受けたのです。これが、遠い東洋の島国「日本」との最初の出会いで、まだ見ぬ日本への憧れとなったといわれます。1888年(明治21年)神学校を卒業したピアソン(27歳)は、6月21日エリザベス市のウエストミンスター長老教会で父から牧師の資格を受け、同時に長老派教会海外伝道の日本派遣宣教師に任命されます。ピアソンは、さっそく胸躍らせて、日本行き準備に取り掛かったといわれます。

■宣教師として来日

1888年(明治21年)8月21日、米国長老派教会宣教師ピアソンを乗せた船は、横浜へ向けて出港します。秋風の吹く横浜港に着いたのは、約1ヶ月後の9月10日でした。到着して10日目に、長旅の疲れなどが重なって腸チフスに罹り、1ヶ月間、生死の境をさまよったそうです。回復後は、助かった命を神に感謝し、日本人のために尽すことを改めて、心に誓ったといわれます。

最初は、明治学院で英語・新約聖書を教えますが、島崎藤村、戸川秋骨もその講義を受けています。ピアソンは、日本語の勉強に打ち込み、ずば抜けた日本語の語学力を身につけたといわれます。その能力の高さは、後に皇室からの通訳の要請を受けるほどのものでした。しかし当時、キリスト教の弾圧が強まり、ミッションスクールである明治学院の生徒数は激減し、ピアソンは、明治学院を去ることになります。

1890年(明治23年)5月から、千葉県尋常中学校の招きで英語教師となり、そのかたわら千葉、佐倉などの田舎伝道活動を行います。1892年(明治25年)、米国オランダ改革派教会宣教師ミラー夫妻の要請を受けて盛岡に移り、東北農村の伝道活動を続けています。そこで、多くの若者達が北海道開拓に向かうのを知り、ピアソン自身もいよいよ北海道へ行くことを決意します。

<1893年・明治26年、休暇で一時帰国しています。>

■北海道 函館、小樽へ

1892年(明治25年)31歳の時、ピアソンは、北海道に渡り調査しています。1893年(明治26年)、函館に居住して、室蘭・伊達地方まで伝道に出かけています。北海道の開墾・開拓に苦勞している人々に熱心に語りかけています。さらに小樽・札幌にも伝道に出かけています。

1894年(明治27年)、ピアソンは、小樽(現小樽駅前中央通)に住居をかまえ、札幌を中心に道央・道南に伝道活動の範囲を広げます。また小樽のミッションスクール静修女学校(創立者のロース宣教師死去のため短期間。現在はロース幼稚園として残る)の設立に協力し、学生への伝道にも力を入れました。

1895年(明治28年)2月頃から健康を害し札幌に転居、6月12日に米国聖公会宣教師アイダ・ゲップと東京で結婚します。ピアソン33歳、アイダ32歳でした。この出会いは、その後の数々の困難に立ち向かう布教活動の新たな出発点となります。

<宣教師団主治医から約1年間の静養を勧められ、6月15日にアメリカへ新婚旅行で帰国、翌年日本に戻ります。>

■アイダ・ゲップの略歴

アイダ・ゲップ(1862-1937)は、1862年4月21日、米国ペンシルベニア州フィラデルフィアで弁護士家庭に生まれ、7歳の時母の死によりドイツ在住の叔母のもとで育ち、シュトゥットガルト高校を卒業。その後、ニューヨークに戻り、ハンター・カレッジに進学、1883年(明治16年)卒業。1890年(明治22年)米国聖公会宣教師として来日し、日本語・女子教育研修後、9月からセント・マーガレット女学院(立教女学院)の英語教師となります。そして1894年(明治27年)、福島に移り、伝道活動に専念していました。アイダは、強い自尊心と使命感に満ちた、多弁・雄弁でエネルギッシュな女傑であったといわれます。＜後に、温厚なピアソンは、自分は結婚以来ずっと彼女の後に坐りっぱなし・・・などと述懐しています。＞

■札幌、旭川へ

1897年(明治30年)、札幌中央区北4条西1丁目、スミス女学校宣教師館)に移ります。サラ・クララ・スミス(1851-1947)が、明治20年に開校した札幌のスミス女学校(現在の北星学園)で教えながら、道内各地で伝道活動を行います。この間、札幌農学校(現北海道大学)でも教えています。アイダも札幌農学校でドイツ語を教え、学生の中に有島武郎もいたということです。

1900年(明治33年)、ピアソン夫人は、3月、「アイヌと悪しき飲酒」・4月「廢娼とアイヌの飲酒」などを発表しています。

1901年(明治34年)3月、旭川(旭川市2条通11丁目)に転居。旭川では、13年間伝道活動を行っています。その後、活動の領域をさらに広げて、山口庄之助牧師と共に、遠軽・野付牛地域、道北の美深・名寄・士別地域などの農村開拓者への巡回伝道に出かけています。また旭川中学校で英語を教えています。この間、アイダは第七師団の将校にドイツ語を教えています。

1902年(明治35年)3月、旭川キリスト教婦人矯風会設立、11月16日、坂本直寛<50歳・坂本龍馬の甥>が牧師として旭川教会に着任し、以来協力して軍隊・監獄伝道、廢娼運動を推進することとなります。第7師団の軍人たちへの伝道は、キリスト教弾圧の厳しい本州とは違い、ピアソン夫妻は快くむかえられました。軍人の多い旭川での遊郭廢止・廢娼運動は難航しました。遊郭そのものが女性人身売買の非人道的なものとして、特に夫人は強く住民に呼びかけて嘆願書を国会に送り、道庁にも訴えましたが、結局願いは叶わず、遊郭は公認されたのでした。

1903年(明治36年)「旭川聖書館」を建て、聖書普及・文書伝道に努めています。また、英国聖公会宣教師ジョン・パチェラーと協力して近文のアイヌ部落の伝道にも出かけ、アイヌの生活援助・教育支援も続けています。酋長の娘で夫に先立たれた婦人をメイドとして引き取り、アイヌの孤児も我が子のように育て、帰国するまで生活を共にし、教育もしています。

＜1904年(明治37年)2月、ピアソン夫妻休暇で帰国、翌年6月日本へ帰国。＞

1907年(明治40年)帯広の十勝監獄教誨師となり、10月5日、坂本直寛牧師とともに、ピアソン夫妻に伝道の機会が与えられました。日曜日の朝、監獄大ホールで800余名の囚人に説教をし、さらに囚人たちの求めに応じた説教に、多くの囚人たちは自分達の罪を悔いてむせび泣き、さらに看守・職員までもすすり泣いたということです。その後、約500名が入信する決心をしたといわれます。

この帯広監獄伝道の1件は、全国に広まり、ピアソン夫妻は一躍全国的に有名になりました。

ピアソン家には、この時の囚人たちが出獄後にお礼として持ってきた家財道具が多くあり、その後もまた訪ねて来る者は後を絶たなかったといえます。

1908年(明治41年)10月、小樽港より宗谷海峡を経てオホーツク沿岸各地、北見枝幸、雄武、湧別、佐呂間、野付牛、美幌地域の巡回伝道を行い、帰路は陸別より鉄道を利用して池田、帯広を経て旭川に戻っています。1910年(明治43年)3月25日、小樽静修女学校卒業式(卒業生8名)にピアソン出席。1912年(大正元年)には、長年にわたる「略註旧新約聖書」編纂などの業績により、プリンストン大学神学博士称号を受けています。 <1913年・大正2年3月、休暇で帰国しています。 >

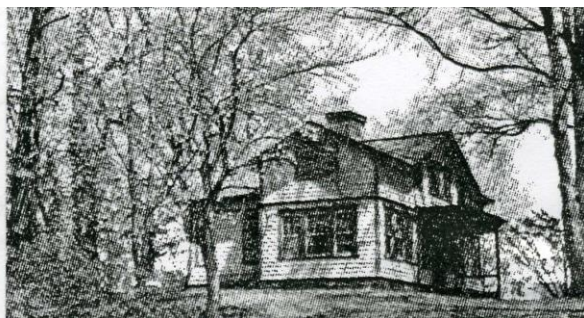
■そして、北見へ

1914年(大正3年)5月、ピアソン夫妻は、13年間住んだ旭川を去り、さらに奥地の野付牛(現在の北見市)に転居します。この地は、明治30年頃から屯田兵や、四国高知から入植した開拓移民団「北光社」(坂本龍馬の甥、坂本直寛を社長とする開拓団)のキリスト教部落がありました。新しい「聖なる村」建設の理想を掲げて入植していることもあり、彼ら開拓団の励ましのため北海道最後の拠点と決めたとされます。その後のピアソンの地方への訪問伝道活動は、道北・道東各地の辺境の地にまで及びます。1916年(大正5年)1月、紋別劇場で伝道集会を開催しています。また、このように多忙な伝道の合間に完成させた「略註旧新約聖書」を、この年6月に自費出版しています。

1914年(大正3年)に、この伝道活動の拠点となる大きな家「ピアソン館」を建てています。それは、現在の北見市の、榆や柏が生い茂る小高い丘の上に建てられたスイス山小屋風の木造2階建の家でした。人々は、この二人の白人の外国人の住宅に対して、最初は遠巻きにみていました。しかし、その後ガス灯を壊したり、庭の植木を引き抜いたりなどの嫌がらせが続きますが、ピアソン夫妻の熱心な伝道に、次第に北見の人々も心を開くようになり、多くの人々がピアソン家を訪れるようになったのです。後には、この御殿のような西洋館は、庭に3本の柏の大きな木があることから、「三柏の森」と呼ばれ親しまれたそうです。



ピアソン夫妻



現在のピアソン記念館

特に、若い世代への伝道に力をいれ、野付牛中学校(現北見北斗高校)の学生のために、「学生寮」を自費で建築します。遠くから通う貧しい子供たちを無料でお世話したのでした。

また、ハッカと木材の好景気に沸いた北見に、料亭の主人等が積極的に動いて遊郭設置の話

が持ち上がり、1916年(大正5年)、夫人は堅い決意で反対運動に立ち上がり「婦人矯風会野付牛支部」を結成して反対運動を展開しました。買い集められた農家の若い娘達を、大金をはたいて連れ戻し、帰るところのない娘たちは、確実な落ち着き先が見つかるまで、自宅にかくまいました。その噂は町中に広まり、恨みを買ったピアソン夫人が、料亭の主人に棍棒で殴られて大怪我を負うという事件まで起きています。しかし、ついに北見の町に遊郭は出来ませんでした。

1918年(大正7年)7月13日、内村鑑三を招き、野付牛で講演会を開催。この年、「北光社」開拓団の人たちのため、訓子府伝道所を開設しています。さらに、若い世代への伝道に力をいれ、1924年(大正13年)には、野付牛中学校(現北見北斗高校)生徒のために、「ピアソン寮(学生寮)」を自費で建築します。寮父には野付牛中学校の佐藤猪之助校長を迎えています。そして、遠くから通う貧しい、多くの子供たちを無料でお世話したのでした。

ピアソンは、もっとキリスト教を学びたい日本人のために多くのキリスト教関係図書・聖書などを集めた「聖書館」をつくり、また長い期間をかけて自分なりの解釈で、日本語の「ピアソン聖書」(「略註旧新約聖書」編集の大事業)を執筆しました。これは、長年、人を信じ深く愛する心で伝道を続けてきた成果で、後々、多くの人々の心の糧となったといわれます。(こうしたピアソンの業績にたいして、母校プリンストン大学から、神学博士の称号を贈られたのでした。)

1926年(大正15年)8月15日、野付牛町の開町30周年記念式典で、ピアソンは、開拓功労者の一人として表彰されています。 <1928年(昭和3年)6月、ピアソンは宣教師を引退。>

■晩年

1928年(昭和3年)5月10日、ピアソン夫妻の盛大な送別会。北見の人々に慕われ尊敬されたピアソン夫妻は宣教師の任務を終えて、15年間住みなれた北見を去り、アメリカに帰国します。ピアソン67歳。妻66歳。5月15日出発の日には、大勢の人々が北見駅に集まって賛美歌を合唱して、涙を流して別れを惜しんだのでした。ピアソンは、最後に「これで私たちがいる遠いアメリカを見てほしい」と言って、望遠鏡(現在、ピアソン記念館にあります)を託して目にいっぱい涙をためていたといわれます。こうして多くの迫害と困難を乗り越えて伝道を続けてきた滞日40年、そして各地域での住民との楽しかった思い出を胸に日本を離れたのでした。

帰国後は、ピアソン夫妻は、夫人の故郷フィラデルフィアに居住し、著作活動に専念したようです。1937年(昭和12年)3月13日、夫人アイダ・ゲップ・ピアソンが死去(74歳)。翌年1938年(昭和13年)、ピアソン夫妻共著の「Forty Happy Years in Japan(楽しかった日本の40年)」を出版しています。そして、1939年(昭和14年)7月31日、ジョージ・ベック・ピアソンが、フィラデルフィアで、糖尿病のため78歳でこの世を去りました。

■ピアソン夫妻を記念するもの

①ピアソン記念館(北見市幸町7丁目4-28)

ピアソン夫妻が15年間暮らした私邸。榆や柏の大木に囲まれた木造2階建の西洋館で、1914年(大正3年)建築家ウィリアム・メレル・ヴォーリズ的设计により建設されました。1970年(昭和45年)北見市が、私邸を記念館として復元、翌年6月、ピアソンの遺品や活動を紹介する「ピアソン記念館」として開館しました。記念館までの通りは、「ピアソン通り」と命名されています。現在は、NPO法人ピアソン会の管理。2001年(平成13年)10月22日、北

海道遺産に選定。

②1969年(昭和44年)6月12日、米国ニュージャージー州エリザベス市と北見市は姉妹提携を結んでいます。現在も交流が続いています。

<主な参考文献及び参考資料>

□「第4集 ほっかいどう百年物語」STVラジオ編 中西出版 □「田舎伝道者—ピアソン宣教師夫妻」小池創造著 北見教会出版 □「G. P. ピアソン小伝」小池創造著 北見市ピアソン記念館発行 □「六月の北見路」ピアソン著 小池創造・吉田邦子訳 □「ピアソン夫妻と私邸設計者ヴォーリズとの接点」久保勝範 北見市史編さん事務室発行 □「北見市史」下巻 北見市史編さん委員会 □「北見現代史」北見現代史編集委員会 □「楽しかった日本の40年」(翻訳改訂版(使徒はふたりで立つ) 小池創造・小池 榮訳 日本キリスト教会北見教会ピアソン文庫出版 □「ピアソン夫妻を巡る証言集 三柏のもり」NPOピアソン会編集発行 □「日本 北海道 明治四十一年」翻訳 北原 俊之 NPOピアソン会発行 □ 各地の現地リサーチ資料 □ インターネット資料など